

上田秋成の俳業―漁焉から無腸への転換―

博士課程後期課程

文学研究科文学言語学専攻

1015

村田 俊人

# 博士學位論文「上田秋成の俳業―漁焉から無腸への転換―」要旨

関西学院大学大学院文学研究科文学言語学専攻 村田 俊人

上田秋成は『雨月物語』『春雨物語』を生み出した小説作者として名高い。また、秋成の文事は、小説のみならず国学・和文・和歌・俳諧などにおよぶ。それらの著述に関して、現在まで多くの研究成果が蓄積されている。一方で、俳諧作品およびその周辺についての研究は、未だ十分ではない。これには、様々な理由が考えられるが、その一つに秋成が特定の俳系に属していなかったことが挙げられる。しかしながら、秋成の文業の全体像を明らかにするうえで、この研究は避けては通れないものといえる。そこで、本稿では、秋成が宝暦末に文業を転換させた理由や、秋成の俳業について、俳諧作品およびその周辺の事象の分析を通して明らかにすることを目的とした。

第一章では「漁焉の俳諧」と題し、播磨の俳人滝瓢水の追善集『おそねはん』に秋成が寄せた発句を紹介し、宝暦期末に秋成が俳壇から距離を置いたのは、瓢水のほか、高井几圭や小野紹簾といった親交のあった宗匠達が相次いで死没したことが背景にあることを指摘した。また、宝暦から明和にかけて、大坂俳壇で蕉風復古の動きが活発化したことも、

秋成を新たな文事に向かわせる契機の一つとなったと推察し、その後の安永二年（一七七三）の「無腸」改号や、国学研究の深化および和歌和文の創作の本格化へと繋がっていったと考察した。

第二章は「無腸改号後の俳諧」と題し、秋成が「無腸」と改号した後の城崎旅行で、自己の学芸の問い直しを試み、挫折したことを指摘した。また、同旅行を題材とする紀行文『去年の枝折』と『秋山記』を対照させ、『去年の枝折』翻刻の誤りを正し、後半の旅程を整理した。その上で、芭蕉や蕉門の漂泊批難を経て、作品後半部で無腸独自の俳諧世界を志向していることを指摘した。さらに、『去年の枝折』所収句は、『秋山記』所収歌の典拠と共通するものがあり、かつ古歌や俳諧を自在に典拠とすることを確認した。それに加えて、秋成の俳諧が「外部志向をもっていない」とする高田衛氏の指摘と異なり、『吉野山の詞』発句は文人たちとの交流をふまえて作られていることを述べ、秋成の俳諧の風流が外部に向かって発揮されることがあったことを確認した。

第三章は、「秋成と俳諧」と題し、第一節『也哉抄』に見る秋成の文芸論」で、俳諧語法書『也哉抄』を通じて、秋成の文芸論を考察し、語の「本義」を最重要視しながら、己の「心」を様々な文芸様式で表すことを理想としていたと論じた。第二節『俳調義論』に見る俳諧

観」では、晩年の自作自撰句集『俳調義論』は、秋成の筆蹟を求める動きに応じて成立したことを指摘した。次に、作品中の句評から、秋成は、上方俳壇における自派の權威づけのための宗因顕彰の動きに批判的であったことを確認した。また、秋成の句評を分析し、日常語の意外な取り合わせと、自然な言葉づかいによる表現を重視する俳諧観が窺えるとした。これは『也哉抄』の統論と共通した考えであることを指摘した。第三節「無腸の俳業」では、几董編『続あけがらす』に入集する発句の検討を通じて、秋成の俳風が融通無碍な側面をもつことを指摘した。さらに、秋成の和歌に見られる俳諧趣味や小説的要素から、俳諧経験が和歌にも影響していたこと、それに止まらずに秋成が和歌の研鑽を重ねた結果、秋成独自の自在な歌風が創り出されたことを結論とした。

目次

序論	1
----	---

第一章 漁焉の俳諧

第一節 瓢水追善集『おそねはん』にみえる秋成追悼句の意味	13
------------------------------	----

一、『おそねはん』と秋成発句	14
----------------	----

二、漁焉の転機	17
---------	----

第二節 文業の転換点―宝暦明和の大坂俳壇と漁焉―

はじめに	23
------	----

一、大坂俳壇進出前の淡々	25
--------------	----

二、享保期末の大坂俳壇	38
-------------	----

三、淡々の大坂俳壇進出と紹廉門	43
-----------------	----

四、紹廉と秋成	46
---------	----

五、宝暦末の大坂俳壇と秋成	60
---------------	----

六、秋成と明和期以降の京・大坂俳壇	65
-------------------	----

おわりに	83
------	----

## 第二章 無腸改号後の俳諧

### 第一節 無腸の城崎行―『雨月物語』所縁の地の探訪

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

一、磯良像との関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88

二、嘉吉の乱との関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92

三、館（屋形）での挫折・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・108

### 第二節 『去年の枝折』論―後半部を中心に―

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115

一、『去年の枝折』の諸本・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・116

二、『去年の枝折』及び『秋山記』後半の行程・・・・・・・・・・・・・121

三、『去年の枝折』前半部の意図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123

四、『去年の枝折』と中国文学の利用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・127

五、『去年の枝折』と古典利用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131

おわりに・・・136

第三節 『去年の枝折』所収俳諧の再検討

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140

一、『秋山記』と『去年の枝折』の構造・・・・・・・・・・・・・141

二、『去年の枝折』冒頭部と『秋山記』冒頭部の『万葉集』利用・・・・・・・・・・・・・148

三、『去年の枝折』の俳諧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・154

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・175

第四節 『吉野山の詞』発句考

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・179

一、書誌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・180

二、秋成の書の評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・183

三、『吉野山の詞』冒頭部の文章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・185

四、『吉野山の詞』末尾の発句・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・191

五、『俳調義論』中の異文との比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・197

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・200

### 第三章 秋成と俳諧

#### 第一節 『也哉抄』に見る秋成の文芸論

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・203

一、『也哉抄』の主旨・・・・・・・・・・・・・・・・205

二、『也哉抄』の内容・・・・・・・・・・・・・・・・210

三、『みなし蟹』の『也哉抄』批判・・・・・・・・217

四、秋成の文芸論・・・・・・・・・・・・・・・・222

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・227

#### 第二節 『俳調義論』に見る俳諧観

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・230

一、書誌・・・・・・・・・・・・・・・・231

二、道彦の意図・・・・・・・・・・・・・・・・236

三、前半の意図・・・・・・・・・・・・・・・・242

四、後半部の芭蕉・宗因句評の意図・・・・・・・・251

五、秋成の宗因観・・・・・・・・・・・・・・・・258



[illegible]

## 序論

上田秋成は『雨月物語』等の小説の作者として知られる。しかしながら、秋成の文事は、小説のみならず国学・和文・和歌・俳諧などに多岐におよぶ。また、秋成は、特異な個性の持ち主だったことでも有名で、一般的には狷介固陋な人物、孤高の作家と見られがちである。しかし、実際は、歌会や和文の会、俳諧の座や茶会などで、十八世紀後半の同時代の文人たちとの交友があった。そのため、現在まで作品面・人物面ともに膨大な量の研究が発表されている。それ故に研究史も複雑なものとなるが、『新版近世文学研究事典』（おうふう、二〇〇六年）では、長島弘明氏が秋成文学のジャンル毎に、嶋田彩司氏が『諸道聴耳世間猿』『世間妾形気』について研究史をまとめている。それらをふまえて研究者間の共通理解となっている業績を確認し、最近の研究の動向も紹介しながら、俳諧研究の問題点を挙げる。

伝記面は、この三十年の間に進展した研究分野の一つである。秋成の出生については、江戸時代以来、大坂曾根崎に私生児として生まれたという説がまことしやかに語られるなど、謎の部分が多かった。しかし、高田衛氏が、実父小堀正報、実母は大和国名柄村庄屋

末吉家の娘という説を提起した（１）。その説をふまえ、長島弘明氏が調査し、実母は末吉家縁戚の松尾家の娘ヲサキであると確定した（２）。なお実父の小堀正報説はほぼ否定され、今に至るまで父親は未詳である。

他に、国学の師加藤宇万伎への入門年次について、諸氏の考察が盛んに行われた。これは『雨月物語』や『世間妾形気』における国学の影響と関係するからであった。丸山季夫氏が明和七年説（３）を、中村幸彦氏が同四年説（４）を、高田衛氏が同三年説（５）を唱えたが、長島氏が明和八年説を提起し（６）、根来（辻村）尚子氏がこれを追認し（７）、現在まで有力とされている。ただ、伝記研究全体に関しては、各項目に増補・補正は見られるが、高田氏の『上田秋成年譜考説』とその補遺二篇が最も詳細で、現在に至るまで基本線となっている。

小説の研究については、『雨月物語』から『春雨物語』へと関心が移ってきている傾向がある。『雨月物語』については、中村幸彦氏の『日本古典文学大系 56 上田秋成集』（岩波書店、一九五九年）以来、詳細な典拠研究と注釈研究を中心に展開した。その後、高田衛氏が『上田秋成研究序説』（寧楽書房、一九六八年）で、作者の「私憤」という人間観が作品創作の動機として読み取れるとした。また、鵜月洋氏の『雨月物語評釈』（角川書店、一

九六九年）では、その時点での注釈研究が集約され、中村博保氏補筆部で各話の小説構造の解説がなされたことで、以後の作品論に影響を与えることとなった。

一方の『春雨物語』については、戦前は五篇（うち一篇は未完）を収める所謂富岡本が知られるのみであったが、戦中に数種の自筆稿本の断片（春雨草紙、天理卷子本、天理冊子本）が紹介され、さらに戦後、文化五年（一八〇八）の秋成奥書の転写本三種類（文化五年本）が次々と発見された。その後中村幸彦氏の前掲書により富岡本の不足を文化五年本で補った新しい本文が提供され、その時点での注釈の成果が示された。同時期に浅野三平氏『上田秋成の研究』（桜楓社、一九八五年）らによって典拠研究が進展したが、作品論は『雨月物語』や秋成の他作品との比較によって論じられるものが多かった。しかし、『雨月物語』注釈および典拠の研究が一段落して以降、『春雨物語』独自の物語構造の把握に研究の重心が移った。以後はさまざまな研究方法が試みられている。なかでも諸本論・本文論が盛んであるが、諸本対校による本文論を押さえながら、典拠研究と作品研究の融合を進めていく木越治氏『秋成論』（ぺりかん社、一九九五年）等がある。平成に入って、木越氏や長島氏等によって、富岡本最終稿本説が問い直され、文化五年本の本文を再び評価する動きが出てきた。これにより、文化五年本を底本とする井上泰至氏・一戸渉氏編『春雨

物語』（三弥井書店、二〇一二年）の注釈書が刊行された。また、新版の『上田秋成全集』（中央公論社、一九九一〜九五五年）八巻に、全ての稿本が翻刻され、各稿本の作品論が盛んとなった。

小説作品の研究としては、『雨月物語』『春雨物語』のほかに、浮世草子作品の『諸道聴耳世間猿』『世間妾形氣』がある。『諸道聴耳世間猿』は、登場人物のモデル探しが研究の軸として進められてきた。一方、高田衛氏によって中国白話小説との関連を指摘され（8）、近年では、神楽岡幼子氏が当代演劇との関係に注目されるなど（9）、多角的な展開を見せている。『世間妾形氣』も、モデル探索が行われているが、『雨月物語』や『春雨物語』との連続性に着目する研究が多く見られる。『癩癖談』『書初機嫌海』については、『上田秋成全集』の本文のほか、訳注を付したものがある（10）。各作品の研究はほとんど進展がないが、中村幸彦氏によって、浮世草子と同じくモデル問題を扱った論考がある（11）。また、鎌倉三部作と呼ばれる小品の歴史小説「月の前」「剣の舞」「妖尼公」については、美山靖氏『秋成の歴史小説とその周辺』（精文堂、一九九四年）、森山重雄氏『上田秋成の古典感覚』（三一書房、一九九六年）で考察されている。

このように、小説の研究は現在に至るまで盛んであるが、新版の『上田秋成全集』が刊

行されたことで、小説だけではなく、国学や和文作品の読解が進むこととなった。

国学に関しては、新版『全集』刊行前から、丸山季夫氏『国学者雑攷』（吉川弘文館、一九八二年）、高田衛氏『上田秋成研究序説』（寧楽書房、一九六八年）、新藤和義『上田秋成の万葉学』（桜楓社、一九七四年）等の業績がある。それ以後は、勝倉寿一氏『上田秋成の古典学と文芸に関する研究』（風間書房、一九九四年）、山下久夫氏『秋成の「古代」』（森話社、二〇〇四年）、飯倉洋一氏『秋成考』（翰林書房、二〇〇五年）など、着実に研究は発展している。最近では、一戸渉氏『上田秋成の時代』（ぺりかん社、二〇一二年）により、秋成個人の業績のみならず、秋成と交流のあった同時代の国学者たちの学芸および研究活動について総合的に説明がなされている。

和歌に関しては、浅野三平氏『秋成全歌集とその研究』（桜楓社、一九六九年。二〇〇七年におうふうから増補版）により網羅的に資料がまとめられ、秋成の歌業の整理が進んだ。その後、吉江久弥氏の『歌人上田秋成』（桜楓社、一九八三年）により、まとまった量の和歌について初めて本格的な評釈がなされた。なお両氏は、秋成の歌論乃至和歌観についての分析も行われている。

一方和文に関しては、新日本古典文学大系『近世歌文集 下』（岩波書店、一九九七年）

の中村博保氏の校注により、秋成の文業がまとめられた歌文集『藤簍冊子』の注釈が行われるなど、近年スポットライトが当たる研究分野となっている。風間誠史氏『近世和文の世界―蒿蹊・綾足・秋成』（森話社、一九九八年）や飯倉洋一氏『秋成考』（前掲）等の研究がある。

それでは、秋成が最初に手を染めた俳諧についてはどうか。戦後、中村幸彦氏により、「漁焉」が秋成の青年期の俳号であることが証明され（12）、研究は進展した。そののち、大谷篤蔵氏によって青年時の俳諧活動が明らかとなり（13）、その成果をふまえた長島弘明氏（14）、石川真弘氏（15）等の研究によって、秋成の俳諧作品の概要がつかめるようになった。

近年の秋成の俳諧研究としては、深沢了子氏が明和五年の如瓶編『歳旦』に「青蕪」号の秋成句が見られることを明らかにされた（16）。また長島氏は未出の俳諧の発句を紹介された（17）。

ただ、先行研究では、秋成が宝暦期末以降、俳諧から距離を置き、小説や国学・和歌・和文等に、学芸の中心を転換させた理由について、俳諧との関わりの面からは言及されていない。また、秋成が大坂俳壇の宗匠から受けた影響についても、未だ十分な研究がなさ

れていない。その理由の一つとして、秋成が特定の俳系に属していなかったことが挙げられる。しかし、秋成が宝暦期の大坂俳壇の有力者であった小野紹廉の一炊庵門や、松木淡々の半時庵門の俳人たちと交友していたことは、既に石川真弘氏等によって指摘されている（18）。このことを考えると、宝暦期の秋成の俳諧活動とその後の文業の展開との関係については、当時の大坂俳壇や隣接する京俳壇の状況をふまえてなお検討する必要があると考えられる。

また、小説等他ジャンルと比べて、国学や和文・和歌との関連については、あまり論じられてはいない。これは中央公論社刊の『上田秋成全集』で「俳諧篇」が出版されていない（二〇一三年十一月現在）ことも原因の一つであろう。しかしながら、秋成の場合、俳諧・和歌・和文いずれも、自己の心を自由に表現するために必要な文芸様式であった。現に、歌を含んだ和文紀行文である『秋山記』（安永八年（一七七九）成）は、句を含んだ紀行文『去年の枝折』（安永九年（一七八〇）成）と同じ城崎旅行を題材とし、相互補完関係にあることが先学により指摘されている（19）。『秋山記』は、歌文集『藤簍冊子』（文化二年（一八〇五）刊）巻三に所収しており、和文研究において重要な作品の一つである。また、俳諧語法書『也哉抄』は、国学者の富士谷成章や本居宣長の著述から和歌の用例を



引用しており、切字論というより「てにをは」論の書としての性格が強いとの金田房子氏の指摘がある（20）。このことから、秋成の俳諧作品と国学や和歌・和文作品との繋がりについて分析することが必要であるといえる。

さらに、秋成の発句や連句のうち、一部の作品について、中村幸彦氏（21）や長島氏（22）、浅野三平氏（23）の考察があるが、和歌のようにまとまった分量の発句の注釈は行われていない。しかしながら、秋成の俳諧と他の文事においての共通点と相違点を知るために、ある程度まとまった形で発句の注釈は必要であると思われる。

以上、秋成研究の概観から、俳諧に関する研究のさまざまな問題点が明らかとなった。そこで本稿では、それらの問題点を見据えながら、秋成の俳業について総合的に分析していきたいと思う。

第一章では「漁焉の俳諧」と題し、秋成の滝瓢水への追悼句から、秋成の文事の転換時期を考える。それをふまえ、松木淡々と小野紹廉の俳歴を中心に京大坂俳壇史を通観し、青年時代の秋成が宝暦期の大坂俳壇から受けた影響について検討する。その上で、秋成が俳壇から距離を置き、新たな文事への転換を図った理由を明らかにする。

第二章は「無腸改号後の俳諧」と題し、秋成が「無腸」と改号した後におこなった城崎旅

行の意義を問う。また、同旅行の体験をもとに書かれた紀行文『去年の枝折』の後半について分析した後、同作品に所収されている全発句を検討し典拠を挙げる。さらに、秋成の俳諧が高田衛氏の「外部志向をもっていない」(24)という指摘の通りであるのか、『吉野山の詞』の文章や発句を通じて検討する。

第三章は、「秋成と俳諧」と題し、まず俳諧語法書『也哉抄』を通じて、秋成にとっての文芸の意味を明らかにする。次に、秋成の自作自撰句集『俳調義論』を通じて、秋成の俳諧観を分析する。最後に、秋成の俳風について確認した後、俳諧経験と和歌との影響関係について検討していく。

以上のような視点から、俳諧が秋成の文事に与えた影響を明らかにし、秋成の俳風や、俳業の意義について考察を進めていきたいと思う。

注

(1)「秋成の秘密―その出生問題についての一資料」(『上田秋成年譜考説』(明善堂書店、一九六四年)所収)。

(2) 「秋成の実母とその周辺」『文学』第五十巻第五号、一九八二年五月。『秋成研究』(東京大学出版会、二〇〇〇年) 所収)。

(3) 「秋成の宇万伎入門の年其他」『国学者雑攷』(吉川弘文館、一九八二年) 所収)。

(4) 「秋成伝の問題点」『国文学 解釈と鑑賞』第二十三巻第六号、一九五八年六月)。

(5) 「宇万伎入門年代考」『上田秋成年譜考説』所収)。

(6) 『新潮古典アルバム 上田秋成』(新潮社、一九九一年) 年譜による。

(7) 「秋成の宇万伎入門―『文反古』所収書簡をめぐって」『上方文藝研究』一、二〇〇四年五月)。

(8) 「わやく」と中国白話小説」『上田秋成研究序説』(寧楽書房、一九六八年) 所収)。

(9) 『諸道聴耳世間猿』と歌舞伎」『演劇研究会会報』第二十五号、一九九九年六月)。

(10) 浅野三平『雨月物語・癩癧談』(新潮社、一九七九年)、美山靖『春雨物語・書初機嫌海』(新潮社、一九八〇年)。

(11) 「癩癧談に描かれた人々」『近世大阪芸叢談』(大阪芸文会、一九七三年。『中村幸彦著述集』第六巻に再録)。

(12) 「上田秋成青年時の俳諧」『連歌俳諧研究』第十号、一九五五年十月。『中村幸彦著述集』第六巻に増補)。

- (13) 「秋成初期俳諧資料二三」(『甲南国文』第二十四号、一九七七年三月)、同「俳人勝部青魚―秋成初期俳諧資料」(『俳林閒歩』(岩波書店、一九八七年)所収)。
- (14) 「秋成の俳歴」(高田衛編『論集近世文学』5 共同研究 秋成とその時代)(勉誠社、一九九四年)および前掲書所収。
- (15) 「上田秋成発句集」(『ビブリア』第一一五号、二〇〇一年五月)。
- (16) 「青蕪号と秋成新出句六句」(『大坂俳文学研究会会報』第三十四号、二〇〇〇年十月)。
- (17) 「秋成伝記資料拾遺」(飯倉洋一氏・木越治氏編『秋成文学の生成』(森話社、二〇〇八年)所収)。
- (18) 「秋成と俳諧」(『上田秋成全集』第十一卷、月報11、一九九四年二月)。
- (19) 森山重雄氏『『去年の枝折』とその芭蕉批判』、『秋山記』を読む』、『秋成 言葉の辺境と異界』(三一書房、一九八九年)所収、加藤裕一氏『『秋山記』・『去年の枝折』解説』(『上田秋成の紀行文 研究と注解』(実践女子学園学術・教育研究叢書15、二〇〇八年)所収。初出『実践女子短大評論』第十五号(一九九四年一月)等。
- (20) 「『也哉抄』論述の性格」(『国語国文』第六七三号、一九九〇年十月)。
- (21) 「上田秋成雑記(二)」秋成と俳諧」(『中村幸彦著述集』第六卷所収。初出『俳句』第二十四卷第一号(角川書店、一九七五年))。

(22) (14) に同じ。

(23) 「上田秋成晩年の俳諧―その俳諧賛二巻をめぐつて―」(『国語と国文学』第四十卷第七号)

(24) 「俳人無腸論―「月や霰の句をめぐつて」―」(『上田秋成研究序説』(寧楽書房、一九六八年)所収。)

## 第一章 漁焉の俳諧

### 第一節 瓢水追善集『おそねはん』における秋成追悼句の意味

秋成が青年期から壮年期に至るまで過ごした大坂の文化圏乃至文壇は、京や江戸と比べて、専門家や準専門家と素人の境界が曖昧で、その主体は流動的であった。宝暦明和期も同傾向であるが、この時代の大坂の文化界を彩った風流人たちを知ることができる資料として、洒落本『列仙伝』（宝暦十三年（一七六三）刊）がある。この本は、洒落本と銘打っているが、遊里とは直接の関連はない。日本の粹道を唐土から視察しに来た孔子の使者子路を、古代の粹人たちが歓迎し、新狂言の興行を行うという内容である。その時呼び集められた当代の實在の大坂の粹人・風流人たちは、実名ではなく変名で紹介されている。上田秋成は、この本に俳号の「漁焉」をもじった「ぞゑん」の名で登場し、「ひとり武者」と評されている。しかしながら、俳壇内で孤立していたわけではなく、大坂の俳諧を愛好する人々の集団内にいたことは、すでに石川真弘氏が「秋成と俳諧」（『上田秋成全集』第十巻、月報11、一九九四年二月）のなかで示されているとおりである。

そこで、本節では、秋成の大坂俳壇との交渉の一例として、播州の俳人滝瓢水の追善集『おそねはん』にみえる上田秋成の新出句を紹介する。併せて秋成の生涯における同句の位置づけについて考察したいと思う。

一、『おそねはん』と秋成発句

滝瓢水は、貞享元年（一六八四）播磨国別府の船問屋の家に生まれた。本名は滝新之丞、別号は富春斎・野橋斎等あり、剃髪してからは自得斎と称した。京・大坂に出て、始め小西来山一門とつながりをもち、のち半時庵淡々の門下に入った。俳諧に没頭する余り、一代で家産を失った。三熊花顛の『続近世畸人伝』（寛政十年（一七九八））では、奇行の人として紹介され、「ほろ／＼と雨そふ須磨の蚊遣哉」という句が「生涯の秀句」として挙げられている。

晩年は零落したが、俳諧からは終生離れなかった。宝暦十二年（一七六二）七十九歳の時、大坂で客死した（1）。

『おそねはん』の序文は、翌十三年夏に書かれている。この年は瓢水の一周年忌に当たる。

よって、同書の刊行も同年と考えられる。撰者は、大坂の門人、筒井青瓦である。青瓦は、もと紹廉系の俳人で、瓢水の喜寿賀集『寿齡苑』を編集し、現大阪市天王寺区生玉町の持明院に瓢水の墓を建立している（2）。

同書の冒頭には、瓢水が死没する前に青瓦に送った「けふ涅槃翌は何国へ生仏」という句が辞世の句として挙げられている。本書前半では、瓢水の大坂における門人や友人の句が収められており、この中に「漁焉」号での秋成の句文も見える。祇空（敬雨）の門系である五楼は、跋文を書いており、瓢水の親友であったことがわかる。同門の淡々門の田鶴樹や、淡々系の羅人門の波光、風状の名が見えるが、舞雪、几掌、茶雷、晚鈴といった紹廉系俳人の名が最も多く見られ、晩年の瓢水が紹廉門に接近していたことが窺える。後半では「播陽の部」と題して、高砂の布舟・通澄、寺家町の五百枝、加古川の白扇らの句が収められ、瓢水が播州の俳人たちにも慕われていたことがわかる。瓢水については、後世において専ら奇人ぶりが喧伝され、実際の人物像や門派の実態などについては明らかになつていなかった。しかし、追善集『おそねはん』により、晩年の活動とともにその周辺の事実の詳細が明らかになった。同書は姫路文学館の金井寅之助文庫に所蔵されており、同館の平成十七年度特別展「百花繚乱 俳聖芭蕉を仰いだ人々 近世播磨の俳諧」で展示さ



れ、図録に紹介されている。平成二十年夏、大阪俳文学研究会の訪書旅行で同館同文庫を閲覧させていただいた。その際、同書に先行研究で未紹介の「漁焉」号の前書と発句が収載されていることを確認した次第である。その後、同書は富田志津子氏により翻刻紹介されている（3）。

秋成の前書と発句の翻刻は次に記した通りである。句読点・濁点は私に付した。

#### 追悼

別府に千とせの老根あり、瓢水老人の英名

是にならぶ。今や不常の風に折にしも、不朽の

名誉、賤が椎柴の類ひならざることを

夏の夜の尾上に去か松の精 漁焉

前書きの「別府に千とせの老根あり」というのは、瓢水著述の俳書『はりま拾遺』上（寛延元年〔一七四八〕序）（4）によって、瓢水の氏神である別府の住吉神社にあった大木の松のことを指しているとわかる。同書によると、瓢水の祖父は夢のお告げによって「八千

歳の齡」をもつこの松を養育し、八十九で寿命を全うした。南北三間しかなかった松は、東西南北十間を過ぎるほどに生長し、それを見聞する人は奇跡であるとして厚く信仰した。この靈松を瓢水が「手枕松」と名づけたという。この松の記事は、地誌『播磨鑑』加古郡の住吉大明神の項にも紹介されており、「曾根の松につゝき無双の靈松也」と評されている（5）。また、「椎柴」は、貧しい柴刈りの背負う、椎の木の小枝の柴のことを指すが、同時に和歌の伝統のなかでは、椎の樹皮を染料とする喪服の色や喪服そのものを指した。秋成が、瓢水に対し、手枕松になぞらえ哀悼の念を明確に表明していること、この時期すでに雅文芸を踏まえた銜学的な態度を見せることが興味深い点である。

## 二、漁焉の転機

文学史上において、戯作者や国学者あるいは歌人として取り上げられることが多い秋成であるが、青年時代は「漁焉」という号で俳諧に勤しんでいた。その活動の特徴として、大坂の一炊庵小野紹廉門との俳交が深かったことが挙げられる。その紹廉の三回忌追善集『さし柳』に寄せた追悼句文では、同人の旧宅に住んでいると述べたあと、「見しハ秋あな

芽も枯ぬ小野薄」という句を寄せている。源氏物語や万葉集を好み、それを日々筆写するなど、古典の造詣も深かった紹廉に対する尊敬の念を抱いていたことの現れといえるであろう。また、紹廉門と頻繁に交流していた半時庵松木淡々門の俳書にも句が入集しており、同門の俳人とも交流があった。特に疎竹庵勝部青魚とは交友が深く、寛政元年に刊行された青魚の句集『にしのみやくさ』には序を寄せている。これらのことについては、大谷篤藏氏の論考「小野紹廉覚書」「俳人勝部青魚」(6)で詳細に述べられている。

紹廉およびその俳系の門人・淡々系俳人との関わりについては、先行研究の中で多く言及されている。しかし、瓢水とのつながりについては、紹廉の八十賀集である『うたゝね』(宝暦五年(一七五五)序)に、漁焉号で瓢水とともに句が入集しているといった、淡々系や紹廉系の俳人を通しての間接的な交流が確認されるのみであったため、これまであまり注目されなかった。今回の新出句によって、秋成が瓢水に対し、紹廉に対するものとはほぼ同等の敬意をもって接していたことが伺える。

次に、『おそねはん』の秋成発句が、秋成の生涯においてどう位置づけられるかについて、秋成の交流圈にいた俳匠の没年と追善集の刊行年、および追善集における秋成の句文の入集状況を整理した上で、明らかにしていきたいと思う。

【表】

宝暦四年（一七五四）以前 九月前後、湖山二十五回忌追善集『湖山追善句集』（呼山

編）。発句一。

宝暦五年（一七五五） 五月十六日、白羽没。七月、白羽追善集『俳諧十六日』（茶

雷編）刊。発句一、歌仙一。

宝暦七年（一七五七） 『白羽三回忌集』刊。発句一。

宝暦十一年（一七六一） 十月十四日、紹廉没。十一月二日、淡々没。

宝暦十二年（一七六二） 五月十七日、瓢水没。冬、紹廉一周忌追善集『雪達摩』（舞

雪編）刊。発句一、歌仙一。十二月二十三日、几圭没。

宝暦十三年（一七六三） 夏序、瓢水一周忌追善集『おそねはん』（青瓦編）刊。前書

一、発句一。十月序、紹廉三周忌追善集『さし柳』（舞雪編）。

発句二、百韻一。

明和四年（一七六七） 『白羽十三回忌集』刊。発句一。歌仙一。

安永元年（一七七二） 十二月、几圭十三周忌追善集『其雪影』（几董編）刊。発句

一（『俳諧十六日』所収の旧作）。

安永五年（一七七六） 九月、几圭十七周忌追善集『続明烏』（几董編）刊。文章一、

発句七。

安永六年（一七七七） 八月序、茶雷（安永二年没）追善集『俳諧奈類仏』（茶裡編）。

発句一。

天明四年（一七八四） 正月、蕪村追悼集『から檜葉』（几董編）刊。長文の前書き、

発句一。

瓢水と同じく宝暦十二年に没した几圭（高井氏）（7）については、二十代前半の秋成が俳諧指導を受けたこと、嗣子几董と親交が篤く、安永期に俳諧を通して交遊していたことが、よく知られている。右の表からわかるように、宝暦十一年から十二年にかけて、几圭のみならず、交遊のあった紹廉、淡々といった大坂の宗匠達が相次いで亡くなっている。これと歩を合わせるように、秋成の俳諧活動は『おそねはん』に発句を寄せた宝暦十三年を境として、以後低調となる。安永元年（一七七二）の几圭の追善集『其雪影』（8）に発句が一句見えるが、これは『俳諧十六日』所収発句の再録であった（9）。また、追善集以外の俳書を含めても、明和五年（一七六八）『除元詠』（子彬）に青蕪号で発句四句を（10）、

明和七年（一七七〇）『老木芽』（編者未詳、舞雪古稀賀集）（11）に発句を六、歌仙、百韻を各々一ずつ寄せているのが目立つくらいである。俳諧との関わりが再び活発となるのは、安永二年『俳諧新選』（嘯山編）（12）や『桑蓮集』（諸号編、勝部青魚の六十初度賀集）（13）に発句を寄せて以降のこととなる。

これらのことから、紹廉とともに、瓢水という大坂に一門を張っていた有力な俳人の退場が、秋成の俳諧への情熱を低調なものにさせたということがわかる。この後、秋成は浮世草子『諸道聴耳世間猿』（明和元年成、同三年刊）、『世間妾形気』（明和三年成、同四年刊）や、読本『雨月物語』（明和五年脱稿）といった小説の執筆、更には国学・和歌といった分野への関心を強めていくのである。

以上のことから、宝暦十三年、三〇歳の時期が、秋成の文事における転機であったことは間違いないといえる。その証左として、これまで先行研究で紹介されてきた秋成の紹廉三周忌の追善集『さし柳』における発句とともに、瓢水一周忌追善集『おそねはん』における発句と前書きを挙げることができるであろう。

注 (1) 『加古川市史』第二卷、本編二第三節（加古川市史編纂専門委員会、一九九四年）。

(2) (1) に同じ。

(3) 同氏『播磨の俳人たち』（和泉書院、二〇一〇年）第一部第二章。

(4) 天理図書館綿屋文庫所蔵本に拠る。

(5) 関西学院大学図書館所蔵本に拠る。

(6) 大谷篤蔵氏『俳林閒歩』（岩波書店、一九八七年）所収。

(7) 藤田真一氏「几圭の没年——『其雪影』の成立をめぐる——」（『大坂俳文学研究会会報』第二十六号、一九九二年十月）に拠る。

(8) 『古典俳文学大系13 中興俳諧集』（集英社、一九七〇年）所収。

(9) 大谷篤蔵氏編『上方俳書集下』（上方藝文叢刊二二二、八木書店、一九八一年）翻刻に拠る。

(10) 深沢了子氏「青蕪号と新出秋成句六句」（『大坂俳文学研究会会報』第三十四号、二〇〇〇年十月）に拠る。

(11) 大阪府立大学学術情報センター山崎文庫所蔵本に拠る。

(12) 関西大学図書館所蔵本に拠る。

(13) (11) に同じ。

## 第二節 文業の転換点―宝暦明和の大坂俳壇と漁焉―

はじめに

第一節で、宝暦末期に大坂俳壇の宗匠が相次いで世を去ったのち、明和年間の秋成の俳諧活動が停滞していることから、秋成の文事における最初の転換点が宝暦十三年であると述べた。ただ、小野紹廉の門下で一炊庵二世を名乗った木田几掌や、松木淡々門下の布門の子で五流斎三世を名乗った女媒など、有力俳人の門下は明和期以降も俳諧活動を続けている。では、秋成が俳諧への情熱を再びよみがえらせることがなかったのは何故なのか。

秋成の俳諧活動については、長島弘明氏がその経歴を追い、三つの時期に分けている。第一期が、宝暦・明和年間の主に漁焉号を用いていた青年時代、第二期は、安永・天明年間の蕪村ら夜半亭一門との交流を基調とする中年時代、第三期は享和・文化年間の京都で趣味的に活動していた晩年時代である（1）。ただ、この分類法では、明和期に俳諧から距離を置いた理由が明確にならない。

また、これまでの伝記研究では、秋成の文業が発展するきっかけとして、国学の師であ



る加藤宇万伎との出会いを重視する立場が大半である。しかしながら、秋成が加藤宇万伎に入門して、国学を本格的に志すことになったのは、近年の研究成果により、明和八年頃と考えられる（2）。それ以前は『諸道聴耳世間猿』や『世間妾形気』などの浮世草子の創作に手を染め、読本『雨月物語』を脱稿している。したがって、宇万伎との出会いは秋成の半生において重要視すべきではあるものの、明和初年に文業の転換点が訪れた理由の全としてとらえることはできないのである。そこで、この文事の転機は、当時の京・大坂俳壇の動向といかなる関連性をもつのか、秋成俳諧に関わりの深い宗匠の俳歴や作品を確認しながら考察していく。また、その転機は、秋成の文学において具体的にいかなる意義を持つものなのかについても言及したいと思う。

注

- （1） 同氏「秋成の俳歴―漁焉時代を中心に―」（高田衛編『共同研究 秋成とその時代（論集近世文学5）』（勉誠社、一九九四年）所収、同氏『秋成研究』（東京大学出版会、二〇〇〇年）所収）。

(2) 根来尚子「秋成の宇万伎入門―『文反古』所収書簡をめぐって」(『上方文藝研究』一、二〇〇四年五月)。

# 一、大坂俳壇進出前の淡々

宝暦期の大坂俳壇は、淡々率いる半時庵門と紹廉率いる一炊庵門が中心勢力となっていた。この両俳系の周辺に、巴人の門弟である京の宗屋や几圭がいた。秋成の句は、主に紹廉の一炊庵門、およびそれと親しく交流していた半時庵門等の俳書に多く入集していた(3)。そこで、宝暦年間の大坂俳壇を形成していた俳人たちについて、その俳歴を確認する。

淡々については、大坂の商家出身であることが有力とされているが、生年とともに詳細は不明である。『其角十七回』(享保八年(一七二三)刊)では、元禄六年(一六九三)頃に芭蕉に会い教えをうけ、呂国という俳号を得たと述べられている(4)。しかし櫻井武次郎氏によると、それは芭蕉を敬慕する淡々の「芭蕉直門を称する人たちへのコンプレックスを表出したもの」であった(5)。実際は、元禄十三年(一七〇〇)に因角という俳号を

用いて、当時大坂の俳人であった祇空（この当時青流）や轍士らと『菊の賀集』（仮題）で三吟を詠んでいる。また、大坂の談林系俳人轍士が匿名で京・江戸・大坂の三都および諸国の宗匠・点者を遊女に見立てて論評した『花見車』（元禄十五年（一七〇二）三月成立）では、「渭北」という俳号で紹介されている。著者轍士は「諸事きやうな子」である淡々を「酒ものみならはせたし」などと好意的にとらえ、「春たつやはゝ鳥の羽の色みどり」という句を挙げている（6）。このように、元禄末頃まで大坂俳壇の親しい仲間内で俳諧を楽しんでいた様子がうかがえる。東下は早くとも元禄十三年以後で、渭北という俳号で其角門として活動するが、目立った業績はなかった。しかし宝永元年（一七〇四）七月に芭蕉の足跡をたどる奥羽行脚を行ったことが転機となった。この旅の動機として、芭蕉への敬意は勿論あったと思われるが、蕉門の俳諧師として独り立ちしたい、そのための宣伝材料が欲しいという計算も働いていたであろう。現に、行脚の後に『安達太郎根』（宝永二年以降刊）という処女撰集を出版している（7）。この俳書の巻頭では、『おくのほそ道』の文章が長々と引用されており、淡々の芭蕉に対する追慕の念が強調されている。その後、宝永三年に立机し、翌四年（一七〇七）の其角没後は淡々と改名して、宝永五年（一七〇八）冬、京へと上る。上京の理由として、先行研究では、其角の死や、俳諧以外に原因を求め

るものなど、様々な説が出されている。ただ、淡々以前から、特定の俳人に限らず、京・大坂と江戸の俳人との間の交流は盛んであり、淡々の場合も京俳壇の需要に応えてのものであったのではないかと考えられる。

淡々が江戸に居住していた頃、其角門を中心とする遊戯性を前面に押し出した難解な洒落風が流行した。淡々自身は、芭蕉に対する敬愛の情が深く、其角系蕉門であることを自負していた。しかしながらその俳諧は、江戸の洒落風に独自の要素を加え発展させていった結果、芭蕉の理想とする俳風とは対照的なものとなった。後に大坂に移住してからは雑俳系の俳諧に近くなっていた位である。ただ淡々はじめ門下の俳人は、雑俳と自分たちは違うと強調している(8)。元禄末の京俳壇では、その江戸における洒落風の隆盛に注目が集まっていた。先述した大坂の俳人轍士による三都の俳人を論じた書『花見車』では、「前句にあらはなじむ事をさけて、一句の曲あるやうに成たるは六かしき風躰なり」と、難解な洒落風の特徴であった句の趣向を重んじる一句立てについて批判している。しかし一方で同書は、江戸では「毎日・毎夜、会合して点とりを上げむ」とし、「国／＼の点師もみな江戸の風俗をうかゞひて」と述べるなど、江戸の俳諧の優位性を認めていた。以上のことにより、京での、江戸に学ぼうとする機運が急速に高まったことが、淡々の上京を促し

た面はあったと考えられる。

ただ、上京後すぐに活躍できたわけではない。京都移住の翌年である宝永六年（一七〇九）には移住記念として俳諧撰集『俳諧礫山』（原題不明）を刊行するほか、幾つかの俳書に名が見える。しかし、その後は正徳元年（一七一）に『十歌仙』を、翌二年に『五歌僊』を刊行するほかは、目立った活動はない。また『十歌仙』は、京ではなく、江戸で旧友の祇空（元青流）らと行った俳諧興行を記録した俳書である。このことについて、櫻井氏は、淡々が「京の俳壇に対し、当時、進出していこうという野心のなかったことを示してはいないだろうか」と述べておられる（9）。確かに、京では伝統的に貞門が勢力を持っていた。これが影響して、入京当時、俳壇で孤立していたということも考えられるであろう。しかし、淡々は俳諧から離れず、江戸にルーツをもつ俳人仲間達に救いを求めた。深沢了子氏は、宝永六年刊の『俳諧礫山』から正徳五年刊の『六芸』『十友館』までの淡々の俳書における京俳人の入集の状況をまとめられている。それによると、かつて其角の許で親しくしていた沾徳門の仙鶴や嵐雪門の氷花ら、先に江戸から京に上っていた俳人達の句が、『礫山』に多く入集しており、入京当時の淡々と積極的に交友していた様子がうかがえるとのことである。仙鶴らとの親交は以後も続くが、正徳二年の『十歌仙』頃から仙鶴を

通じて貞門の有力俳人や談林派の団水系の俳人とも交流をもつようになる。そして正徳五年刊の『六芸』では、先に述べた俳系に加えて、京の主要な門派の人々から初心の人まで、さまざまな俳人の句の入集が確認されることとなる（10）。

こうして、淡々は江戸俳壇のコネクションを巧みに使いながら、京俳壇での活動の足場を築く。以後は先行研究で指摘されている通り、享保期の上方俳壇において順調な活動を見せる。享保元年（一七一六）に半時庵を結んだのち、享保二年（一七一七）刊の『にくなぶり』（11）では雑恋の百韻一卷と文章六篇を載せ、百丸と仙鶴の序、および自序とともに、祇空・水色・珍舎・里友の跋文を収めた。百丸は伊丹の俳人で、上島鬼貫と親しい関係にあった。二年後の享保四年（一七一九）には淡々門の大圭と李賦が編集した『花月六百韻』（12）が刊行される。大圭は元貞門俳人であった。この書には俳友の敬雨（祇空）と百丸が序を寄せており、仙鶴・雲鼓といった他門の俳人が句を寄せ、淡々の京俳壇での勢力を示す作品となっている。

さらに、享保八年（一七二三）には、其角追善集として、淡々自らが全三冊の『其角十七回』（13）を編集し刊行した。上巻冒頭には其角の自筆年譜を掲げ、其角の業績を顕彰し、自派の権威を確立しようとする淡々の意図が見られる。年譜につづいて『雑談集』に

倣った淡々の随筆が収載される。この中に、呂国という俳号を芭蕉から授けられ、門人として認められたとする先述の話が出てくる。このことは、京俳壇のなかで自門の俳系の正しさを宣伝するために、其角だけでなく、芭蕉をも利用しようとする淡々の強かさを現したものとされている（14）。中巻は其角発句「明星や」「各文字や」を題とする淡々一派の発句や連句、下巻には諸国の宗匠や俳人から寄せられた追善の発句・連句を収める。淡々はすでに江戸で宝永五年に『其角一周忌』という追善集を刊行していたが、それと比較すると、入集している句の数は増大しており、淡々門が京俳壇で最大勢力であることを表す書となった。積極的な活動の結果、享保期を通じて、淡々の俳諧は京都俳壇を席卷することとなった。その俳風の特徴の第一は、

『其角十七回』のなかの随筆に、恋の句について、

『新式』にも「恋の句一句にて止事名無念々々」とあれば、むかし一句にて捨たる事もありたる文章なり。また、祇兼問答に「恋の句一句にて捨てても不苦候。百韻の内堂作は無念」と云々。

とあるように、一句の趣向を重視することである。しかし淡々自身は、付合を軽視していたわけではなかった。享保初めの『にはくなぶり』冒頭の自序で、

一句に離して恋なきをいふ人、今尚藻しほ火に打くべたまへ

と述べ、前後の句とのつながりで、恋の詞のない一句が、恋の句になることもあると主張している。その上で、

花に風うしとみし世ぞ今はこりや

という重頼の句を挙げ、季語を使わずに納涼を詠んだこの句を手本として、あらかじめ恋の詞を使わない恋句を作ると述べている。

それでは実際の作例はいかなるものか。『にはくなぶり』に収められる淡々の雑恋百韻の発句と脇を含めた四句を挙げる。

かづらきや余所に蹴て行衣の音



#### 四季のしづくの分る黛

石に成時をや帆にてへだつらむ

うるはしみせよ野にも櫛笥を

発句は『新古今和歌集』恋の部巻頭歌の「よそにのみ見てややみなん葛城やたかまの山の峰の白雲」（詠人しらず）を、葛城という遊女の道中に見立てて詠んだものである。葛城は遊女の通り名である。ただ遠くから見ているばかりの美人を思う気持ちを詠んだ本歌もふまえながら、道中での遊女の独特の足運びを詠んでいる。和歌の雅な恋を当世風の遊女の様子に仕立てた、非常に技巧的な発句である。次の脇句については、「かづらき―雪」「しづく―雪」「四季―衣裳」さらには美人の眉を遠山にたとえた「遠山―黛」という『俳諧類船集』（延宝四年（一六七六）刊）にも見える付合から詠んだものである。一句の意は、遠くの方々に、雪解け水など四季折々の水が流れるのが分かる、というものであるが、二句にわたる意としては、道中の遊女が特殊な歩き方に苦しみ、汗が流れて黛が溶ける、というものである。遊女の人間らしい一面によっておかしみを誘うとともに、その様子に気づき、愛しく思う男の気持ちを詠んでいる。

三句目は、舞台を山から海に転じている。「海山―隔ある中―男女」という『類船集』にも見える付合から松浦佐用姫の話を連想したか。佐用姫は『万葉集』巻五や『肥前風土記』では、異国に出征する男に、山の頂上から領巾を振って別れを惜しんだとあり、伝承ではその後七日七晩泣き続けて石になったと伝えられる。ただ、古代の貞女の一途な恋をふまえる一方で、一句には「石に成」に「淋病になる」意を含ませ、現代の遊女の現実的な恋を詠んでいる。近世当時、淋病は、尿道にできた結石が原因と考えられ、「石―淋病」という付合が『類船集』にある。淋病は大抵男がなるが、この場合は前句との関係から遊女の方がなったとしているか。したがって、この句には、当代の遊女は淋病にかかって年中汗を流して苦しみ、恋しい男に会うことができないと悲しむという意も含める。

次の句は、三輪山神婚譚をふまえる。倭迹迹日百襲姫（やまとととびもそひめ）が大物主神（おほものぬしのかみ）の正体を確かめるため櫛笥（櫛箱）を覗くと、美しい小蛇がいたという古代説話である。『肥前風土記』に、松浦佐用姫の後日談として、毎晩訪ねてくる別れた男と似た男の後をつけると、正体は山上の沼の蛇であった、という話があるため、そこから連想したか。古代説話とは逆に、現代では男の方が遊女の姿を見たいと願う、その美しい正体が隠れているという櫛笥が外に出てくればよいのと思う、という

部分が滑稽さを誘っている。前句とのつながりはやや薄くなる。

このような伝承を背景とする句が見られるが、伝承以外を出典とする句として、

星うつる雨後の溜りを負て飛ブ

あれともいはず昏燭吹消す

といったものもある。『伊勢物語』第六段をふまえつつも、蠟燭を吹消して男を誘う当世風の女を詠んで滑稽さを感じさせる句である。

以上のように、淡々は恋の詞を一切使わず、和歌や物語などを題材として恋の句に仕立てており、一句の作意に非常に拘っているといえる。この新しい試みは、詞に束縛されずに恋の心情を詠めるという点では画期的で、俳諧史においても進歩的であるといえる。しかしながら、淡々の俳風は詩精神に基づいて作られたのではなく、あくまで一句の作意を凝らし技巧性を追求するなかで生み出されたものであった。その結果、『花月六百韻』（享保四年（一七一九））では、季の詞を抜いて四季の句を詠むなどして難解な句になったため、各句に淡々の注解が付き、『春秋閑』（享保十一年（一七二六）（15））では、初心者に一句

の心を重視させるため、前句を省くなど、淡々門は次第に付けを考慮しなくなっていた。

特徴の第二は、『にはくなぶり』冒頭自序で淡々が「漸こゝろのまゝを引むすびて当時の風流をつみ」と述べているように、当代風の題材を用いたことである。『にはくなぶり』の場合は、恋の詞を入れないことで、伝統的な決まり事から解放され、当世風の女性の恋を積極的に表現することを可能にした。自由に当世の風俗を詠むという傾向は『春秋閑』や『万国燕』（享保十三年（一七二八）（16））といった付句集にも見られ、京俳人に淡々風の魅力として認識され、半時庵門人の増加へとつながった。

ただ、京俳壇は淡々一色になったわけではない。宗匠の数の上では貞門が淡々門を圧倒していた。古来の作法を守ってきた京俳人の中には、淡々の洒落風に眉をひそめた者も多かったであろう。『誹諧家譜』（秋蛙序。寛延四年（宝暦元年）（一七五二）刊）（17）で公許制発布後の京の点者を確認すると、全三十一人のうち、江戸系の俳人は淡々、仙鶴ら四人、団水系の俳人は丈竹・百合の二人である。残りの二十五人は、似船系の鞭石・方山・友扇らや、松堅系の晩山・其諺らなど、全て貞門俳人である。この京俳壇に定着するため、淡々は自らの活動を大々的に喧伝しながらも、貞門俳人との交流を怠ることはなかった。入京当初に仙鶴など江戸系俳人を仲介としたことは既に述べたが、さらに元々貞門であっ

た大圭が、師の正宜の没後に淡々門に入った。淡々は、その大圭を通じて、貞門の宗匠たちと友好関係を築き、京俳壇での地盤をさらに固めたのであった（18）。

順風満帆に見えた淡々門であったが、享保十二年（一七二七）の末に、先述の大圭が羅人らと共に淡々に反逆し、内部分裂を起こした。対立の原因は、鈴木勝忠氏が「享保俳諧史」〔『俳句講座 1・俳諧史』所収〕で言及されているが、神沢杜口の『翁草』〔安永元年（一七七二）以降成〕巻之百五の淡々東下の項に「淡が余風有て、一統孕句を

並ぶる而已成しに、羅人之を厭ひ、つけ方の事を第一に説諭し」（19）とあることが示すように、付合を極端に等閑視する淡々風に羅人らが我慢できなかったことによるものであった。貞門はもともと前句付に高点をつける傾向にあった。大圭らの動きは、付合を重視する貞門風への回帰であったといえる。結局表向きは和解する方向へと向かったが、このことが後の淡々の大坂俳壇への進出を促すこととなった。

注

（3）石川真弘氏「秋成と俳諧」〔『上田秋成全集』第十一巻 月報11、一九九四年二月〕

- (4) 『古典俳文学大系 11 享保俳諧集』所収。
- (5) 同氏「祇空と淡々」〔初出…『大坂俳文学研究会会報』第四号、一九七一年十月。『日本文学研究資料叢書 蕪村・一茶』(有精堂、一九七五年)所収。『俳諧史の分岐点』(和泉書院、二〇〇四年)に訂正・転載〕。同氏『元禄の大坂俳壇』(前田書店、一九六七年)第四章「東下までの清流と淡々」および「松木淡々」(『俳壇』一九八七年七月)に同稿を補正した記述がある。
- (6) 『新日本古典文学大系 71 元禄俳諧集』所収。なお、淡々の大坂時代交流については(5)に詳細な説明がなされている。
- (7) 京都大学顕原文庫蔵。淡々の俳風については、深沢了子氏『近世中期の上方俳壇』(和泉書院、二〇〇一年)第一部第一章、第二章および第六章に詳しい。
- (8) 深沢氏の前掲書第一部第一章参照。
- (9) 櫻井氏の前掲論考参照。
- (10) (8)に同じ。
- (11) 『古典俳文学大系 11 享保俳諧集』所収。
- (12) 『日本俳書大系 10 中興俳諧名家集』所収。
- (13) (11)に同じ。

(14) 櫻井氏前掲論考および深沢了子氏の前掲書第一部第二章参照。

(15) (11) に同じ。

(16) 『新日本古典文学大系 72 江戸座点取俳諧集』所収。

(17) 『日本俳書大系 16 俳諧系譜逸話集』所収。

(18) 深沢了子氏の前掲書第一部第三章では、大圭の立机記念集である『一陽集』(享保三年)において、淡々門の俳人の句が入集しているほか、鞭石・其諺・晩山といった貞門の有力宗匠が百韻一卷を詠んでいることが紹介されている。

(19) 『日本随筆大成 第3期 22 翁草 (4) (新装版)』(吉川弘文館、一九九六年)所収。

## 二、享保期末の大坂俳壇

享保十九年(一七三四)、淡々は大阪に移住した。元禄末に江戸へ下ってから三十四年を経た、故郷の地へと帰ったこととなる。

ここで淡々が帰ってきた享保末頃までの大坂俳壇について概観しておく。そもそも大坂俳壇は、貞門を中心とする京中央俳壇の出張所という性格があったが、俳人の数の増大と

ともに、京に対抗意識をもち、宗因を旗頭にした談林が伸張したという経緯がある。当然、談林俳人が俳壇の中心となっている。当時の大坂俳壇の状況を『誹諧家譜』の登録宗匠を中心にみると、談林俳人の中でも、椎本才麿門が最大勢力であった。才麿は大和の宇田生まれ、はじめ宗因・西鶴に師事したが、延宝年間の中頃に江戸に下って、言水・芭蕉ら新進気鋭の俳人らと俳諧修行をした。元禄二年（一六八九）冬に大坂に戻った才麿は、先に江戸を発って入京していた言水に会ったのち、西鶴や来山、鬼貫らと親交を深める。享保元年（一七一五）に来山が亡くなると、大坂俳壇の中心勢力となった。この時代の椎本一門の様子を知ることができる資料に、才麿編の『千葉集』（享保三年（一七一八）茱萸跋）（20）がある。巻頭には年頭に三位源御史から下賜された「あるがなかに難波の梅の初にほひ」の発句を立句にした百韻を置く。上下二冊には諸家の句が収められるが、梅翁（宗因）を祖とすることを意識して、歌仙、発句ともに梅の句を中心するのは、いかにも談林派らしい。ただ、鬼貫の親友で、伊丹で家産を破り、宝永二年頃から京都に隠棲していた百丸が、「籠もよし子もよし菜つむ梅の眉」という句を掲げる。これは有名な『万葉集』巻一冒頭の雄略天皇の歌を本歌とするもので、同様に作られた句が合計で九句収載されている。書名からもわかるように、当時伊丹を含めた俳諧の世界では万葉集への関心が高ま



っていた（21）。淡々が『にはくなぶり』の雑恋百韻で古代伝承を元に一句を仕立てていたのも、その影響があったであろう。同書には、伊丹俳人を中心に約百三十名の句が収載され、この時期の椎門の隆盛ぶりがうかがえる。

才麿の門人には、芳室・三惟・員丸・大立・梅門（房麿）・了雨がいるが、椎門を継いだのは芳室であった。享保十五年（一七三〇）に『続千葉集』を編集し、才麿の後継者として名乗りを上げた。芳室は鬼貫との交友があった。また淡々の俳友祇空の弟であった。この関係が、のちの淡々の大坂への移住を促した面はあると考えられる。

一方、談林系内で椎門に次ぐ勢力の来山門は、病床の師から後事を託された文十と李天が、来山の没後にそれぞれ追善集『遠千鳥』（文十編、享保二年（一七一七））と『木葉古満』（李天編、同年）（22）を刊行する。しかしその後は、俳壇での活動から退く。代わって来山の後継者として登場したのが布門である。布門の活動は、雑俳の点業と、来山追善集『誹諧たつか弓』（十三回忌、享保十四年（一七二九））や『誹諧葉ぐもり』（同十七回忌、同十七年（一七三二））（23）などの編集を中心とするものであった。『誹諧たつか弓』の冒頭には「なき人を売て幾冬たつか弓」、『誹諧葉ぐもり』の冒頭には「吹わたる葉にうちぐもる日影かな」という布門の句が収められ、談林風の技巧性に拘らず、率直に故人を追

悼する心が表されている。磊落さはないが、来山に倣って、古歌・古事を踏まえたり、言語の機智を弄したりしない「常の詞」で表現している（24）。先師の俳諧理念を引き継いだことで、布門は来山を偲ぶ俳人たちの支持を得たと推察される。

また、布門の追善集には、才麿門の俳人の句が多く入集しており、布門が椎門との交流に積極的であったことを示している。さらに『遠千鳥』に句が入集している地方俳人も句を寄せていることから、来山門の重鎮であった文十の人脈を引き継ぎ、地方での地盤も強化しようとしていたことが窺える。このように、来山の遺産を引き継ぎながら、自門の新たな展開を目指していた布門は、当時の大坂俳壇を代表する俳人の一人であったといえる。他に大坂俳壇で有名な俳人としては、祇空がいた。先に述べたように芳室の兄であり、椎門を中心に談林と近い関係にあった。また江戸で淡々との親交も篤かった。淡々と同じく出身は大坂であり、最初は岡西惟中門で、後に江戸で其角に入門している。『俳諧家譜』に「宗祇法師ノ風流ヲ感慕シテ諸国ヲ經廻シ（原漢文）」とあるように、全国を漂泊し、俳門の経営に熱心というわけではなかった。しかし、淡々の招きがあつてか、享保三年頃に大坂に滞在する。才麿編『千葉集』には才麿・芳空・三惟らとの歌仙や百韻が収められている。同年京の紫野に移住し、敬雨と改号し以後十年ほど滞在するが、その間大坂

に法策・千鹿という門人ができる。しかし享保十五年、再び上方を離れ、東下しそのまま戻ることはなかった。享保十八年（一七三三）四月二十三日、箱根湯本で没する。宗祇や芭蕉を敬慕した祇空は、江戸の譬喩に満ちた洒落風を批判し蕉風復古を目指す『五色墨』派、『四時観』派の精神的支柱となっていた。その俗にとらわれない平明な俳風は「法師風」と呼ばれたが、隠者然とした人物像による印象も影響していた。実際には淡々と俳交を続けていたことからわかるように、その俳風は古典文学を背景とする知的な遊戯性をもつものであり、江戸系俳人たちと共通性をもつものであった（25）。このことが、祇空が上方に足跡を残せた理由といえる。

また、江戸系の沾徳門の紹簾については、淡々より一足早く大坂に移り、大坂に地歩を占めていた。淡々門との交友が深い俳人であったが、後に詳しく述べる。

其角系以外の蕉門では、野坡が中心となっていたが、九州俳壇の開拓に熱心であり、大坂での存在感は稀薄であった。元文五年（一七四〇）の野坡の没後、一門の高弟であった梅従と風之は追善集『三日の庵』を、寛保三年（一七四三）には芭蕉五〇回忌集『やどり塚』を刊行する。しかしながら、それ以降も蕉門は大坂内で勢力をもつことはなかった。

以上のことから、享保期の大坂俳壇は、椎門系談林を中心に、祇空門、さらに江戸系の

新たな勢力である紹簾門によって構成されていたといえる。

注

(20) 『伊丹文芸資料』(伊丹叢書1)(岡田利兵衛編、一九七五年)所収。

(21) (20) 解説。

(22) 両書とも飯田正一編『小西来山全集 後編』(朝陽学院、一九八五年)所収。

(23) (22) に同じ。

(24) 『小西来山全集 後編』解説。「常の詞」という語は『誹諧童子教』に見える。

(25) 楠元六男氏「佐久間柳居(1)―享保期江戸俳壇における芭蕉復古運動推進者の実態」(『都留

文科大学大学院紀要』第一号、一九九七年)中の、『百番句合』における敬雨の判詞解説に拠る。

### 三、淡々の大坂俳壇進出と紹簾門

享保十九年(一七三四)六月三十日に淡々は大阪に戻ってきた。入京したときとは違って、帰住後の活動はすぐに軌道に乗った。その理由として、京に居たときから大坂の俳人

達と盛んに交流していたことが挙げられる。特に、かつて江戸に下ったことのある才麿と俳交があったことが大きい。また、祇空は勿論、その実兄の芳室とも親しかった。さらに、淡々門の有力俳人であり、『花月六百韻』の編者である李賦と大圭が、淡々に先だって大坂に移住していた。大圭は淡々が大坂に来る前に没したが、その大圭の没後に淡々の門人となったのが『列仙伝』（先賢ト子嚠著、宝暦十三年（一七六三）刊）や上田秋成の随筆『胆大小心録』（文化五年（一八〇八）成）に名が載る秀鏡であった。以上のような交流関係が、淡々の大坂移住を円滑ならしめた面があったといえよう。

ここで、享保期末以降の大坂俳壇について整理しておく。大坂俳壇の有力俳人と交遊し、自らも俳諧活動を行っていた漢詩人内山栗斎枝栖（えだすみ）は、天明二年（一七八二）に椎門の帰厚堂如瓶の追善集『帰厚堂追薦集』（天明二年成）に序を寄せている。その序では、如瓶が俳諧を始めた頃を回顧し、享保末から宝暦までの俳壇について述べている。

如瓶弱冠にして扇尺を師とし、是に属せし前後は大坂俳諧一衰一盛の穠なり。才麿みまかり、芳室老ひ、其徒扇尺・梅門ありといへども流行を解ざれば、椎本をして却而矩州に嗣しめ、且林を振しめんとす。其前来山は今宮に身まかり、作者寥寥乎たり。

漸晋門（ママ）（引用者注…布門）其殘徒を集めて遙に殿りす。此時にあたつて淡々、其角を一変し京摂の眠りを驚かせ、其勢ひ終に海内を一新せんとす。紹簾、沾徳を称し東都より来り住し、白羽を鳴さしめ一隅に干城として是をふせがんとす。法東（ママ）（同注…法策）、敬雨の門に出るといへども、淡々が奇兵のするどきに、槿花に馬を繋かねつゝ、魚洞・同来を育し、都て大坂誹諧を張しむ。此余潘山・樊川・左橋・鳥窓の徒、家々の誹幡をなびかせて壘を高ふす。

「いささか軍談風」であるが「享保末頃以後の大坂俳壇の見事な分析が見られる」と大谷篤藏氏が述べられている通り（26）、著名な俳人の動きを客観的に描く枝栖の記述から、当時の俳壇の状況を知ることができる。

第一に、最大勢力の椎門を率いた芳室の後継者として、矩州（別号五彩堂）が椎本三世となり、談林の振興を図ったが、大坂入りした淡々門に圧倒されたことがわかる。ここで「談林」が強調されているのは、江戸系の淡々門への対抗意識と考えられる。来山門については先述の通りである。第二に、淡々とその俳諧を、必ずしも上方にいる俳人たちすべてが歓迎していなかったことがうかがえる。特に江戸の沾徳門下の俳人であつた紹簾が大

坂に移住したのは、京俳壇に進出している同門の仙鶴や、他門ながらごく近い関係にあった淡々と競合を避けたためと深沢氏は推察されている（27）。確かに、京俳壇を席卷した淡々の大坂入りに、紹簾が密かに危機意識を持っていたということは十分考えられる。実際、紹簾は後年、有力な門人であった午晴庵蒲丈を淡々門に奪われている。ただ、大坂俳壇では、野坡門など蕉門の一部を除いて、伝統的に各俳人が流派を越えて交流していた。有力な宗匠の追善句集には各門の俳人が句を寄せたり、椎門の矩州の句が、淡々系、紹簾系の俳書に多数入集したりしているのはそのほんの一例である。水面下での争いは存在した可能性があるが、実際には、淡々門と紹簾門は、基本的には談林系等とともに協調姿勢を取りながら、宝暦期の大坂俳壇を先導していたといえるであろう。

注

（26）大谷篤藏氏「内山栗斎の俳業」『俳林閑歩』（岩波書店、一九八七年）所収。

（27）深沢了子氏の前掲書第二章第六節および第七章参照。

#### 四、紹簾と秋成

では、淡々門と双壁をなす勢力を率いた紹簾とはいかなる人物か。概要については大谷氏の論考に尽くされているが（28）、宝暦期の大坂俳壇で淡々門と並び立つ勢力を持つていたこと、青年時代の秋成が最も親しく交流した俳人であることが有名である。その生涯について、紹簾八十賀集『うたゝね』（宝暦五年（一七五五）成）（29）の舞雪の文章によってその概要が示されている。

老師氏は平、姓は小野。東都の産にして幼より道に志し嬉戯常ならず。沾徳の机下に遊んで、雪にイみ花に笑ひ、脇下三挙響き四方に聞ゆ。時の名は魚輔。其質徳を包み名を隠し、世の塵を打払ひ／＼、髪を薙てわら杓を宿りとし、憲清法師が幾代の古道、野飼の牛に竹杖くれて、鳴立沢、袖しの浦、見るめ二見の貝拾ふ賤が友がき、伊勢の国の宿りも浜荻のかしがましかれば辻、都の花に夢を結ぶ。十万家の隠れ家快りければ、笠おろし、袋解て十とせあまりの月はかゝげつ、光り浪花江に灑ぎ、吞江といへる人三顧してしみて手をひき、蘆の筆の短き柄をとらしむ。こがれ寄る人雲に等しく、霞と俱に一花五葉をひらく。



紹簾の江戸在住時代の俳諧活動については明らかとなっていない。ただ、紹蓮号で享保十二年（一七二七）に沾徳一周忌追善集『ちりの粉』を編集し、序を収めていることから沾徳門であったと大谷氏が指摘されている。入門したのは元禄十年頃で、魚輔という俳号であった（30）。その後西行を慕う行脚の旅に出て、伊勢国二見浦を通り京へと向かう。

宝永末年（一七一）には京都に入り、十余年を過ごす。正徳年間の俳事としては、淡々や仙鶴を交えての歌仙興行などの活動があったことが深沢氏によって紹介されている

（31）。なお、淡々とは一時同居したことがあった。紹簾三回忌追善集『さし柳』上巻〔舞雪編、明和三年（一七六六）以降刊〕（32）では、

いにしゑ先師花洛に有し比、半時庵に居をおなじうし給ふける事の侍りければ

獅子舞のかしらをわたす尾花哉

となん詠し、翁も廿日はかりおくれて逝き給ひぬるをおもひ出て

雪しくれさそな蓮の相住居

鬼盈

とある。また、『淡々発句集』（延享三年（一七四六）分外序）（33）にも「京師卜居の表を魚輔にかして」という前書と「獅子舞の」の句が見える。

京に入ってからもしばらく魚輔号を用いていたが、享保八年（一七二三）三月刊の『其角十七回』では、紹蓮の俳号で淡々や大坂の俳人魚江と歌仙を巻いていることから、享保七年の末には改号したと思われる。ちなみにその時の紹廉の歌仙発句は、

春霞たつ子いざる子浮ものを

という句であり、既に掛詞を好む傾向が見られる。その後、享保末頃には紹廉・紹廉と名を改めた。大坂に入ったのは吞江に誘われてのことであった。時期については未詳だが、『卯のとし』（享保八年刊）に紹廉評の「奉納天満宮五千句集」（享保七年（一七二二）寅暦晩冬成）が収載しており、遅くとも享保七年には大坂にいたと考えられる。吞江と紹廉の関係について詳細は不明であるが、『其角十七回』には吞江と淡々の半歌仙が収められている。深沢氏は正徳頃の仙鶴・淡々の俳書に吞江の句が入集しているため、両者を通じて知り合ったと述べるが、妥当な推察と思われる。

大坂では、紹廉は淡々や仙鶴と違い、自らが雑俳点者として活動した。もともと大坂は俳人の殆どが雑俳に関わっている土地柄であることから、大坂俳壇での自門の定着を図ったことだったと考えられる。先述したように『其角十七回』には魚江との歌仙が収められていることをふまえると、紹廉の活動の効果は早い時点から現れていたといえる。その四年後の享保十二年に成立した沾徳一周忌追善集『ちりの粉』では、仙鶴・敬雨・巴人・淡々らの発句が入集しているが、それと同時に、白羽・魚江といった有力な紹廉門の俳人の句が入集している。この書により、江戸の沾徳門下であることを内外に示し、一門の活動が本格的に始まることを宣言したと考えられる（34）。

これ以後、紹廉門の活動は広がりを見せる。一門の代表的な俳人としては、先述の舞雪の文章に見える魚江・魚輔（紹廉の初号を継いだ二代目）・李原・十南斎白羽のほか、桜坊舞雪・南陽舎几掌（のち一炊庵二世）・二条庵笛十らがいる。このなかで、魚江から白羽までは、師の紹廉より先に死没したため、舞雪・几掌・笛十が紹廉門を支えていくこととなった。その活動内容は、雑俳のほか、絵俳書や高点付句集の刊行と多岐に渡る。これは当時の大坂俳壇の流行に乗ったものであった。雑俳活動は才麿門が積極的であったが、来山門の布門、淡々門の播磨俳人瓢水、貞峨（紀海音）門の潘山など、大坂俳壇全体で盛り上

がりをを見せていた（35）。また絵俳書は淡々系と祇空系を除いた各流派から盛んに刊行されていった。高点付句集については淡々門が中心であったが、紹廉門も宝暦年間に入るまで紹廉判『筆華領』（寛保三年（一七四三）刊）の他、白羽判『なには筏』（寛延三年（一七五〇）刊）等多く上梓していた。

これらの俳諧活動とは別に、紹廉門には矢数俳諧という世間の耳目を集めた行事があった。延享四年（一七四七）五月六日、有力門人の白羽は、菅神奉納の一日一万句独吟興行を行った。『俳諧家譜』によると備後町徳成寺で行ったとのことである。西鶴の二万三千五百句大矢数以来のことであり、大坂中の俳諧宗匠を集めた空前の規模の興行となった。以後の白羽の活動は句数にとらわれたものとなるが、興行の度に評判となった（36）。当然ながら、紹廉門の俳人に与えた影響も大きかった。宝暦四年（一七五四）には、几掌が京都北野で奉納一日独吟万句を成就し、以後万翁と号した。この矢数俳諧は、江戸系の紹廉門が、大坂俳壇に適應するための最たるものであり、談林系に連なることを強調するためのものであったと思われる。大坂の門人たちの働きによって、紹廉門は宝暦期に最盛期を迎えた。漁焉号で秋成が句を寄せていることでも有名な先述の紹廉八十賀集『うたゝね』は、淡々系や談林系の俳人、江戸系の巴人門の宗屋・几圭、さらには歌舞伎役者連も名を

連ね、当時の紹廉門の隆盛ぶりを後世に伝えている。

一方、師の紹廉自身はどうであったか。延享期以降、紹廉自身が編集した俳書はなく、前述の活動に関わった形跡も見当たらない。華やかな活動は大坂の門人達に任せ、自らは古典の修養に勤しんでいたようである。第一節でも述べたように、紹廉は和歌や物語を楽しみ、晩年はその書写を怠らなかった（37）。深沢氏は、この紹廉像について、大坂に入門を構えるまでの事蹟を挙げ、そのしたたかさとの懸隔を強調し、「門人の作り上げた理想的な虚像」と述べる。確かに、門人たちが、塵界に名利を求め続けた印象のある淡々と対比させるため、あるいは一門の宣伝のため、隠逸者として強調した部分はあったであろう。だが、紹廉自身にとってみれば、大坂で成功を収め、表舞台から退いて余裕が生まれたのち、あらためて雑俳から始まった自己の俳事を振り返ってみて反省の念を抱き、一から古典についての研鑽を積みたいと思ったのではないであろうか。だからこそ、幅広い教養を持ちながら、八十六歳で亡くなるまで一途に古典を学び続けたと考えられるのである。

最後に、紹廉の句を見ておく。

①御盃流れの末も手にふれて

（『うたゝね』）

② 七十五非をあらためて非のはしめ (『さし柳』)

③ 年ハ山人も梢もなりひさこ (『うたゝね』)

④ しのふ物思ハせ降やさゝれ雪 (『宝暦七年晚鈴歳旦』 (38))

①は季の詞がないが、「御盃流れ」から「盃流し」、すなわち桃の節句に行われる曲水の宴のことを詠んでいるとわかる少々凝った句である。②も季の詞を除いた句で、「日」に「非」が掛けられている。③も同様に、年の変わり目を指す「山」に「山人」が、「梢」に「来ず」が、④も「しのふ物」に「物思ハせ」が、「思はせぶり」に「降」が掛けられている。深沢氏も指摘されているが、紹簾の句にはこのような掛詞が多い。

また②の句は舞雪の「季なし句」の論に引かれている。舞雪のいう「季なし句」というのは、季の詞を使わずに、一句全体で季を読みとらせる句のことであつた。これは先述の『花月六百韻』に見られる淡々門の俳風と共通している。ただ、紹簾の句は、言語の機智に富むものであるが、淡々句のように注解が必要なほど難解なものではない場合が多い。

⑤ 貧乏とくむつ転むつ年の関

(『さし柳』)

⑥ 一夜越す年の手つまや八十五老  
（『宝暦十一年晩鈴歳旦』（39））

⑤や⑥のように、晩年には、老境の気持ちこそ率直に詠んだ句も見られる。これらは一句の趣向をそれほど凝らさず、句意がわかりやすいものが殆どである。

⑦ 二階へハ遠くて近し銀河  
（『うたゝね』）

⑧ 日傘待ハ甘露の花の雨  
（『うたゝね』）

一方で、先行研究では指摘されていないが、⑦のように、修辞技法や古典文学を使用せず、心の内でとらえた自然を直観的に表現した句も少数ながら存在する。『花月六百韻』に、同じ「二階」という語を使用した淡々門の半苔の句が入集しているが、比較するとその違いが鮮明となる。

二階にて雲と雨とに添寝する 半苔

二階へは遠くて近し銀河

半苔の句には、「巫山をとりまはして」という淡々の注が付されている。このことから、

男女が情細やかに結ばれることを指す「巫山の雲雨」の故事をふまえ、当世の男女が二階で枕を交わす様子を詠んだ技巧的な句であることがわかる。それに対し、⑦は古事をふまえておらず、かつ「二階」という語から、一見現実の情景を詠んだ発句のように思われる。

しかし、作者の視点は「二階」から離れ「天の川」側から二階を「近し」と見て、あたかも天の川を目前にしていると想像できるような世界を作りだしている。

また、⑧についても、先行研究では指摘されていないが、王朝期には貴人の持ち物で艶やかな情趣をもつ「日傘」という語に、「甘露」「花の雨」といった観念的な語を組み合わせることで、現実から遊離した一種の美的世界を展開している。これらは淡々の俳風からは見いだせない要素である。このような詩性も含んだ、江戸風、其角風に縛られない紹廉の独自の俳風が、大坂で受け入れられた理由の一つと考えられる。「浮浪子」(40)として青年時代を過ごし、洒落本の『列仙伝』では、特定の俳諧門派に属さない「ひとり武者」と評された秋成も、そこに魅力を感じて紹廉や一炊庵門下の俳人との交わりを持ったのであろう。

では、この時期の秋成の俳諧はどのような性質であったか。宝暦期の発句は、現在のところ宝暦三年の紹廉歳旦に入集したものが最初である。それ以降は、歳旦や追善集に載る



ものが殆どである。連句作品とは違い、それほど一句の趣向を凝らさず詠んだものが多い。

けふの春花咲山を算へけり（『紹廉歳旦』）（41）

雲淋し冬はあらはに北の山（『俳諧十六日』）（42）

淡々門のような技巧を重要視する俳風とは違い、落ち着いた趣をもつ発句となっている。

一方追悼句は、追慕の念を込めた真摯な態度のものが多く、特に紹廉に対しては、古典教養を深めようとした故人の姿勢を意識して、言語の機智を働かしつつも、敬慕の念を込めた追悼句を贈っている。一周忌追善集『雪達摩』（43）に見える、

ふりつむや風賦比興の六の花

という句は、『詩経』の風賦比興雅頌の六義を六花と異名をもつ雪に掛けたもので、趣向を凝らしているが、紹廉を失った後の物寂しさをよく表した句である。

また三回忌の追善集『さし柳』の

見しは秋あな芽も枯ぬ小野薄

という句は、紹廉の小野姓であることから、『江家次第』の小野小町と在原業平の説話をふまえる。目から薄が生えた小町の髑髏が夜「秋風の吹くにつけてもあなめあなめ」と歌の上句を詠み、それを聞いた業平が、「小野とは言はじ薄生ひにけり」と下句を付けたというもので、『袋草紙』や謡曲『通小町』にも同歌が見える。「あなめ」と「芽」が掛詞となっているが、これも技巧に走っただけの句ではなく、紹廉没後の寂寞感を表現したものとなっている。

このように、秋成の句風は、言葉遊びや、古典や和歌の典拠を用いながらも、句の意味は簡明であった。これは紹廉の俳風と共通した性質といえる。

以上のことから、秋成は、江戸の洒落風や淡々風を取り込みながら時には自己の詩性を発揮する紹廉に敬意を払っていたことがうかがえる。それだけに、紹廉が亡くなったことは、秋成の俳諧やその後の文事に影響を与えたと考えられるのである。

注

(28) 同氏「小野紹簾覚書」〔俳林閒歩〕(岩波書店、一九八七年) 所収。

(29) 大谷篤蔵編『上方俳書集上』(上方藝文叢刊二―一、八木書店、一九七九年) 所収。

(30) 深沢氏は前掲書第二部第七章「紹廉の系譜」で、紹簾は仙鶴とは対照的に、師の沾徳と連絡を取った痕跡がなく、また江戸の他門の俳人から紹簾について何も語られていないことを指摘されている。

(31) 同氏前掲書第二部第七章参照。

(32) (29) に同じ。

(33) 『俳諧叢書3 名家俳句集』(博文館、一九一三年) 所収。

(34) 深沢氏は、前掲書第二部第七章で、『ちりの粉』について、京都における淡々の『其角十七回』、仙鶴の沾徳追善集『水精宮』と同じく、大坂に江戸系の誕生を知らせるものであった、と述べられている。

(35) 宮田正信氏『雑俳史の研究』(赤尾照文堂、一九七二年) および『三都の俳諧―江戸・京都・大坂―(第九三回特別展)』(大阪市立博物館、一九八二年) 宮田正信氏解説。

(36) 大谷篤蔵氏「十南斎白羽覚書」〔俳林閒歩〕(岩波書店、一九八七年) 所収。

(37) 淡々門の田鶴樹は、『さし柳』下に「浪花の逸人紹廉翁ハ俳諧のあまり筆力の達者にして、万葉源氏物語り其外多く写し有しとや聞及ふ（後略）。」という文章と追悼句を寄せる。また、同書に収められる舞雪の「師翁追悼に」と題する文章には、「翁は生涯名を好まず、觴を挙ては句を諷ふの友とし、あるハ石州の流れを汲、志野米川の烟を分て、寢覚／＼の伽とし、月雪の影には机に臂を添へて、草紙物語りのいや高き峯のしら雲、霞の海の深き浅きを糺しぬ。彼宗椿法師ハ朝顔の巻の露と消、今や翁ハ古今余材抄の十といひ六ツめの巻にて、身のいたつき安からて、菊月の夕辞世を残してより、一旦良薬のしるし有といへとも、終に時雨中の四日八十六才にかそへ終る（後略）」とある。紹廉の古典愛好の態度が窺える。

(38) 柿衛文庫蔵。

(39) 天理図書館綿屋文庫蔵。

(40) 「浮浪子」は『世間妾形氣』序に見える語で、森山重雄氏『上田秋成初期浮世草子評釈』の注では「放蕩者」とされ、高田衛氏は『上田秋成年譜考説』で「無頼者の青春彷徨の一スタイル」とされる。

(41) 石川真弘氏「上田秋成発句集」『『ビブリア』第一一五号、二〇〇一年五月』。

(42) 『上方俳書集下』（上方藝文叢刊二―二）「大谷篤蔵編、八木書店、一九八一年」所収。

(43)(42)に同じ。

## 五、宝暦末の大坂俳壇と秋成

宝暦期末頃までの大坂俳壇は、新興勢力の江戸系俳人と談林系俳人とが共存し、活況を呈していたが、大きな変化が起こる。宝暦十一年（一七六一）冬に紹廉と淡々が、翌十二年には、淡々門の瓢水、巴人門の几圭といった有力な俳人達が相次いで亡くなる。瓢水は、第一節でも述べたが、京・大坂俳壇と盛んに交渉をもち、特に大坂の紹廉・白羽や、京の羅人一派と交わり、播磨俳壇と京・大坂俳壇を繋いだ人で、七十九歳で亡くなった。秋成が追悼句を寄せ敬慕の情を表した俳人でもある。その俳風については、富田志津子氏が述べられているが（44）、若い頃は、

大名はおれ等が山の花見かな『夢の名残』（宝永二年）（45）

のように豪放磊落で卑俗な表現が目立つ。しかし後年では、『柱暦』（宝暦十年（一七六〇）

成」の句のように、落ち着いた作風で、わかりやすいものが多い。

菜の華やあつめてはねる水車

国替や火桶におしむ菊の笛

収入確保のため、地元播磨で雑俳の点者をしていた影響もあつたであろう。淡々のように奇をてらった俳風ではなく、来山のように自分の心情をありのままに表現する詠みぶりであると富田氏に指摘されている。紹廉と並んで秋成が敬意を表したのは、このような句風によるものと考えられる。

一方の几圭は、京の早野巴人門で、「俗談平話」を旨とし「人情世態のおかしき句」(46)を詠むといった独自の俳風をもっていたが、淡々一門や蕪村とも交流があつた。七四才の高齢で没した几圭は、巴人門において、京の俳人宋屋と並ぶ長老的存在であつた。秋成が俳壇のなかで唯一「師」と呼び称した俳人でもあり、また子の几董は生涯の友人であつた(47)。これらの有力な俳人たちの死は、勿論当時の大坂俳壇に衝撃を与えたが、秋成にも、俳諧のあそびを楽しめる場が失われたと感じさせたであろう。もともと「ひとり武者」

として俳諧活動をしていた秋成は、俳風や俳諧観に敬意を持つ俳人とのみ交友を持っており、その俳人の率いた、あるいは属した一門に対して、無条件に興味や義理を持っていた様子は窺えないからである。また当時、秋成が俳交を結ぶに足ると思える俳人が、既存の俳壇勢力の中から生まれてくる状況になかった。ふたたび宝暦末の大坂俳壇に目を転じると、談林系の最大勢力である椎門を率いていた矩州が、宝暦十一年に財産没収の上大坂三郷を追放された。罪状は、大坂東町奉行所与力から不正に得た情報をもとに、米相場で利益を得たことであつた（48）。これにより、大坂俳壇の主要な勢力は、ほぼ同時期に一門の中心的人物や有力者を失うこととなった。『列仙伝』（宝暦十三年刊）では、当時の状況について、淡々への批評を中心に次のように述べている。

半淡翁（引用者注、淡々）といふ俳師、京より浪花にうつり、コヤツ日本無雙の横着ものにて、我がけんしきをたて、俳諧を聖人の道のやうに位どつて、傳授口傳の我流をおこし、句姿も奇妙なる所へ取つて飛ばし、門人には周章（同、秀鏡）・嗅穴（同、嗅洞）、後にしろさだ（同、くろさだ・日藤）なんどといふ、富みたる弟子どもをとらへ（中略）、涙ながして傳授銀出す事なりしが、さしもの狼も老かさなりて、人を

喰ふいきほひもぬけて身まかり、同じふるき俳諧師どうれん（同、紹廉）も古人と成、五盃堂（同、五彩堂矩州）も隠れければ、跡はごちや／＼なりたる中にも、此半淡などを今にそしるものあり。半淡が我流をおこしたるは、其器量にしてはいかが上手るゆへなり（中略）、俳諧にては海内に名をふるひたる名人なるに、それに今ごちや／＼のはいかい師どもが、どふのかふのといふは、濱芝居の役者が立てもの顔するやうなもので、本舞臺へ出ぬ事也。

淡々の俳諧観や俳風について手厳しく批判しているが、「我がけんしきをたて」て、俳諧で「海内に名をふるひたる名人」であつたとも認めている。『列仙伝』では、この淡々や同郷で俳壇の重鎮である紹廉が逝去し、矩州までが隠退したことで、「ごちや／＼」の状態になつていと戯画的に述べている。混乱のなか、大坂俳壇内の各グループ間の連絡は滞り、俳壇全体を先導するような俳人は生まれず、秋成との繋がりも弱まったと考えられる。これは、明和以降に大坂俳人の編書が急激に減少したことからも推察できる（49）。

各門に後継者はいたが、俳壇の先導役を担ったり、一門の勢力を拡大させたりする力はなかった。紹廉門の後継者の有力候補であつた木田几掌は、一炊庵二世を名乗り、自己の



俳系を宗因末流に位置づけようと積極的に活動するが、秋成が俳交を結ぼうとした形跡はない。次章で詳述するが、むしろ秋成は宗因俳諧発句集『むかし口』（安永六年（一七七七）刊）の梅翁伝で不快感を示している。一方、淡々門下の布門の子で五流斎三世を名乗った女媒は、明和期に入って、歳旦の他は俳書を二点刊行するのみで、惰性的な活動に終始した。

以上が、秋成が大坂俳壇から離れていった理由の一つと考えられる。この後秋成は安永年間における蕪村との交友まで、俳諧活動を活発化させることはなかった。

注

（44）『播磨の俳人たち』（和泉書院、二〇一〇年）第二章参照。

（45）岡田利兵衛氏編『鬼貫全集 三訂版』（角川書店、一九七八年）所収。

（46）『古典俳文学大系12 蕪村集』所収の『其雪影』蕪村序（明和九年（一七七二）成）に拠る。

（47）『続明鳥』無腸小序（安永五年（一七七六）刊）には「甘とせのむかし」、つまり宝暦六年（一七五六）に几圭に俳諧の指導を受けたと述べられ、「此句作るわさにはやがて師にてそますを、このあそひをわすれゆくめるまゝにおちにもうとくしうてわかれぬ」とある。

(48) 大谷篤藏氏「内山栗斎の俳業」『俳林閒歩』(岩波書店、一九八七年) 所収」。

(49) 深沢氏の前掲書「大坂俳書年表稿」参照。

## 六、秋成と明和期以降の京・大坂俳壇

秋成の俳諧活動が低調になった時期の前後、大坂は蕉風復興運動の高揚期を迎えている。芭蕉顕彰活動が本格化したのは明和八年以後であるが、それ以前から蕉風志向が活発化していた。その背景には、享保期末から全国的に高まり始めていた芭蕉復古の機運の高まりがあった(50)。

また、隣接する京俳壇でも、地方での蕉門熱の高まりに呼応する人が現れる。宝暦九年に、のちに蕉風復古運動の中心となる蝶夢が、宋屋門から離れ地方系蕉門に転身する契機を迎えていた。蝶夢は宝暦四年(一七五四)頃から浄土宗の帰白院の住職となり、同じ時期に俳諧に興味をもち、京の宋屋門に出入りするようになった。蝶夢の出句状況を田中道雄氏の論考の年譜で見ると、宋屋の編書に句が入集する他、竿秋、五始、風状といった淡々系俳人の俳書にも句が見える。ただ、田中氏が「宝暦八年の『戴恩謝』以降宋屋門にとど

まった証拠はない」と指摘される（51）ように、蝶夢は宋屋との関係を深めようとはしなかった。実際、田中氏の論考発表以後に発見された、宝暦七年（一七五七）刊の几圭蓬髮記念集『はなしあいて』上巻でも、蝶夢は宋屋門の俳人として名を連ねず、几圭・青峽と歌仙を巻いている（52）。

蝶夢が宋屋門から遠ざかったのは、宋屋の俳風に一因があるとする深沢氏の考察がある。宋屋の宝暦期の発句には、次のようなものがある。

①しら魚のいかで遊ばぬ京の水 富鈴 『俳諧家譜』（宝暦元年）

千家の辺に遊びて

②風炉の火に匂ひ残りて利休堂 『老木の芽』（宝暦九年）（53）

③大年や浮世又平筆の鞘 『伊丹歳旦』（宝暦十年）（54）

④老が身やきのふの上に初裕 『陸貸杖』（宝暦十一年）（55）

同氏は、宋屋の句については、過度な技巧を排した「平明なもの」と、言語の機智や典故がある「作意を主としたもの」の二つに分けられるとする。前者の句は②④、後者の句

は①③といった具合である。宋屋句全体の傾向としては、作意はあっても単純で、わかりやすいものが多いという評である。

⑤ よし野出て虻のはなれぬ袂かな

⑥ しらぬ同士夫婦と化ておどり哉

また、嘯山の『俳諧古選』（宝暦十三年（一七六三）刊）に取られる発句⑤⑥は、句意が明らかでありながら、一句の趣向を凝らしているため、どちらかに分類するのは難しいとされている。この「平明」と「作意」が混交する句風は、其角・嵐雪系でありながら、地方系蕉門俳人との交流を持った宋屋らしいといえる。この都市系・地方系どちらか一方に与しない柔軟な俳風に対し、蝶夢は納得できず、宋屋門と距離を置いていったのではないかと深沢氏は指摘されている（56）。

自己の俳諧を模索していた蝶夢が転機を迎えたのは、偶然参会した敦賀の琴路亭の俳席でのことであつた。そこで付句の法を知らず恥をかき、初めて俳諧に道があることを意識することとなった。安永三年（一七七四）写の『草根発句集』の自序には「芭蕉翁の正風

体を頓悟」したとある。

その後蝶夢は、琴路から紹介された二柳に勧誘され、加賀の蕉門に近づくこととなった。二柳は加賀山中の生まれ、三四坊・不二庵と号した俳人で、前半生は近畿を中心に行脚を行い、加賀の希因の遺志を継いで蕉風復興を各地で訴えていた。寛延末に京に出て、几圭と知り合い、宝暦初めには多くの京俳人と交流していた（57）。のちに秋成の『也哉抄』の論駁書『みなし蟹』を出版したことも有名である。その後、二柳と本格的に交友を結んだ蝶夢は、二柳から在京の蕉門俳壇を継ぎ、宝暦十三年以後、毎年の正忌に「時雨会」を催す。また、加賀俳人の既白・麦水、江戸俳人の梨一らの影響を受け、蕉門内部の改革を目指す。明和三年（一七六六）三十五歳の時に帰白院の住職から退き、同五年には洛東岡崎に五升庵を結ぶ。以後蕉風復興のため、明和七年三月には、義仲寺で芭蕉堂再建法要を行ったり、記念集『施主名録発句集』を刊行したりするなど、多彩な活動を展開することとなる。

この蝶夢の活動に反応する談林系俳人が現れる。宝暦十一年に大坂を追放された後、伏見・湖南・堺・泉州と大坂周辺を転々としていた（58）椎門の矩州である。彼は宝暦十三年（一七六三）に刊行された義仲寺の芭蕉七十回忌法要の記念集『芭蕉七十回忌粟津吟』

に出句している（59）。矩州は大坂俳人としては例外的存在ではあるかもしれないが、宝暦末の時点ですでに蝶夢が芭蕉顕彰活動を行っていることが京俳壇外でも認識されていたことの証となるであろう。

また、既存の俳壇勢力内でも、大坂以外の蕉風復古の多様な活動に呼应する動きが見られる。元来大坂では、嘯山編『俳諧古選』総論に「今洛津之作者。他邦ノ蕉門ト。互ヒニ相齟齬ス（原漢文）」とあるように、地方系蕉門に対する拒否感情が根強かった。そのため、宝暦期には、其角・嵐雪の流れを汲む都市系蕉門が談林末流と共存しながら、主知的な滑稽を重んじる俳諧を展開していた。

一方で、淡々門下の俳人村径による、最古の『奥の細道』注釈書『おくのほそ道鈔』（宝暦九年序、同十年跋）にも見られるように、淡々門では師の「我流」の影響下にはあるが、芭蕉の教えや作品の解釈が共有されていた。これは、淡々がかつて師と仰いだ其角を通じて芭蕉に連なることに誇りを感じていたからである。つづいて、談林系の才麿門の梅門も、明和元年（一七六四）に芭蕉発句の注釈書『師走囊』を刊行する。深沢氏は、これらの注釈書进行分析して、流派を越えて大坂俳壇が芭蕉を理解し受容しようとしたと述べられている（60）。

さらに、深沢氏は、紹廉門について、大坂瓦町の富商であった木田几掌が宝暦五年（一七五五）に行った東国行脚紀行文中で、義仲寺や松島において芭蕉に敬意を表していること、白羽が『右紫』（延享二年（一七四五）一炊庵紹廉序）に収められる伊勢紀行文の中で、義仲寺の前にさしかかりながら芭蕉の古蹟に詣でず、発句も詠まずに通り過ぎた、と記していること等を挙げて、他門と同様に芭蕉を意識していたと結論づけている（61）。

このように、すでに宝暦期には、淡々門や談林系、紹廉門といった主要な勢力の俳人の中で、芭蕉の再認識が進んでいた。明和期になると、京俳壇で蝶夢や、宋屋門の嘯山を中心とした蕉風復古の波が一段と高まりを見せる。大坂俳壇でも、各派の指導者層の交代と相まって、芭蕉や蕉風への傾斜を深めていく俳人が見られることとなる（62）。

俳人大江丸は、その好例である。彼は享保七年（一七二二）十月五日、大坂高麗橋一丁目に生まれる。姓は安井氏、大坂道頓堀を掘鑿した安井道頓の六代目に当たる。名は政胤、幼名を利助という。九歳の頃から家業を手伝い、寛延二年（一七四九）二八歳の時、家業の三度飛脚の間屋を継ぎ、精勤の末、大成功を収めた。仕事のため諸国を旅行し、『俳懺悔』（寛政二年（一七九〇）刊）で「東都の往返五十度に及ぶ」（63）と述べるほどであった。

元文六年（寛保元年・一七四一）二〇歳の時に江戸座の活々坊旧室に入門し芥室の俳号

で俳諧を始めたが、「たゞ歳旦・せいぼの二句をなすのみなりし」(『俳懺悔』)の言葉が示すごとく、芥室当時の句は少ない。その後、吸露庵を開いた涼袋(建部綾足)に師事したこともあったが、宝暦六年(一七五六)三五歳の時には大坂で家業の傍ら「浪花の半時庵 勃々庵の社中になりて」(『俳懺悔』)、旧国、旧州と改号した。宝暦七年三月、初めて蝶夢のもとを訪れたが、この当時は、淡々門俳人として宋屋門俳人と交流したという位置づけである。半時庵で流行の点取俳諧に興じた当時、「蕉門の風雅は、ちからなき物とのみ心にとゞめず」(『俳懺悔』)と、蕉門に対して関心を抱かなかったとある。この時期の大坂において蕉門勢力はまったく振るわず、『列仙伝』のなかでも全く言及されないほどであった。

転機が訪れたのは、明和三年(一七六六)春、仕事のため仙台に下った折、松島に遊んだ時であった。「扶桑に三つの勝地」(『俳懺悔』)を前に夜を徹して句案を練るが一向に浮かばず、朝霞のなか、点々と現れる千島の松から「朝霧やあとより恋の千松島」という句が浮かぶが、それは雪中庵寥太が前年に松島に遊んだときに詠んだものであると気づいた。しばらく句を推敲して、「意味深長なる事」に感じ入り、江戸に戻って寥太にこの事を懺悔し、師事する。以後は天明七年(一七八七)に寥太が没するまで雪中庵門として活動する。また、明和七年には、享保末に蕉門の野坡が建立したのち荒廃していた芭蕉塚を訪れ、



寸馬とともに祭事を再興したと『俳讎悔』にある。翌年、二柳が入坂し、大坂における蕉風復興運動が活発化する。『はいかい袋』（64）には、

寛延の末より寶暦のはじめ迄、大坂にてばせを流のはいかい絶たる如く成しも、能登の馬明といへる人庵をかまへ、寸馬といふ人に道をつたへたり。其後二柳・竹阿など段々と出坂して、人々むれをなすに至る。

とあり、大江丸は大坂での蕉風復興の地ならしの役割を果たしたといえる。明和末頃には蕪村一派と交流するようになり、几董編『明がらす』（安永二年（一七七三）刊）に句が入集している。その後、『続明がらす』（安永五年（一七七六）刊）に句が見える。几圭十七回忌追善集である同書には、秋成も七句出句している。安永七年三月には、大坂下りをした蕪村・几董とともに網島や桜宮で遊ぶなど、夜半亭一門との交遊を深めていった（65）。また、秋成とも交友があり、天明九年（一七八九）七月二十二日には、几董の家で秋成と逢っている（66）。以上のように、大江丸は、明和期を境に、蕉風復興の動きのなかで俳歴を一変させた蕉門俳人であったといえる。

大江丸のほかに、蕉風に転身した大坂俳人に佐々木泉明がいる。泉明の俳事については、多治比郁夫氏が紹介された泉明の紀行文『松しま紀行』に詳しい（67）。それによると、最初は鳥路観（永江一馬。紀海音から元文五年（一七四〇）以前に鳥路観の号を譲られた）に師事し、文毛という初号であった。次いで川北立此の門人となる。川北立此の名は『俳諧耳勝手』（宝暦七年（一七五七）刊）に名が見えるほかは明らかでない。泉明が蕉門に入門したのは、大江丸と同じく明和年間になってからで、芭蕉翁五世を名乗る一交舎草秀に入門する。その後、明和六年（一七六九）に『奥の細道』に倣い松島行脚を行う。帰郷後、那須野芦野辺の一枝を、大坂吉祥寺の境内に植え、碑を建てるにあたり広く諸国の好事に短冊を乞い、それを柳下に埋めた記念に『一人一首短冊篇』（明和八年（一七七一）刊）をまとめる。碑文には、「蚤ニ遊歴ヲ事トシ。單身独歩。四方ニ客流：曾吾邦ノ俳歌ヲ喜び。仰僧桃青為所ヲ慕ヒ」（原漢文）（68）とあり、明和六年以前にも芭蕉流の風雅行脚を行っていたと考えられる。

以上のことから、明和期には、大坂俳壇でも蕉風復興の気運が一举に高まっていたことがわかる。秋成の俳諧活動が、第一節で述べたように宝暦十三年を境に停滞することとなるのは、紹廉や瓢水が亡くなったことに加えて、右に述べた大坂俳壇の状況が影響してい

るということは十分に考えられる。

では、秋成はこの状況に対し、どう感じていたか。秋成自身はこの時期の蕉門について言及していないが、摂津西宮の医師で、宝暦末頃より秋成と交友のあった淡々系俳人の勝部青魚は、『剪燈隨筆』三〔天明五年（一七八五）刊〕の中で当時の蕉門に対し批判を展開している。『剪燈隨筆』は、巻一から巻四まで、医学・儒学・文学や経済・史論など幅広い分野についての青魚の批評および同時代の文人たちに関する記事を収め、巻五では自己の見聞を三編の小品に綴って収めた書である。

先行研究でも度々触れられる蕉門批判の文章は以下の通りである。

俳諧も芭蕉／＼とて噓も芭蕉の噓ハ面白きといふやうに名に浮れるも浮氣也。蕉門も其角、嵐雪の徒ハ東都にて露沾、冠里などの諸侯にも交りて、他流沾徳、白雲が輩にも交りて、尤句調活達也。美濃の支考俳道を高上に云なし、俳諧にて家国も治るやうに説て蕉門一流を猥りし。又北国の蕉門、洛の去来、近江の許六、大坂の野坡など蕉翁隱逸閑寂のミを尊ミて、いつしか寒乞食に陥りたり。近年之句の趣向ハ論ぜず。只口氣を芭蕉らしく作る事を好ミ、田舎めきたる詞をつかひて去来、許六、乙由など

を慕ふやう也。是等芭蕉がる類也。蕉翁若シ再生あらバスでハないと歎かるべし（69）。

文中の「美濃の支考俳道を高上に云なし」云々の部分は、大谷篤藏氏も指摘されるように（70）、秋成の俳諧選集『俳調義論』の俳諧論「桃青にいたりて吞しるなしの一道と成て、俳諧だによくせば天下政教の道も明らむべしとハ、さりとしてハ／＼伊賀人もひが言ハ云也けり」の部分を想起させる。ただ、秋成の場合は、俳人が俳諧のみを道として他の文芸を顧みないことを批判しているので、青魚とは少々違う主旨である。しかしながら、我こそは芭蕉の精神を継ぐ「蕉風」の担い手であると称し、都市系俳諧の言語の美しさ・面白さを重視する俳風を認めない、という地方系蕉門俳人の偏狭性に嫌悪感を抱いている点は共通しているのではないか。秋成が敬愛の念を見せていた俳人たちは、淡々の作意・技巧を重視する俳風に影響を受けながら、他の要素を混合させ、独自の俳風を作っていた。青魚は、蕉門の其角・嵐雪が「東都にて露沾、冠里などの諸侯にも交りて、他流沾徳、白雲が輩」と交際したことで「尤句調活達也」と述べ、流派を越えた他門との交流の結果、自由闊達な句風が生まれたとする。それを継承し発展させた江戸系の俳人により、大坂俳壇で形成された俳諧創作の場を体験した秋成にとって、当時の地方系蕉門のあり方は、自

己の俳諧のあそびを否定するものとして到底許容できなかったと考えられる。大坂俳壇から距離を置いた秋成の地方系蕉門俳人に対する心情は、その著作のなかに窺うことができる。明和三年（一七六六）刊の『諸道聴耳世間猿』四ノ一「兄弟は気のあはぬ他人の始」（71）では、西行や宗祇を慕って風流行脚をする鶺鴒屋伊兵衛という男が登場する。この男は、古今伝授ののち、宗祇の説話に倣って鬚を伸ばす。「風流にくるしみて寝食をわすれ」るあまり、母親が妻を持つよう説得するも、妻子に束縛されては、すべての芸道は成就しないと親不孝にも聞き入れない。親のあてがった妾には顔へ煮え茶をかけて追い払ってしまう。挙げ句の果てには西行の系譜に連なろうとして、剃髪して吉野の奥に引きこもって、「屎ふむやあまりに奥の山ざくら」などという句を詠むという結末を迎える。この主人公は、全国を行脚して蕉風復興を訴える地方系蕉門俳人を諷刺したものと考えられる。

さらに、『雨月物語』（明和五年（一七六八）脱稿、安永五年（一七七六）刊）巻之三「仏法僧」では、拝志夢然という人物を登場させる。彼は、隠居後、家族の不幸など「忌むこと」があつたわけでないが剃髪し、全国各地を旅行して楽しむ人物である。この夢然は、高野山に立ち寄り、「寺院僧坊に便なき人は、麓にくだりて明すべし」という掟のため、宿泊を断られ野宿をする。その時に、俳諧好きであつたことから「平生のたのしみとする俳

諧風の十七言を、しばしうちかたふいて」詠み上げた結果、秀次主従の亡霊を呼び寄せてしまう（72）。ここでも、「忌む」こともなく僧形となり、俳諧行脚を行う地方の蕉門俳人を諷刺しているといえよう。一つ付け加えると、夢然を伊勢相可の人としたのは、伊勢人の村田道哲をモデルとしたという説や、守武以来の俳諧が盛んな地という考え方がある。しかし、地方系蕉門の中心地である伊勢を意識したのではないかと井上泰至は指摘されている（73）。地方系蕉門のなかでも、支考と親しかつた涼菟・乙由が導く伊勢派は、特に傍流の俳人が蕉風復興の鼓吹に熱心であった（74）ことを踏まえると、無理な説ではないと考えられる。このように、秋成は地方系蕉門俳人に対する批判意識を戯作の登場人物に投影していたと考えられるが、安永九年（一七八〇）に成立した『去年の枝折』（75）の中では、芭蕉に傾倒する俳人に対する感想として、より明確な形で芭蕉や蕉門俳諧についての考えを述べている。

寔やかの翁といふは、湖上の茅檐、深川の蕉窓、所さだめず住なして、西行宗祇の昔をとなへ、檜の木笠、竹の杖に世をうかれあるきし人也とや。いともこゝろ得ね。彼古しへの人々は、保元寿永のみだれ打つゞきて、宝祚も今やいづ方に奪ひもて行らん

と思へば、そこと定めて住つかぬもことわり感ぜらるゝ也。今ひとりも嘉吉応仁の世に生れあひて、月日も地におち、山川も劫灰とや尽すなんとおもひまどはんには、何このやどりなるべき。さらに時雨のと観念すべき時世なりけり。八洲の外行浪も風吹たゝず、四つの民草おのれ／＼が業をおさめてありか定めて住つくべきを、僧俗いづれともなき人の、かゝる事触て狂ひあるくなん、誠に堯年鼓腹のあまりといへ共、ゆめ／＼学ぶまじき人の有様也とぞおもふ。

秋成は、乱世に生きた西行や宗祇はともかく、四民が定住して己の仕事に励む太平の世に、「西行宗祇の昔をとなへ」て、俳諧の道を極めるため諸国を「うかれあるく」芭蕉を理解できないとしている。また「僧俗いづれともなき」托鉢僧の姿で諸国を「狂ひあるく」芭蕉崇拜者たちに嫌悪感を示している。一見芭蕉個人の人格や生涯に対する攻撃のように受け取られる文章である。しかしこれは、旅の中で得られる「自然の美しさや人との出会いから得る情の尊さ」(76)を至上のものとし他を排斥する地方系蕉門に対しての抵抗感の現れであつたのではないか。そうして、自己の俳諧を守ろうとしたのではないか。

この後秋成は、寛政三年(一七九一)春以降に成立した『癩癖談』(77)に、芭蕉の

『奥の細道』行脚に憧れ、東北のある城下町を訪れた俳諧愛好者が、博奕打ちなみに扱われ宿を借りられなかった、という話を載せる。中村幸彦氏は、この人物のモデルを、明和六年（一七六九）に松島行脚をしている佐々木泉明に擬している（78）。しかし、特定の人物に対してではなく、行脚した各地で蕉風を宣布してまわる俳諧師全体を揶揄していると考えられる。

以上のように、秋成は、さまざまな著作のなかで地方系蕉門に対し批判を繰り返している。これは青年期に大坂俳壇で出会って以来、自己の中に息づいてきた、言語による作意・技巧に止まらないさまざまな要素をもつ俳諧を否定されたくない、との気持ちからのものと考えられる。

ただ、宝暦期の終わり頃の時点では、その俳諧を楽しむ場が失われたことを感じたため、別ジャンルの新しい文芸の中で自己の詩情を表現することに興味を移していったと考えられる。和歌に関しては、宝暦十年（一七六〇）以前に、小沢芦庵の友人の小島重家から指導を受けたとされる（79）。また、先に紹介した青魚は、中国白話小説を渉猟しており、その方面を秋成に紹介したとされる（80）。また同時期に秋成と俳交を結んでいた富士谷成章は、秋成が『胆大小心録』で、実兄の儒学者皆川淇園より学力があると評するほどで、



幼い頃から漢詩をものし、中国白話小説を愛読し、和歌・和文を一通り修めた国学者であった。このことから高田衛氏は秋成の文学的資質に与えた成章の影響を重く見ている(81)。第三章で詳述するが、安永三年(一七七四)に刊行された秋成の俳諧語法書『也哉抄』には成章の語学書『あゆひ抄』の影響が見られる。このような和漢の教養にすぐれた友人と俳諧を通じて交流することで、秋成は中国白話小説や和歌・国学といった新しい文事に目を向けることとなる。

注

- (50) 宮田正信氏『雑俳史の研究』(赤尾照文堂、一九七二年)。
- (51) 田中道雄氏「蝶夢の俳壇登場をめぐる諸問題(上)」(『語文研究』第二十一号、一九六六年二月)。
- (52) 『上方俳書集下』(上方藝文叢刊二―二)(大谷篤蔵編、八木書店、一九八一年)所収。
- (53) 柿衛文庫蔵。
- (54) 『伊丹文芸資料』(伊丹叢書1)(岡田利兵衛編、一九七五年)所収。
- (55) (53) に同じ。

- (56) 深沢了子氏前掲書第一部第四章参照。
- (57) (51) に同じ。
- (58) (48) に同じ。
- (59) 大内初夫監修『時雨會集成』(義仲寺ほか編、一九九三年)。
- (60) 深沢氏の前掲書第二部第七・八・九章参照。
- (61) 深沢氏の前掲書第二部第七章参照。なお『右紫』は柿衛文庫蔵本を参照した。
- (62) (50) に同じ。
- (63) 『日本俳書大系 10 中興俳話文集』所収。
- (64) (63) に同じ。
- (65) 大江丸の生涯については、大谷篤藏氏「大伴大江丸」『俳句講座 3 俳人評伝下』(明治書院、一九五九年)所収。や加藤定彦氏「大伴大江丸の研究」(『国文学研究資料館紀要』第2号、一九七六年三月)に詳しい。
- (66) 高田衛氏『完本 上田秋成年譜考説』(ぺりかん社、二〇一三年)。
- (67) 多治比郁夫「佐々木泉明の『松しま紀行』」(『日本書誌学大系 89 (2) 京阪文藝資料 第二巻』(青裳堂書店、二〇〇五年)所収)。

(68) (52) に同じ。

(69) 『随筆百花苑』第六卷（中央公論社、一九八三年）所収。

(70) 大谷篤藏氏「俳人勝部青魚―秋成初期俳諧資料―」（『俳林閒歩』（岩波書店、一九八七年）所収）。

(71) 『上田秋成全集』第七卷（中央公論社、一九九〇年）所収。

(72) 『日本古典文学大系』56 上田秋成集』所収。

(73) 同氏『雨月物語論―源泉と主題―』（笠間書院、一九九九年）第三章第二節『雨月物語』と  
当代」。

(74) 田中道雄氏『蕉風復興運動と蕪村』（はじめに）（岩波書店、二〇〇〇年）。

(75) 『去年の枝折』は、大正時代刊行の『上田秋成全集 第一巻』（国書刊行会）に翻刻されている  
が、誤刻が多い。よって、国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルム（講談社蔵の松宇文庫に収  
められた底本は損傷が激しいため、閲覧不可）を参照した。

(76) (74) に同じ。

(77) 『新潮日本古典集成』22 雨月物語 癡癡談』所収。

(78) 同氏「秋成に描かれた人々」（『中村幸彦著述集』第六卷（中央公論社、一九八二年）所収）。

(79) (66) に同じ。

(80)『日本古典文学大系 56 上田秋成集』中村氏解説。

(81)(66)に同じ。

おわりに

秋成が明和期になって大坂俳壇から距離を置いたのは、第一に、宝暦後半に、敬意を持っていた紹簾や瓢水といった俳人たちが、俳壇から相次いで退場し、俳諧のあそびを楽しむ場が失われたこと、第二に、宝暦期後半より蕉風復興運動の影響が強くなった大坂俳壇において主流となった俳風と、自己の俳風との懸隔が広がったことが理由であった。

俳壇から離れた秋成は、親しい俳諧の友人たちが属していた新しい学芸の世界に軸足を移す。その結果生み出されたのが、白話小説を翻案し、膨大な和漢の古典文学作品を典拠とする、擬古文体で書かれた読本の傑作『雨月物語』であった。秋成は俳諧から、小説や和歌に活動の重心を移して、自己の詩情を追求していくようになる。

その後、安永二年(一七七三)四十歳の時に秋成は漁焉から無腸と改号し、秋成号を使い始めたと考えられる。同年に成立した『也哉抄』(天明七年(一七八七)刊)の門人の露

堂・秋津・竹母の序には、

師みづから云。外剛にして内柔、是我性なりと。因てさらに無腸の号をえらびて、紫陌を田舎に住かふる時、

月に遊ぶおのが世はありみなし蟹

と云句あり。

と記されている（82）。腸などの中身があまりないという「みなし蟹」は、無腸号を名乗った秋成自身を表し、俗世に対し斜に構え、自己の風流にあそぼうとする秋成の姿勢が表れているといえる。

秋成の改号が安永二年と特定できるのは、安永元年まで全ての句で漁焉号を使用していることによる。また、勝部青魚の六十賀集『桑蓮集』（83）〔安永二年六月序・秋刊〕では「秋成菴漁焉」という俳号で「花おまそあつかおまそふ梅の花」という発句を詠んでいること、さらに、安永三年の正月に書かれた『也哉抄』の蕪村序に「我友無腸居士」とあることによる。

秋成は明和八年（一七七二）に火事で家産を失い、商人として再興する道をあきらめ、この時期は医者を目指していた。同時に古学研究に打ち込んでいた。この後、秋成は、国学や和歌・和文を中心とする新しい文事を展開していく。俳諧においても、『也哉抄』や『俳調義論』で文芸や俳諧に関しての持論を展開し、『去年の枝折』といった作品のなかで、古学の研究成果を生かし、自己の俳諧観に基づき文芸世界を構築していくのである。

注

（82）『也哉抄』の本文は、末吉家蔵本を底本とする『上田秋成全集』第六卷（中央公論社、一九九一年）の翻刻を用いて、柿衛文庫蔵本のマイクロフィルムを適宜参照した。

（83）（52）に同じ。

## 第二章 無腸改号後の俳諧

### 第一節 無腸の城崎行―『雨月物語』所縁の地の探訪

はじめに

秋成は、怪異小説集『雨月物語』を刊行して三年後の安永八年（一七七九）、四十六歳のとき、九月中旬から十月下旬にかけて、病氣療養のためと称して、妻のたま女を伴って城崎旅行を行った。帰坂後の同年冬、旅の体験をもとに、秋成はまず三十三首の和歌を含む文章『秋山記』（『藤簾冊子』（文化三年（一八〇六）刊）巻三所収）を執筆する。これは自身とたま女の和歌を交えた紀行文であった。翌年十月、城崎への旅の思い出を回想し、俳諧を含む紀行文『去年の枝折』を執筆した。

秋成文学のこれまでの研究の中で、『秋山記』『去年の枝折』双方を取り上げたものは多くはない。しかし、『秋山記』と『去年の枝折』は、一般的な紀行文とは明らかに異なった性格をもっている。

まず、一つの旅を題材に、二つの異なった形式の紀行文が書かれていることである。次に、秋成の病状や、旅の目的であるはずの湯治について、作品内で具体的な記述がないことである。

そもそも、秋成が本当に病だったかについては疑問点がある。大坂方面から城崎を目指すには、当時、神崎から昆陽に出て、但馬に出る道程もあつたが、秋成は須磨・明石の地を通過して、姫路近くで北上し但馬を目指すルートをとっている。このような遠回りの道程がとられているのは、秋成にとって『去年の枝折』『秋山記』の旅の主な目的が、病氣療養ではなかったことを示していると考えられるのである。

これらの点をふまえながら、勝倉寿一氏は、城崎行が、「市井の文人・学者として自己定立をはかる」秋成の精神的な営みを表すものとされた。そして、「去年の枝折」は、題名の由来となっている西行の歌と、作品冒頭に着想・構想を借りたと述べた伊丹俳人・上島鬼貫の回想旅行記『禁足之旅記』中の詩精神、及び芭蕉批判を基本とする「秋成の新たな学芸への意志表明」であつたとした（1）。

一方、加藤裕一氏は、歌文集『秋山記』は、物語の世界と密接な関係をもち、句文集『去年の枝折』は日常の世界とつながると述べられた。さらに、『去年の枝折』末尾にある「秋



山の記の遺漏を翌年の冬難波にてかける也」という文を重視して、『去年の枝折』は基本的には『秋山記』の「補遺」であるとした(2)。

本節では、これらの先行研究をふまえ、『去年の枝折』と『秋山記』とを比較することによって、旅の前半の行程をたどる。その上で、秋成が、『雨月物語』巻之三の二「吉備津の釜」等に所縁のある地を訪れていたことを確認する。さらに秋成が、『雨月物語』に代表されるような文献操作にもとづく文芸・学問を、実証学的に問い直そうと試みた結果、播磨の館(屋形)において挫折に至ったことを述べる。併せて、『秋山記』と『去年の枝折』が、相互補完関係にあったことを述べたい。

#### 一、磯良像との関係

城崎への旅は、湯治のためと称して妻とともに尼崎を出立するところから始まる。目的地は城崎温泉であり、そこで約一ヶ月間滞在した。城崎を出て天橋立等を見物したのち、十月二十三日、秋成夫婦は尼崎に帰着した。

加藤裕一氏は『秋山記』『去年の枝折』本文の比較・検討をもとに、旅の足跡を辿り、行

程表を作られている。その結果、大坂出立から城崎到着までの往路に限り、二つの作品の「相互の地名が補完」され、「紀行文Ⅱ旅の記録としては、両作品は併されることによって初めて完璧な作品となる」と指摘されている（3）。そこで、両紀行文の前半の道すじを検討し、『秋山記』で表現できなかったものを『去年の枝折』でどのように補っているか、考察したい。

秋成夫婦が旅をはじめた九月十二日の早朝は、露霜ができるほど寒さが厳しかったが、「朝かげのどか」な気候に助けられて、二人は順調に路程を消化する。武庫川で一句詠んだあと、「西の宮の駅」で見送りの人を帰した秋成は、日が高かったが、妻の身を氣遣って、「住よしの里」に一泊することを決めた。

住吉の里について、秋成は「ここは兎はらの郡ながら、郷の名の同じきにぞ」と述べている。『摂津名所図会』〔秋里籬島、寛政十年（一七九八）刊〕を見ると、住吉の里には、長門国豊浦から勧請した菟原住吉神社がある（4）。秋成は、住吉という里の名はその神社から名づけられたから名前が同じである、と云っていることがわかる。『去年の枝折』では、翌日に菟原住吉神社の新嘗祭があるということと、豊作の秋ということとで、里全体の喜びに溢れている様子が描写されている。

これらの土地で体験したことについて、記述は簡潔であり、一般的な紀行作品の記述と差異がないように思える。しかし、『去年の枝折』に記されているこれらの地は、『雨月物語』の物語設定と深くかわる土地であった。

そのひとつに、怪異小説中の白眉と称される『雨月物語』『吉備津の釜』で、怨霊に変化する女主人公の名前、「磯良」との関係が挙げられる。この名前は、もともと神功皇后の三韓出兵の際に軍船を案内した、海神の「安曇磯良」を指すものであった。安曇磯良は、志賀島に根拠をもっていた海人族安曇氏が信仰した神であり、清田啓子氏が指摘されたように、『本朝神社考』巻二「住吉」の項に、磯良についての記事があるほか、『太平記』巻三十九、『八幡愚童訓』にもほぼ同じ内容の説話が記載されている（5）。これらの書は、いずれも近世期には一般に流布していたものであった。

『太平記』巻三十九「神功皇后新羅を攻めたまふ事」によると、この磯良は、長い間海の中で暮らしたせいで、五体に細螺（貝殻）や石華（石花貝）、藻虫がつき、醜い形となっていたこと、それを恥じて、神功皇后の招集に応じなかったが、神楽の演奏の面白さに惹かれて姿を現したことが描かれている。その後、安曇磯良は竜宮への使者となり、龍神から「干珠・満珠」という霊珠を借り、神功皇后に与え、新羅征伐の助けとした（6）。

一方、『八幡愚童訓』では、

御神楽ノ終又前ニ常陸ノ国ヨリ豊浦ニ着ク。余ニ顔ノ悪キ事ヲ恥給テ、淨衣ノ袖ヲ解テ 御顔ニ覆テ、御頸ニ鼓ヲ懸ケ細男ト云舞ヲ舞給ケリ。(7)

と、醜い顔を恥じて「淨衣ノ袖ヲ解テ」顔を隠しながら細男の舞を踊る様子が描かれている。細男の舞（青農、才男とも書く）というのは、単なる舞ではなく、海人族が海神磯良を誘い出す呪芸で、のちに豊前の宇佐八幡宮の放生会に伝承される傀儡子舞を指すようになった。

室町から江戸時代にかけては、十日戎で名高い西宮えびす神社に属した傀儡子族が全国をまわり、エビスの人形を正月などのめでたい日に舞わせて、細男舞（傀儡子舞）を各地に伝えた。西宮えびす神社は、関西一円のエビス信仰の総本社であり、西宮の地名の由来となっているが、もともと漁民の信仰していた海神エビス神は、記紀神話に登場するがヒルコ（蛭子）であった。これは伊佐那岐・伊佐那美の二神が生んだ子で、海に流され、磯良と同じく海の彼方から迎えられた神であった（8）。このように「西宮」は、「細男舞（傀

儼子舞」や「海神」という共通点を通じて、「磯良」のイメージとつながる地名であった。

もうひとつは、秋成夫婦が一泊した住吉の里にある菟原住吉神社との関係である。『摂津名所図会』にも記述があるが、この神社の祭神は、摂津の住吉大社と同じく、第一が天照太神、第二が八幡宮、それに続いて、第三が神功皇后、第四が三筒男神である。三筒男神は、底筒男命・中筒男命・表筒男命のことを指し、『古事記』『日本書紀』によると、伊弉諾尊の禊祓のときに海中から出現したとされる海神三神で、磯良と同じく海の民の安曇氏によって奉じられ、志賀海神社に祀られた神であった。ちなみに、記紀では、海神三神の後に、住吉神社の第一祭神である天照大神が生まれている。また、記紀によると、筒男三神は、安曇磯良と同じく、その靈威を以て神功皇后の新羅親征を助けている（9）。

このように、『去年の枝折』において、住吉の里に至るまでの秋成夫婦の旅の行程は、『吉備津の釜』における「磯良」を想起させるものであった。秋成は、大坂を中心とした自己の生活圈の中で、膨大な和漢の古典を用いて生み出した『雨月物語』の世界を、旅の中で再確認しようとしていたと考えられるのである。

## 二、嘉吉の乱との関係

住吉の里を出立後、秋成夫妻はみぬめの浦（神戸市灘区岩屋中町の敏馬の岬から西方の海岸一帯か）をとおつて須磨にたどり着き、一句詠む。その後、明石を過ぎ、御着にでて、播磨を北上し城崎へと向かったことが『去年の枝折』に記されている。

一方、『秋山記』の旅も、同じく尼崎から始まる。しかし『去年の枝折』と違って、秋成夫婦の様子は朗らかであり、「須磨の海づらいかながむらん、明石のとまりはさぞ」などと、名所探訪の意思が先行している印象がある。そして『秋山記』では、住吉の里に行くまでに、武庫川・西宮という地名は現れず、その代わりとして、芦屋川（現在の芦屋市西端の川）という地名が登場する。その松陰で茶を煎じた体験をもとに、秋成は、「蘆の屋の蜃のたく火のそれかとて道ゆき人も過がてに見む」という歌を詠んでいる。晩年に『清風瑣言』『茶寂酔言』といった煎茶の指南書を著し、煎茶道の中興の祖と呼ばれた秋成の嗜好が伺える。

また「蘆の屋」というのは、芦屋を歌い込んだものである。『伊勢物語』で在原業平と結びついて「芦屋の里」が歌題になって以来、芦屋は歌枕として定着している。

この後、『秋山記』では、芦屋を離れて、住吉に一泊したという記述を挿み、九月十三日

の須磨での源氏物語論に移っている。風間誠史氏がすでに述べられているが、この源氏物語論では、紫式部が『源氏物語』を創作した故に「おそろしき所に繋がれ、永劫の苦しみをうけ」、『水滸伝』の作者羅貫中が「三代まで唾子をうみしなども云」という部分がある。

これは秋成の怪異小説『雨月物語』の序文「羅子、水滸を撰して、三世唾児を生み、紫媛、源語を著して、一旦悪趣に墜つる」を思い起こさせるものとなっている（10）。秋成が、『雨月物語』執筆時に抱いていた物語の創作に対する意識を『秋山記』執筆時においても保持していることがわかる。

この後、源氏物語論は、秋成が法師に問う形ですすんでいく。法師は光君の性格を難詰し、表現のすばらしさや、趣向・構想の見事さ、「雨夜の物語」の優れた心理描写を認めつつも、「何の役なきいたづら文」である『源氏物語』をやたらと尊ぶものではない、としている。本稿では、源氏物語論についてこれ以上贅言を付さないが、このように『秋山記』では、須磨までの一連の出来事は、和歌的情绪と結びついて、王朝文学風の雅な世界の中から展開され、須磨の源氏物語論への導入となっている。

しかし、秋成夫婦が須磨から明石に渡る場面でそれぞれの紀行文によって地名を補い合うことで、旅は全く違った趣をもつことになる。秋成たちの旅の行路を辿っていくと、『吉

備津の釜』の男主人公の正太郎の人物設定が、深く係わってくることに気付かされるのである。

『吉備津の釜』の男主人公・井沢正太郎の曾祖父は、播磨の赤松家に仕えていたが、嘉吉元年の乱に、赤松氏のもとを去って吉備国賀夜郡庭妹の里に來た人物であった。嘉吉元年（一四四一）の乱というのは、播磨の守護赤松満祐が、京の自邸で將軍足利義教を謀殺し、その後播磨で細川・山名の幕府軍に敗退して、自刃した戦である。この事件によって足利將軍の權威は失墜した。また、鎌倉時代末期に播磨の守護であった、赤松氏の先祖である円心こと赤松則村は、元弘の乱（元弘元年（一二三二））では、後醍醐天皇方に付き、足利尊氏と共に倒幕のため六波羅を攻めた人物であった。これらの史実によって、現代から見ると、赤松氏には「下剋上」のイメージがつきまとう。

では、秋成の生きた近世では、赤松氏はどうのようなイメージであったのか。嘉吉の乱は、諸大名を次々と暗殺して恐怖政治を行い、赤松氏の勢力をも削ぐとする將軍義教に対して、赤松氏が機先を制したという「正当防衛」の面があった。その先祖の赤松円心が後醍醐天皇を裏切ったのは、新政樹立の功勞者でありながら、それを無視した天皇の論功行賞によって、側近が重用され、失脚させられたからであった。時代が下って、赤松一族は、



秀吉に仕えた赤松則房が関ヶ原の合戦で西軍についたことにより、お家断絶の憂き目にあってゐる。しかし、天下泰平の世となって後、赤松姓を名乗り、太平記講釈に身を立てる浪人が、『諸芸目利咄』（元禄十年刊）や近松門左衛門作の『大経師昔暦』（正徳五年成）に現れており、遡って慶長年間には、徳川家康が赤松法印なる者に太平記の講釈をさせたという。これらのことは、既に中村幸彦氏が指摘されている（11）。

このように「赤松」という名は、近世期の人々にとっては、特別な意味をもっていたと思われる。太平記の講釈を聞いた人々は、赤松氏を、主君に恵まれず、戦国の動乱に翻弄され衰亡した悲運の一族として、同情心をもつて捉えていたと考えられる。

その赤松氏に殉ぜず、吉備国に逃亡した井沢家の先祖は、悲劇の英雄を裏切ったことになるのである。この設定は、井沢家の子孫である正太郎の性情と運命を暗示するものとなっている。

このように、嘉吉の乱は「吉備津の釜」において、重要な物語背景の一部となっている。この嘉吉の乱最大の激戦地となったのが、須磨・明石一帯であった。もともと尼崎から須磨・明石にかけては、交通の要衝であり、凄惨な戦闘の舞台となった地として、南北朝から江戸時代にかけての軍記・史書に散見される。

ただ、須磨に渡った秋成夫婦は、そのようなことなど知らぬ氣に、須磨浦に近いからす崎で磯遊びをする。そのとき秋成は、「暮るゝともいとはんものか燈火の明石のうらにむかふ旅寐は」という歌を詠む。「燈火の」は「明石」の枕詞で、「あかし」に「明るい」の意をかけている。修辞技法を適度に使いながら、旅の情緒を素直に詠んだ歌といえる。

だが、秋成が、城崎旅行で参照したと指摘されている『播磨鑑』（平野庸脩、宝暦十二年（一七六二）成）を見ると、からす崎の、美しい風光に満ちた名所という印象は一変する。

『播磨鑑』明石郡のからす崎の条では、「西垂水村海中へ出たる洲崎也」と紹介され、『夫木和歌集』の伊勢の歌を載せたあと、

我名所記ニ 播磨国に垂崎出たり 又後太平記赤松満祐追伐の所に鹽屋 明石 須磨  
鳥崎とつゝけたり

と書かれている（12）。

この『播磨鑑』に見える『後太平記』（多々良一竜著、延宝五年（一六七七）刊）は、『太平記』以後における足利時代全期の興亡を描いた、四十二巻目録一卷の二十二冊「軍書」

である。「軍書」とは、近世の書籍目録の項目にその名が見られ、広義には歴史を叙述する作品群を指す。しかし秋成の時代では、娯楽的な側面をもち、講釈の台本にもなった俗書のことを指した。都賀庭鍾の『英草紙』『繁野話』、秋成の『雨月物語』の時代設定が、この「軍書」に取材していたことは、井上泰至氏によって指摘されている（13）。秋成は、馴染み深い「軍書」の『後太平記』と播磨の一大地誌である同書とを参照することによって、和歌に詠まれた名所の、隠された悲劇を浮かび上がらせようとしたと考えられるのである。

秋成らは、なおも明石の浦づたいに歩いて、大蔵谷（現明石市）につく。西国街道沿いにある大蔵谷は、宿場町として発達し、当時大いに賑わっていた。その様子は『播磨名所巡覧図会』（文化元年（一八〇四）刊）にも描き上げられている。浜で十三夜の月見をした秋成は、「うら風に雲吹きはれて長月のながき夜わたる月のさやけさ」と詠み、妻のたま女は、「いづこにも露おく袖をこよひしも月にあかしのうらの旅寝は」と詠んでいる。この歌は『源氏物語』明石の巻で、源氏が、八月の十三夜の日、月が海上に輝くとき、明石の入道の娘のもとを訪れた話をふまえたものである。「月の名所」明石で、この日この時に歌を詠むことが、秋成らにとっては、最も雅やかな行為であったことがうかがえる。

ただ、ひとつ疑問がある。『秋山記』のなかでは、明石は、あくまで歌枕として歌のなかに詠み込まれており、「明石にやどる」とは書かれていない。その代わりに、「大蔵谷といふ所にやどる」と書かれている。なぜ、「明石」ではなく「大蔵谷」という地名を取ったのであろうか。

からす崎のときと同じように、『播磨鑑』の大蔵谷の条を見ると、

続太平記十二卷ニ 嘉吉元年赤松追伐ノ所ニ

明石ノ船上山ヲ城郭ニ構ヘ人麿力岡 大蔵谷 藤江ノ灘ナト見ヘタリ

と、これも同じく赤松満祐の嘉吉の乱に関する記述が見つけられる。『続太平記』の該当箇所を見ると、

津国。須磨口ヘハ。甥ノ常陸五郎則尚ニ八百餘騎ヲ副テ。明石ノ船上山ヲ城郭ニ構ヘ。

人麿力岡。大蔵谷。藤江灘。三箇所ニ張<sup>レ</sup>陣斥埃ニ勢ヲ備シム。(14)

とあり、幕府軍の進撃を阻止するため、赤松氏が大蔵谷などの防備を固めていた様子が描かれている。このため、細川讃岐守持常率いる大手の軍が、管領細川持之の征討令によって、京を出発するが、

最初ニ摂津國播磨ノ境ノ松。大蔵谷邊マデハ被ニ打寄一ケレ共。自レ是先ヘハ人ヲモ。スツツト不<sub>レ</sub>通。我身モ不<sub>レ</sub>進徒ニ二十餘日ゾ被ニ滞立一ケル。

と、精兵ぞろいの赤松軍の備えを警戒して軍を進められなかったことが記されている。このように大蔵谷は、当時の赤松氏にとっては、軍事上重要な拠点であったことが伺えるのである。

ちなみに『続太平記』（杉岸芳通、貞享三年（一六八六）刊）は、『後太平記』と同じく、『太平記』以後の諸国の動乱や興亡を述べたものである。『後太平記』と取り上げる時代が重なり、あまり広く板行されなかった。ただ、明和七年（一七七〇）に大坂で刊行された『和漢軍書要覧』には、『後太平記』とともにその名が見える（15）。

このように、一般的な和歌紀行のように見える『秋山記』も、『播磨鑑』によって、歴史

の裏に隠されたもうひとつの真実が映し出されているのである。

一方、同旅行を題材とした俳諧記行『去年の枝折』では、明石に一泊する、と記した後、秋成らは浜辺で一晩月見をして、その明け方、「月は入ぬ彼朝霧のあかしがた」という句を詠んでいる。この句は、柿本人麻呂作とされる、有名な『古今和歌集』入集歌「ほのぼのと明石の浦の朝霧に嶋がくれゆく舟をしぞ思う」を下敷きとしている。句の構成から見ても、明石潟を象徴する「月」が主体ではなく、その月が沈んでゆく明石潟の朝霧が主体となった句であると思われる。

ところで、この「ほのぼのと」歌について、安永八年、虚構の設定のもとに秋成が執筆した物語論『ぬば玉の巻』では、明石旅行中の連歌師宗椿の前に柿本人麻呂の霊が現れ、『今昔物語』の説話を挙げて、自作の歌ではなく、小野篁作であると述べている（16）。ただ、秋成は、この説に関しても、人麻呂に仮託して「是もしかおしきはめがたき」ものとしている。それは、『今昔物語』が「たしかならぬ事も。正しき事も。ひとつものに。聞がまゝを書あつめし。世がたりぶみ」であるからと説明している。すなわち、秋成は、人麻呂歌の伝承を絶対化しようとせず、相対化して受容しようとしていることがうかがえる。こういった秋成の姿勢は、風光明媚な明石の、もうひとつの側面を見ることに繋がった

のではないだろうか。

『後太平記』によると、明石の蟹ヶ坂（現明石市和坂）では、嘉吉元年（一四四一）八月、赤松方と幕府方の命運を左右する戦があった。八月十二日、細川右京大夫持之・赤松伊豆守貞村・武田大膳大夫信賢率いる大手の軍勢が京から出発し、塩屋・明石・須磨に陣を布いた。対する赤松方は木山（城山）・白旗両城の防備を固め、追手を消耗させるため、蟹ヶ坂に兵を送った。ここで幕府方の大軍は、狭く急な坂道を登れずに赤松方に敗れた。

八月二十九日、石見国住人大庭蔵人兼親が、五百余騎の軍勢で赤松方を一時動揺させるに至ったが、結局幕府方は大軍を思うように統率できず敗退した。九月十日、赤松満祐は、大手の幕府軍が白旗城に軍を差し向けて、一気に攻め滅ぼす策をとったことを知った。そこで満祐は自ら嫡子彦次郎教康らを率いて白旗城を打ち出て、人丸塚（現明石市明石公園）に陣した武田信賢らの軍勢に攻撃をかけた。これに対し信賢は、八百余騎を率いて伏兵とし、明石の蟹ヶ坂に陣取った。この計略があたって、赤松方は幕府方に散々に打ち負かされ、白旗城へと落ち延びていった（17）。

このように、尼崎から明石までの道のりを概観すると、秋成が、城崎への最短ルートを通らず遠回りしたのは、文献や耳学問で創り上げた『雨月物語』の舞台を、実際に踏査し

たかったからではないか、と考えられるのである。

### 三、館（屋形）での挫折

明石をすぎ、秋成らは播磨の加古郡に入る。『秋山記』での、曾根天満宮で行われていた相撲の見物客の様子は、風間誠史氏の述べられたように『徒然草』風に書かれているが（18）、『去年の枝折』には「けふはこゝかしこ名高き所々もあれど、心なきからや、目もとまらずて行々」とあり、曾根の記事も、加古郡の記事も見当たらない。

だが、『雨月物語』巻之一「菊花の約」では、主人公の丈部左門は「播磨の国加古の駅」（現加古川市）に住んでいると記されている。「加古」の名は、『日本書紀』や『播磨國風土記』に見え、古くから湊として栄えていた歴史ある土地であった。鎌倉期に守護所が置かれており、隠岐配流のため承久三年（一二二二）七月には後鳥羽上皇が、元弘二年（一三三二）三月一二日には後醍醐天皇が加古川宿に到着しているなど、中世の動乱とも無縁ではなかった（『日本歴史地名大系 兵庫県の地名』）。この由緒ある街道沿いの宿駅で、左門は病気に苦しむ赤穴宗右衛門と出会うという設定になっている。また左門の妹は、同郷の「佐



用氏」に嫁いでいる。「佐用」は、『播磨国風土記』や『和名抄』にも見える由緒ある地名であるが、平安末期、村上源氏がこの地に配流されて以後、その後裔が赤松氏を名乗り、更にその傍流が佐用をはじめ宇野・上月等に移り住み、郷名を姓とした。

一方、「吉備津の釜」の正太郎は、妻の磯良を裏切り、遊女の袖と駆け落ちするが、その際隠れ住んだところが播磨の印南郡荒井（現高砂市）という場所である。荒井は、加古川支流の洗川（現法華山谷川）の左岸に位置し、同川と加古川に挟まれた三角洲に立地する。

ここには嘉吉年間（一四四一―四四）から戦国期にかけて杉岡蔵人が居城した荒井城が八幡神社付近にあった。（『日本歴史地名大系 兵庫県の地名』嘉吉の乱当時、赤松方であった杉岡蔵人には山名宗全幕下の太田垣某が攻め寄せてきた。蔵人は加古川の木村城主である雁南右京太夫、阿弥陀城主の蔭山右近治郎を味方に引き入れ、揖保郡魚吹八幡神社まで出陣し、太田垣勢を敗走せしめたという（『高砂市史』）。

このように、それぞれの土地には、『雨月物語』の世界に関わる史実が多く見られるにも関わらず、両紀行文中で触れられてはいないのは、創作に生かせるような説話がなかったからではないかと思われる。

このあと、『秋山記』では、豆崎（現高砂市）の宿で、童子と隣の客が言い争いをして、

「雨蛙のやう」に騒がしく、眠れぬ夜をすごした、と記され、『去年の枝折』では、夜明け前に宿を飛び出す姿が描かれる。明石の浜で、夜を明かしたときにひいた風邪がまだ治っていないうえ、長年癩性病みであった秋成にとっては、騒がしい同宿者の存在は、どうしても耐えることができなかったのであらう。その後、秋成らは、御着の駅家あたりで北上し、西光寺野（現神崎郡福崎町あたり）を通る。『秋山記』では、四方を山々で囲まれた自然の風景に心を癒されている。だが『去年の枝折』では、「御着のうまやを横をれて、道いとほそくあゆみがたし」と旅の苦難を強調している。両紀行文はここでも、対照的な雰囲気をもっている。

生野峠を越えた秋成達は、館（屋形）に着く。『秋山記』を見ると、この里への秋成の第一印象は「いともわびしき、山里也」というものであり、好意的なものではなかった。だが、宿泊する場所がなく「暮はてしかば、こゝにとさだむ。」と、秋成らは渋々、一夜の宿を借りることとなる。しかし、家の中は「打見しよりも、住たるさまよしめきて」と思つたより快適であつた。「よろづ心ありげに、粥などもきょうしてくはす」という宿の親切なもてなしに、秋成は気分を直し、宿の主人に取材を試みる。

こゝをやかたと云は、誰殿の夢の跡にや、赤松山名の昔がたり有べし。あるし呼いでゝもとむれば、只此国のかうの殿の、往しへこゝにとのみに委しからず。

「やかた」と赤松氏の関係について、『播磨鑑』神東郡の古城蹟並構居の「屋形領」の項には、次のように書かれている。

三千石 赤松ノ支族屋形ノ跡也

今 御旗本領 在陣屋敷 姫路ヨリ六里北ノ方 當御領主 池田内記（19）

秋成はこの記述を念頭において赤松氏のことを質問したと思われるが、主は「只此国のかうの殿の、往しへこゝにとのみ」述べて、残念ながら詳しいことは何も知らなかった。赤松支族に対しての秋成の質問は、『雨月物語』創作と深いかわりをもっていたと考えられる。『雨月物語』『吉備津の釜』の冒頭文を改めて見直すと、

吉備國賀夜郡庭妹の郷に、井沢庄太夫といふものあり。祖父は播磨の赤松に仕へしが、

去ぬる嘉吉元年の乱に、かの館を去りてこゝに來り、庄太夫にいたるまで三代を経て

(20)

とある。この記述からもわかるように、秋成は、嘉吉の乱という史実において、赤松満祐という武将の最期ではなく、赤松氏の家臣の運命により関心を寄せていた。『後太平記』『続太平記』では、軍記物語風に各々の武者たちの活躍を描いているが、秋成はあくまで歴史に翻弄される無名の人々の逸話を求めていたことが、『秋山記』の記事からうかがえる。そのため、軍書だけではなく、歴史・地理・文学に関する情報を、さまざまな書籍から蒐集した『播磨鑑』のような地誌を重宝したものと思われる。

ただ、『播磨鑑』で説話の痕跡が示されているにもかかわらず、『秋山記』のこの場面での赤松氏の説話採集は、実を結ばなかった。この結果は『去年の枝折』の記述に影響している。同作品にも、館の記事は載せられている。だがそれは、十五夜の月を愛でて、「見あぐれば月に声あり嶺の松」という句を詠むというものであり、土地の伝承とは全く切り離された性質のものであった。

館を出発した秋成たちは、『秋山記』によると、「但馬の国に入」り、「栗賀と云郷」を通

ったとき、そこに「よき茶有と聞」いて、茶屋に入った、とある。これは、『播磨鑑』神東郡名所舊蹟並和歌の異談に、「一 仙靈ト云名茶出栗賀 生蓮寺ヨリ出ル上品ノ茶 禁中ヨリ菊桐之御紋ヲ賜リテ袋ニ押之」という記述によると考えられる。先ほども触れたが、秋成はこの当時、煎茶道に傾倒しており、『秋山記』の記述は、そのことの証左であるといえる。

ただ、嘉吉の乱の当時、栗賀は、赤松方の搦手にとっては、但馬口に陣を張った幕府方の搦手・山名右衛門督持豊らの進攻を防ぐ重要な防御線であった（21）。もし秋成が赤松氏に関する説話を蒐集しようとする意識をもっているなら、『播磨鑑』の栗賀の条に、赤松氏について書かれていなくとも、その周辺に多く存在している「赤松の幕下」の遺構に何かの興味を示すはずである。しかし秋成は、『秋山記』のなかで栗賀がそのような土地であることには触れていない。これらのことから、『雨月物語』の舞台設定に沿った形で説話蒐集という目的が、館で挫折した、ということがうかがえる。

おわりに

『雨月物語』の時代設定に関わる土地の探訪および説話蒐集は、結局実を結ばなかった。ただ、『秋山記』では、城崎到着後に里人から聞いた二つの噂話が書き留められている。

一つは峰山の法師と女君の噂である。難波からの客の中に四〇過ぎの美しい女性がいた。女性は金持ちの未亡人らしい。ある日同宿していた峰山の法師と寺参りに出かけると、女性に仕えていた六〇過ぎの翁は、法師への嫉妬で怒り狂う。実は翁は女性の愛人で、二人は宿中の話題となった、という話である。これを秋成は擬古文調で記す。翁は「このふた心人よ、いづこに中やどりやしたまへる、斧の柄今はすげかふべし」と怒り、その様子は「声しはがれゝ猶鼻のさきに、ひら柿ばかりのものはれあがりて」と描写される。一方の女性は、「あが君／＼、なにごとをかくくりなく聞え給へる」と必死で言い訳をする。この部分は、先行研究で『源氏物語』をふまえていると指摘されている（22）。温泉宿の醜聞は、和文調で記すことで、雅文体小説のような趣をもつ物語となっている。

もう一つは、里人から先夜の事件として披露された大口の真神の物語である。毎晩のように恋しい男のもとに通っていた土地の娘は、ある晩狼に出会うが、必死に懇願して見逃してもらふ。その後、娘に懸想する男が山中で襲いかかった時、娘は狼に助けを求めたところ、狼が現れて男を喰い殺した、という話である。森山重雄氏は、古代説話的な物語で、

『伊勢物語』的な文体で描かれていると述べている（23）。これらの『秋山記』の挿話は、温泉宿で聞いた噂話を、和歌や物語のような「雅」文学の文体を用いて、新しい小説的作品に仕立てたものとなっている。過去の説話でなくとも、十分物語作品として成立する、ということをお成は示したといえる。

それとは対照的に『去年の枝折』では、須磨の馬子と明石の駕かきのお国自慢や、うぶ砂神に奉った御酒の話、山の中の蕎麦屋で古びた香りの蕎麦を出された話などを、和歌的・物語的表現を使わず、滑稽さを交えた平明な文体で描いている。

このように、秋成は、旅を題材にした二作品で「和歌」の世界と「俳諧」の世界を明確に区別して創り出した。この二つの世界を、加藤氏は、「物語の世界（晴の世界）」「日常の世界（褻の世界）」と評したが、文体からすれば、むしろ、中村幸彦氏の説にしたがって第一文芸の「雅」の世界と、第二文芸の「俗」の世界と言い換えた方が良いかと思われる。中村氏のいう「雅」とは、近世以前から権威のあった伝統文化をさし、「俗」とは近世以後に発達した新興文化をさす。中村氏によると、近世人は、「雅」に比べて、「俗」の方を一段低いものとする意識があった。ただ、「雅」と「俗」の文芸意識は、時代によって変化し、互いに交渉しあうものであった、とされている（24）。

上田秋成は「雅俗融和」という方向性をもった時代風潮のなかで生きたと中野三敏氏は述べられているが（25）、『雨月物語』の表現や文章には、秋成の風雅への志向が見られることは、中村氏が述べられている（26）。その秋成は、城崎行を題材として執筆を行う際、自己の文学を次の段階に進めるために、和歌・和文という「雅」と、俳諧という「俗」の位置を確認しなければいけなかった。そのために『去年の枝折』は『秋山記』の「補遺」であるとするスタイルを採ったと考えられる。

だが、ここで忘れてはならないのは、この「補遺」とされた『去年の枝折』というのは、単に後からの付け足しではなかった、ということである。旅の記録という点では、加藤氏が述べられているように、『秋山記』と、地名を相互に補足する関係にあった。また、秋成の文芸を問い直すという点から見ても、「俗」文芸である『去年の枝折』という作品は必要なものであった。

このことから、『秋山記』の世界と『去年の枝折』の世界は、ともに秋成にとって不可欠なものであった、といえる。その一端を示しているのが、『雨月物語』の舞台となった土地の探訪だったのではないだろうか。



注

- (1) 勝倉寿一氏「秋成の紀行文―「去年の枝折」を中心に―」(『福島大学教育学部論集』第四十七号、一九九〇年)。
- (2) 加藤裕一氏『『秋山記』・『去年の枝折』解説』(『上田秋成の紀行文 研究と注解』(実践女子学園学術・教育研究叢書15、二〇〇八年) 所収。初出『実践女子短大評論』第十五号(一九九四年一月)。
- (3) (2) に同じ。
- (4) 『撰津名所図会』第二卷(版本地誌大系10、臨川書店、一九九六年)二四四～二四五頁。
- (5) 清田啓子氏『「吉備津の釜」の磯良―命名についての報告―』(『駒澤大学文学部研究紀要』第二十八号、一九七〇年三月)。
- (6) 『新潮日本古典集成78 太平記 五』(新潮社、一九八八年)四五一頁。
- (7) 桜井徳太郎氏ほか校注『日本思想体系20 寺社縁起』(岩波書店、一九七五年)。
- (8) 真弓常忠氏『日本古代祭祀と鉄』(学生社、一九八一年)二十三～八十一頁。
- (9) (8) に同じ。
- (10) 風間誠史氏『『秋山記』の世界』(同『近世和文の世界―蒿蹊・綾足・秋成』(森話社、一九九八

年）所収」。

- (11) 中村幸彦氏「太平記の講釈師たち」〔『中村幸彦著述集』第十卷、第二章「実録、講談について」(中央公論社、一九八三年) 所収〕。

- (12) 『播磨鑑』は、岡田俊志編『播磨鑑(全)・摂陽群談(上)』(歴史図書社、一九六九年)に拠った。

- (13) 井上泰至氏『雨月物語論―源泉と主題』第二章「時代小説の方法とその源流」第一節「初期読本と軍書」(笠間書院、一九九九年) 九七～九八頁。

- (14) 『続太平記』は、関西大学附属図書館所蔵本『続太平記狸首編』に拠った。

- (15) 『和漢軍書要覧』は、長澤規矩也編『日本書目大成』第四卷(汲古書院、一九七九年)に拠った。

- (16) 『上田秋成全集』第五卷『ぬば玉の巻』正文に拠った。

- (17) 『物語日本史大系 第六卷 太平記下 後太平記上』(早稲田大学出版部、一九二八年) 二二三～二二九頁。

- (18) (10) に同じ。

- (19) (12) に同じ。

- (20) 『日本古典文学大系 56 上田秋成集』所収。

- (21) 高坂好氏『赤松円心・満祐（人物叢書一五五）』（吉川弘文館、一九七〇年）二二一～二二九頁。
- (22) 森山重雄氏「『秋山記』を読む」（『秋成 言葉の辺境と異界』（三一書房、一九八九年）所収）、加藤氏前掲論考、風間氏前掲論考、飯倉洋一「めめしさ」の意味するもの―「秋山記」試論―、『秋成考』（翰林書房、二〇〇五年）所収。
- (23) 森山氏前掲論考。
- (24) 中村幸彦氏「近世文学精神の流れ」（『中村幸彦著述集』第三卷、二「時代精神」（中央公論社、一九八三年）所収）五一頁。
- (25) 中野三敏氏「経学における明儒の風」（同『十八世紀の江戸文芸』第二章「都市文化の成熟―明風の受容」（岩波書店、一九九九年）所収）八二頁。
- (26) (24) 六七頁。

※『秋山記』本文は、『上田秋成全集』第十卷（中央公論社、一九九一年）に拠ったが、句読点は適宜改めたところがある。また、『去年の枝折』は、大正時代刊行の『上田秋成全集一』（国書刊行会）に翻刻されているが、誤刻が多い。よって、国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルム（講談社蔵の松宇文庫に収められた底本は損傷が激しいため、閲覧不可。）を参照した。

## 第二節 『去年の枝折』論―後半部を中心に―

はじめに

前節では、秋成の城崎旅行前半における、『雨月物語』の時代設定に沿った説話蒐集の試みとその挫折を述べた。また、旅を記録した『秋山記』と『去年の枝折』は、相互に補完し合う関係にあったことを示した。

本節では、『去年の枝折』について具体的に検討し、『去年の枝折』後半部の古典利用の実態と意義について明らかにしていきたい。

これまでの『去年の枝折』の研究では、作品後半の「ゆめ／＼学ぶまじき人の有様也とぞおもふ。」とした一文を取り上げて、芭蕉への批判あるいは酷評の所以を論じるか、『秋山記』との比較検討をもとに論じたものが大半である（1）。

しかし本節では、『去年の枝折』中の本文内容について改めて確認していく。その理由は、『去年の枝折』写本三本の対校を行った際、先行研究がテキストとしている『上田秋成全集一』（国書刊行会編、一九二三年）の『去年の枝折』翻刻に、一つの地名の誤刻があるこ

とを発見したからである。その翻刻の誤りを正し、旅程を整理する。その上で、『去年の枝折』の中で、秋成が試みた芭蕉や蕉門の漂泊批難の意味を探る。具体的には、芭蕉の存在を認めながらも、それに対抗し、無腸独自の俳諧世界を志向しようとする秋成の意識があらわれていることを確認する。そのうえで、「ゆめ／＼学ぶまじき人の有様也とぞおもふ。」という一文を改めて解釈し直したいと思う。

#### 一、『去年の枝折』の諸本

まず、諸本の所蔵者および書誌の紹介を行う。

**A** 久松国男氏蔵本『枕の硯』（写本二冊）所収「去年の枝折」。（国文学研究資料館のマイクロフィルムによる。）

【表紙】縦二三・七糎×横一七・〇糎。無地。

【外題】前冊「枕廼硯」。後冊「枕の硯」。

【内題】〔前冊〕「枕乃硯」「郝廉留錢」「去年の枝折」。〔後冊〕「御嶽さうし」「水屋り花」

「三餘」。

【書写者】橋村正兌（まさとき）。

【行数・丁数】七行。一八丁。丁付なし。

【奥書】〔前冊末〕（句読点は發表者。）

右文章、上田秋成所著也、今茲有事、寓于洛東、煩務之暇、趨毫於客舎燈下、恐多違謬、  
歸于本郷、可革写者也。

文化二年乙丑八月十六日夜

從五位上度会神主正淳

〔B〕国立国会図書館蔵本『枕の硯』（写本一冊）所収「去年の枝折」。

【表紙】縦二六・五糎×横一九・七糎。明褐色。「帝國図書館蔵」と印字。

【外題】「枕乃硯」

【内題】「枕乃硯」「郝廉留錢」「去年の枝折」「御嶽さうし」「水屋り花」「三餘」。

【書写者】不明

【行数・丁数】十二行。一五丁。丁付なし。

【奥書】（句読点は發表者。）

此一冊難波人上田秋成餘齋又号無腸文章也

彼翁風流之才近世不知出其右人。樂閑靜不求名利。故所留文章予隨見而写之處遇半敢、

夫僅殘篇不過十章。集而□一卷藏亟底。

文化八年孟夏五

（花押）

〔C〕松字文庫藏本「こぞのしをり」（写本一冊）。（国文学研究資料館のマイクロフィルムによる。）

【表紙】縦二五・〇糎×横一七・五糎。無地。

【外題】「こぞのしをり」

【見返し題】「上田秋成紀行　こぞのしをり」

【内題】「去年の枝折」

【書写者】宮沢朱明。

【行数・丁数】十行。十一丁。丁付なし。

【奥書】

明治三十八年八月

書寫

朱明

〔D〕『上田秋成全集一』（国書刊行会編、一九二三年）所収『去年の枝折』翻刻。

最初のAは、秋成の文章を文化二年（一八〇五）に写した、久松国男氏所蔵本『枕の硯』所収の『去年の枝折』である。『枕の硯』というのは、写本二冊のうち前冊冒頭の文章名をもって、そのまま付したものである。『枕の硯』所収六作品の内、「枕乃硯」「郝廉留錢」「御嶽さうし」「三餘」の四作品は『藤簍冊子』に収録されている（2）。奥書の「従五位上度会正淳」とは、安政六年成立の『考訂度会系図』四門橋村弾正家系図（3）の「正兌（まさとき）」の名のしたに、「始正風 正淳」とみえるため、伊勢外宮の神官である橋村正兌と断定できる。正兌は、本居春庭門の国学者であり、服部中庸（なかつね）の『三大考』を論じた『三大考説弁』を享和二年に著した。享和三年（一八〇三）三月七日付の本居大平宛和泉和麿書簡によって、それが本居大平に送られ、さらに江戸鈴屋門にその知らせが届いていたことが明らかとなっている（4）。和麿の書簡中には、秋成の国学の著作についての



評があり、当時の国学者間の交流がうかがえ、興味深い。

Bは、国立国会図書館蔵本『枕の硯』所収の『去年の枝折』である。内容は写本Aと同様のもので、文化八年（一八一）書写とある。Cは時代がくだって明治時代の俳人宮沢朱明の書き写したものである。そして、国書刊行会編の『上田秋成全集一』にD『去年の枝折』翻刻が収録されている。

A本の場合、書写年次の文化二年当時、秋成は、「洛東」に寓しており、その地で「度会正淳」こと「橋村正兌」が書き写し、本郷に戻って、補訂したというわけである。秋成の『胆大小心録』や『文反古』中の「難波の竹斎」あて書簡によると、文化四年（一八〇七）秋に全ての草稿を井戸に捨てたとしていることを考えると、『藤簍冊子』に収録漏れした本作品を知る原本としてもよいのではないか。その場合、対校の結果もふまえて、私にA本↓B本↓C本の順で書写されたとする結果を得た。

また、従来は、D本の翻刻はC本によるものとされていたが、諸本間における漢字・仮名や助詞の異同を対校した結果、A本によるものではないと思う。以上の結果から、『去年の枝折』の底本をA本とした次第である。

## 二、『去年の枝折』及び『秋山記』後半の行程

さて、今回の諸本対校の過程で、従来テキストとして扱われてきたD本に一つの誤刻があることを発見した。それは「丹波の大江山」と翻刻されている箇所であるが、A・B・C本ではすべて「丹波の大山」と記されていた。

加藤裕一氏は、城崎旅行の復路の行程に関して、往路と違い、両作品の相互補完作業によつて、「詳しく行程を再現」できないということを指摘している。特に、十月二十日の福知山以降の行程では、二十日と二十一日の記事は『秋山記』に、二十二日と二十三日の記事は、『去年の枝折』にしか見られないと述べている(5)。

しかし、酒吞童子説話で有名な、丹後の「大江山」ではなく、古歌にもみえる「丹波の大山」(兵庫県旧多紀郡丹南町、現篠山市)とすると、行程の曖昧な部分が整理されることとなる。

次に挙げているのは、秋成夫婦が城崎を出発した十七日以降の、『去年の枝折』及び『秋山記』の行程である。地名下の「秋」・「去」は『秋山記』と『去年の枝折』に、地名が見えることを指す。また【泊】は、両紀行文の記述から宿泊地と推定されることを表す。

【図 1 『去年の枝折』及び『秋山記』復路の行程】

十月十七日

城崎〔秋〕〔去〕―久美の入江（久美浜）〔秋〕―野中〔秋〕―二箇【泊】〔去〕

十月十八日

あふちの嶺（大内峠・樗峠）〔秋〕―岩滝〔秋〕―天の橋立〔秋〕〔去〕―天の真井〔秋〕

―夕日の浦〔秋〕―枯木の浦―宮津【泊】〔秋〕

十月十九日

ふかうの嶺（普甲峠）〔秋〕―真名井が原（真井野）〔秋〕〔去〕―大江山？【泊】〔去〕

十月二十日

福智山（福知山）【泊】〔秋〕

十月二十一日

竹田〔秋〕―黒井〔秋〕―こくりやう（国領）【泊？】〔秋〕（―大山【泊】〔去〕）

十月二十二日

味噌（味噌）〔去〕―古市〔去〕―東久保【泊】〔去〕

十月二十三日？

名塩〔去〕―木の本（元）〔去〕―生瀬〔去〕―尼崎、帰着〔去〕

右図のように、従来十九日とされていた「大江山」宿泊を、二十一日「大山」宿泊としたことにより、行程がより明確なものとなった。また、大山以降の記事は『去年の枝折』のみに見られる。このことから、俳諧を含んだ紀行文『去年の枝折』独自の文芸世界が、「丹波（丹後）の大江山」から尼崎までの三か国を舞台とするのではなく、秋成の生活圏の摂津国を中心とした世界で完結していたと考えられる。秋成はこの内向的な俳諧世界を守るため、『去年の枝折』で芭蕉や蕉門俳人への攻撃性を見せたのではないだろうか。

### 三、『去年の枝折』前半部の意図

次に、城崎旅行の往路の記述に、秋成の芭蕉に対する意識がどのように現われているの  
か見ていく。

『去年の枝折』前半、秋成夫婦が須磨明石を浦伝いに行く場面は、次のように描写され

ている。

誠にはひ渡るほどといひし浦づたひも、足痿たれば馬駕とりぐに求めて行。駕は須磨の者也、馬は明石と云、かたつぶりの角振たてて何やらんからかふをきけば、戯れながらおのが里をほこりてなりけり。須磨も明石もひとつながめに、むかしの人はいふを、かた／＼いひわかつ事の面しろさよ。今宵は十三夜なり。所がら行やは過んとてあかしの泊定めぬ。此家のうしろは浜辺にて、波こゝもとにと云古言も思ひ出てあはれ也、枕の戸は皆明て月を夜すがらみる。浜風をひきてなん、むかしの梅翁があかしがた／＼ふるふ暁といひしは、また／＼今宵のさましたり。

月は入ぬ彼朝霧のあかしがた

「誠にはひ渡るほどといひし浦づたひも」という記述は、『猿蓑』の「此堺はひわたるほどゝいへるも」という前書と芭蕉の発句「かたつぶり角ふりわけよ須磨明石」がふまえられていて、すでに先行研究で指摘されている。特に、馬方と駕籠の者の俗な論争は、『源氏物語』須磨巻や『莊子』の蝸牛角上の争いの故事を素材としながら、それらを典拠とし

た芭蕉句をふまえていることは明らかである。また、東聖子氏が述べられているが、「枕の戸は皆明て月を夜すがらみる。」という記述は、あとで触れる『おくのほそ道』松島の条での、夜宿の二階で窓を開け放し、月を眺める趣向を意識しているといえる（6）。

これらのことから秋成は、『去年の枝折』執筆において、芭蕉の『笈の小文』や、『おくのほそ道』の旅の世界を、かなり意識していたのではないか。

ここで、「ゆめ／＼学ぶまじき人の有様也とぞおもふ」とした一文に連なる芭蕉論を改めて検討してみる。

寔やか翁といふは、湖上の茅檐、深川の蕉窓、所さだめず住なして、西行宗祇の昔をとなへ、檜の木笠、竹の杖に世をうかれあるきし人也とや。いともこゝろ得ね。彼古しへの人々は、保元寿永のみだれ打つゝきて、宝祚も今やいづ方に奪ひもて行らんと思へば、そこと定めて住つかぬもことわり感ぜらるゝ也。今ひとりも嘉吉応仁の世に生れあひて、月日も地におち、山川も劫灰とや尽すなんとおもひまどはんには、何このやどりなるべき。さらに時雨のと観念すべき時世なりけり。八洲の外行浪も風吹たゝず、四つの民草おのれ／＼が業をおさめてありか定めて住つくべき

を、僧俗いづれともなき人の、かゝる事触て狂ひあるくなん、誠に堯年鼓腹のあまりといへ共、ゆめ／＼学ぶまじき人の有様也とぞおもふ。

芭蕉への批判あるいは酷評と受け取られる言辞については、先行研究で秋成の俳諧や文学への姿勢を論じる題材として度々取り上げられてきたが、この部分では、芭蕉の創作方法への対抗心を読みとることもできるのではないだろうか。

秋成は、「古しへの」西行は「保元寿永のみだれ」が「打つゞ」いたため放浪したとし、「今ひとり」の宗祇も「嘉吉応仁の世」に生れ「いずこのやどりなる」こともできなかつたと述べている。この部分で、秋成は、西行宗祇の漂泊が「保元寿永」と「嘉吉応仁」の動乱によるものであったとして、芭蕉の漂泊の絶対化を拒んでいる。そうすることで、秋成は芭蕉とは違う方法で自己の俳諧を創作することを示したといえる。

秋成がこのような意思表示をするのは、先述したように芭蕉の紀行文に影響を受け、その世界を遡求するほど芭蕉を意識していたからであった。それが自己の風流を脅かすことを恐れたので、作品後半で芭蕉や蕉門俳人の放浪批判を行い、独自の「遊び」を取り入れ発句を詠んだと考えられるのである。

そこで、『去年の枝折』独自の部分である十月二十一日以降の古市の記事において、『おくのほそ道』の表現への秋成の対抗意識を分析したいと思う。

#### 四、『去年の枝折』と中国文学の利用

此道のしるべする者らは、播磨のいなみ野よりめしつれてかへさも送らする也。はりま路くる道すがらも、秋のの花つみはやしては、此色香古市の小松といづれときこえし、其古市に来て小松の許に駕よせさす。片山里にはさる者にて、髪のかゝりけはひ、見る人よりも、みつからぞうるはしびて立ふるまふ。今は男もたる人にてときくには、趙使君の美人に贈りし例まではゆるせよとて、

いざといはん是の姉輪の雪のまつ

さすがに嬉しとは思はずもあらめ。

古市の場面において、駕籠の者は、秋成夫婦らが播磨で話題にしていた古市の美女の小松のもとに駕籠を寄せた。小松に対して秋成は、片山里に住むにしては美人であるが、「髪



のかゝりけはひ、見る人よりも、みづからぞうるはしびて立ふるまふ」と自己に陶醉気味であると評した。秋成はその美人が「今は男もたる人」と聞いていたので、「趙使君の美人に贈りし例まではゆるせ」と述べて、戯れに句を贈った。

森山重雄氏は、この「趙使君の美人に贈りし例」というのが何をさすか「未調査」である、とされている（7）。その他の先行研究でも、特に触れられていない。

これは、『唐詩選』巻七に収載される杜審言の詩が典拠であると筆者は考える。

戲贈<sub>二</sub>趙使君美人<sub>一</sub>

杜審言

紅粉青娥映<sub>二</sub>楚雲<sub>一</sub>

桃花馬上石榴裙

羅敷獨向<sub>二</sub>東方<sub>一</sub>去

謾學<sub>二</sub>他家<sub>一</sub>一作<sub>二</sub>使君<sub>一</sub>（8）

この詩は、使君（州の長官である刺史の職）の地位にあつた趙某の愛妾に贈ったものである。趙使君という人物の詳細は不明であるが、作者と親しい間柄であつたと推測される。ただ、他人の愛妾に詩を贈ることは穏やかではないので、「戯れ」であるとした。なお、この詩は、羅敷という美しい女性が、東方の太守である夫への操を立てて、有力者の使君の

誘いを断ったことを歌った漢代の古い楽府「陌上桑」をふまえて作られている。杜審言の詩では、趙使君を使君に比し、美人を羅敷にみたて、冗談としながら、羅敷に誘いをかけた使君のように、あなたを誘いましょうか、と歌っている。

このような杜審言の詩を引いて、秋成は、片田舎で自惚れている美人を揶揄している。しかし、その後は、別の典拠に基づいた発句を詠んでいる。これは、『おくのほそ道』における俳諧の中国文学利用への反発の意をふくめたのではないだろうか。

芭蕉が『おくのほそ道』のなかで、膨大な量の中国文学作品の発想・素材を生かしていることは、周知の通りである。その中で、さきほども触れた『おくのほそ道』で目的地とされた歌枕松島は、多くの漢詩調文体や対句表現によって、景観描写がなされている。

抑ことふりにたれど、松嶋は扶桑第一の好風にして、凡洞庭・西湖を恥ず。(中略) 其気色窅然として美人の顔を粧ふ。ちはや振神のむかし、大山ずみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を尽さむ。(中略) 月海にうつりて、昼のながめ又あらたむ。江上に帰りて宿を求めば、窓をひらき二階を作て、風雲の中に旅寐するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ(9)。

傍線部「其気色窅然として、美人の顔を粧ふ」という文章は、周知のように『聯珠詩格』の蘇東坡の詩『西湖』をふまえ、松島の美を、美人西施が美しく化粧をした顔にたとえたものとする解釈が一般的だったが、一方で「窅然」や「美人」という語は松島の景色の奥深さを表現するものだとする考え方もある。

このことから『おくのほそ道』で「美人」という語は、風景の美を讃える重要な意味をもつとわかる。ところが、『おくのほそ道』の松島の条とは対照的に、『去年の枝折』は、「美人」という語に特別な意味を持たせていない。あくまで唐詩とは別の典拠で発句を詠むために使っているだけである。また、秋成は古市の場面で、中国文学をふまえた詩句表現を書き連ね、現実世界に重ね合わせるといったことはしていない。

ただ、戯文体で記された古市の場面での「趙使君の美人」という語の働きは、物語風に綴られた『おくのほそ道』那須の場面での「かさね」という語の働きを思い起こさせる。

那須の黒ばねと云所に知人あれば、是より野越にかゝりて直道をゆかんとす。遙に一村を見かけて行に雨降日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明れば又野中を行。そこに野飼の馬あり。草刈おのこなげきよれば（中略）此馬のとゞまる所にて馬を返し給

へ」とかし侍ぬ。ちいさき者ふたり馬の跡したひてはしる。独は小姫にて名をかさねと云。聞なれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名成べし

曾良（10）

しかし、曾良が目の前の「かさね」という名の娘を意識して発句を詠んでいるのは異なり、秋成は、「美人」という語からの付合的連想によって発句を詠み、唐詩とは別の世界を展開したのであった。

##### 五、『去年の枝折』と古典利用

では、古市での発句「いざといはん是の姉輪の雪の松」は、いかなる意識のもとに創作されているのか。

この発句の典拠は、『伊勢物語』第十四段の、昔男がみちの国に旅し、そこで思いをよせられた女と別れる時詠んだ歌「くり原のあねは（姉齒）の松の人ならば都のつとにいざといはましを」がふまえられている。

むかし、おとこ、みちの国にすぐるに行きいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけん、せちに思へる心なんありける。(中略)おとこ、京へなんまかるとて、

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを(11)

(定家本系統のうち、天福本は「あれは」としているが、武田本・流布本は「あねは」、古本系統、大島本系統、朱雀院塗籠本系統、真名本系統の本の殆どは「あねは」としているため、「あねは」とした。)

この歌は『夫木和歌抄』等にも影響が見られる他、『俳諧類船集』「栗原」の項に「あねはの松 都のつと」「名木」の項では「くりはらのあねはの松」の語が見える(12)。

その「姉齒の松」は、『義経記』巻七では、「小町が關寺に候ひける時、業平の中將東へ下り給ひけるに」とあり、「妹の姉齒が許へ文書きて言傳せしに」とあつて業平・小町説話と連絡している。そして、業平が、室の里の人に「墓に植へたる松をこそ姉齒の松とは申(し)候へ」と云われていることから、「姉齒の松」は、妹姉齒の墓上の松へと変化していることがわかる(13)。

一方、『奥羽観跡聞老志』(享保四年(一七一八)成)では「是レ乃チ筑紫肥前ノ松浦佐用姫ナル者ノ姉ガ墓上ノ松ナリ。或ハ曰フ、小野小町ガ姉也ト。(原、漢文。傍点・振り仮

名は私に付した。」と記されている（14）。

このように、姉齒の松には、美人にまつわるさまざまな伝承が重ねられている。秋成は、「美人」という語から付合的に連想した『伊勢物語』の歌の「田舎臭い女性は都に連れて行けない」という寓意をふまえ、美人なのだから「いざ」共に都へと言おう、と片山里の女性に戯れているのである。

また、この句には、もう一つ言葉遊びが重ねられている。古市冒頭で、「此道のしるべする」駕籠の者たちが連れてこられた、とされている印南野は、播磨の南部にあった原野で、現在の明石川・加古川の二流域にまたがる地帯である。この「印南野」の景物として、伝統的に和歌・俳諧で「尾花」が付け合わされてきた。この「尾花」は薄の花穂やすすき自身を指すが、『俳諧類船集』において、「薄」の付合語には「小町が幽霊」、「美人」の項では、「竹取」「常磐御前」に続いて「小町」という付合語が見られる。

これらのことから、秋成は、「美人」・「姉齒」・「小町」という付合的発想だけでなく、「印南野」・「尾花」（「薄」）・「小町（が幽霊）」・「美人」という連想関係も詠み込んでいるといえる。

『去年の枝折』のような故事の利用は、次に挙げる『おくのほそ道』における白河の関

の条とは正反対といえる。

心許なき日かず重なるまゝに、白川の関にかゝりて旅心定りぬ。いかで都へ、と便求しも断也。中にも此関は三関の一にして、風の人、心をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に、茨の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し衣装を改し事など、清輔の筆にもとどめ置れしとぞ。

卯の花をかざしに関の晴着かな

曾良（15）

諸注釈で述べられているように、この条の「卯の花を」句は『袋草子』（貞享二年刊）の装束を直した国行の次の説話をふまえて、白川の関を越えたとしている。

竹田大夫国行と云ふ者、陸奥に下向の時、白川の関過ぐる日は殊に装束きて、みづびんかくと云々。人間ひて云はく、「何等の故ぞや」。答へて云はく、「古曾部入道の「秋風ぞふく白川の関」とよまれたる所をば、いかでなりにては過ぎん」と云々。殊勝の事なり（16）。

また『おくのほそ道』石の巻の条で、芭蕉は次のように記している。

十二日、平和泉と心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞伝て、人跡稀に雉兎芻蕘の往かふ道、そこともわからず、終に路ふみたがえて、石の巻といふ湊に出（17）。

傍線部に見えるように、芭蕉は「あねはの松、緒だえの橋」などの歌枕を探訪しようと、「人跡稀に雉兎芻蕘（ちとすうぜう）の往かふ道」をたどったが「終に路ふみたがえて」結局歌枕にちなんだ発句を詠まなかった。

秋成はこれらのことをふまえ、実際に名所旧跡やその周辺の土地を訪れなくとも、付合による連想に基づき、古典世界に遊ぶことができることを『去年の枝折』で表現するため「いざといはん」の句を詠んだのではないか。

この秋成の俳諧は、秋成の切字論の書『也哉抄』によせた蕪村の序（安永三年成）にある「梅翁を慕ふといへども、芭蕉をなみせず。おのれがこゝろの適ところに随ひて、よき事をよしとす」（18）という評のとおりといえる。しかし、心の内の遊びである自己の俳諧に、芭蕉の俳諧の影響が及んできたことに危機感を感じた秋成は、『去年の枝折』で、芭



蕉および蕉門俳人の漂泊を攻撃し、自己の風流（19）を守ろうとしたと考えられるのである。

おわりに

秋成は、『去年の枝折』において、俳諧のみに専心しておらず、『おくのほそ道』に倣って行脚せずとも、俳諧紀行文を創作することができると示したかっただけではないか。『唐詩選』と『伊勢物語』を古市の場面で典拠として使用したのも、そのような意図で、紀行文の創作を試みたからではないか。

これらのことから「ゆめ／＼学ぶまじき人の有様也とぞおもふ」という言葉は、『おくのほそ道』の世界にあこがれ、安易に芭蕉の足跡を慕って放浪しても、そのことで文学の真理に到達することなどできないから、独自の文芸世界に遊べよ、という当代の人々への秋成の自戒をも込めた提言だったと考えられるのである。

(1) 勝倉寿一氏「秋成の紀行文―「去年の枝折」を中心に―」〔『福島大学教育学部論集』第四十七号、一九九〇年〕、加藤裕一氏『『秋山記』・『去年の枝折』解説〕〔『上田秋成の紀行文 研究と注解』(実践女子学園学術・教育研究叢書 15、二〇〇八年)〕所収。初出『実践女子短大評論』第十五号(一九九四年一月)。東聖子氏『上田秋成『去年の枝折』考―俳諧的架空紀行の系譜と三重構造の心―〕〔『国文目白』第四十号、二〇〇一年二月〕など。

(2) 『藤簍冊子』は『上田秋成全集』第十卷(中央公論社、一九九一年)に所収されている。なお『去年の枝折』が収録された、久松国男氏蔵・国立国会図書館蔵『枕の硯』の写本二本については、平成二〇年七月二〇日に行われた大阪俳文学研究会七月例会の席上で、石川真弘先生からご教示を賜り、その存在を確認するに至った。

(3) 神宮古典籍影印叢刊編集委員会編『神宮禰宜系譜(神宮古典籍影印叢刊五―一)』(八木書店、一九八五年)所収。

(4) 佐々木信綱『増訂 賀茂真淵と本居宣長』(湯川弘文社、一九三五年)所収。『宇治山田市史』(宇治山田市編、一九二九年)によると、橋村正兌は神宮の典故に精通し、『校正法曹至要抄』、『外宮儀式解』等の著作を著している。

- (5) 加藤裕一氏『上田秋成の紀行文(その一)——『秋山記』・『去年の枝折』解説』(『上田秋成の紀行文 研究と注解』(実践女子学園学術・教育研究叢書 15、二〇〇八年) 所収)。
- (6) 東聖子氏『上田秋成『去年の枝折』考——俳諧的架空紀行の系譜と三重構造の心——』(『国文目白』第四十号、二〇〇一年二月)。
- (7) 森山重雄『『去年の枝折』とその芭蕉批判』(『秋成 言葉の辺境と異界』(三一書房、一九八九年) 所収)。
- (8) 高木正一『唐詩選(上)』(新訂中国古典選十四、朝日新聞社、一九六五年) 所収。
- (9) 『日本古典文学大系 46 芭蕉文集』所収。
- (10) (9) に同じ。
- (11) 『新日本古典文学大系 17 竹取物語 伊勢物語』所収。
- (12) 『古典俳文学大系 増補篇』所収。
- (13) 『日本古典文学大系 37 義経記』所収。
- (14) 『仙台叢書』第15巻(仙臺叢書刊行会、一九二八年) 所収。
- (15) (9) に同じ。
- (16) 『新日本古典文学大系 29 袋草子』所収。

(17) (9) に同じ。

(18) 『上田秋成全集』第六卷（中央公論社、一九九一年）所収。

(19) 秋成の風流については、池澤一郎先生から、発句「いざといはん是の姉輪の雪の松」の「雪の松」が、『論語』「子罕」の「歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後るることを知る也」をふまえたものであり、秋成は古市の美人に、堅く操を守る女性像も重ねているのではないか、とのご指摘をいただいた。『論語』のこの文辞が、『俳諧類船集』にも見え、さらに「雪後始知松柏操」という語が白隠慧鶴著『槐安国語』（寛延三年刊）等の禅語録で人口に膾炙していたことや、杜審言の詩がふまえる『陌上桑（はくじょうそう）』の内容からも、傾聴すべきご意見と思われる。ただ、秋成は、『雨月物語』「貧福論」において自己の富貴論を説くために『論語』を引用する際、元の文意をずらして使用している。このことから、自惚れた振る舞いをする女性に対し、「松柏」の喩えを以て皮肉ったとも解釈できる。このことは秋成の文芸世界における重層性といえるだろう。

〔付記〕 稿末に【表1】『去年の枝折』行程図と、竹田く古市街道図を付した。

### 第三節 『去年の枝折』所収俳諧の再検討

はじめに

前節では、『去年の枝折』中の誤刻を指摘し、後半の行程を整理した。また、後半の摂津の場面で秋成が意図したことについて、同場面の文章と発句に絞り考察を行った。本節では『去年の枝折』に収録される発句全体について検討していく。

『去年の枝折』に収載される句数は、秋成の発句が二十二句、秋成の門人義竹が二句、同じく門人正名が二句、秋成による付合の発句一句と付句三案の合計三〇句となっている。『去年の枝折』について、先行研究では、主に作品内の芭蕉への酷評と受け取られる言説を中心に論じられてきた。近年になって、『秋山記』と比較しながら、本文や句に関する考察を行う論文が見られるようになった。しかし、日常性があり句を含んだ『去年の枝折』は、物語性があり歌を含んだ『秋山記』に対して異質で対照的であるという点が強調されて論じられてきた(1)。確かに、『秋山記』と違い、『去年の枝折』には、和歌や物語の論といったものは見られない。ただ、『去年の枝折』中の文章や句の表現を追っていくと、『秋

山記』との相違点だけではなく、共通点も見られるのである。

そこで、本節では、『去年の枝折』所収の俳諧作品そのものを再検討する。まず、『去年の枝折』と『秋山記』との構成を比較した後、『伊勢物語』や『万葉集』など、両紀行文に共通して用いられる典拠を指摘する。次に冒頭句を考察し、『秋山記』の和歌をふまえながらその表現に込められた作者の意図を探る。最後に、『去年の枝折』の俳諧作品一覧を提示し、各句の典拠を挙げていき、中年期の秋成の俳諧作品が内包する多様な文芸的要素について明らかにしたいと思う。

注

- (1) 加藤裕一氏「『秋山記』・『去年の枝折』解説」四六～五四頁。〔『上田秋成の紀行文 研究と注解』(実践女子学園学術・教育研究叢書15、二〇〇八年)〕所収。初出『実践女子短大評論』第十五号(一九九四年一月)。

## 一、『秋山記』と『去年の枝折』の構造

『秋山記』と『去年の枝折』は旅の記録としては、両紀行文は相互補完関係にあることが、加藤裕一氏の作成した旅程表によって明らかにされている(2)。また、東聖子氏は、『秋山記』の源氏物語論と『去年の枝折』の芭蕉論の位置は、〈往路〉のはじめと〈帰路〉のはじめという様に正反対の場所に配置されていること、両論とも僧形の旅人により語られるが、正論と不正な論という様に、逆転した立場から論じられていることを指摘されている(3)。

これらの先行研究を踏まえつつ、両紀行文の構成を比較したものが、次の【図1】である。

【図1】 両紀行文の構成比較

『秋山記』	『去年の枝折』
1 序  目的	1 序  あだ言 鬼貫 目的

<p>2 《往路》 1</p> <p>『伊勢物語』第十六段踏襲表現（難波）</p> <p>●源氏物語論 （須磨・明石）</p> <p>3 《往路》 2</p> <p>曾根崎の社―豆崎―西光寺野―辻川―館―栗賀</p> <p>4 城崎滞在</p> <p>・湯治客（女君と法師の話）</p> <p>・高野の濱の海あそび</p> <p>・雨夜の物語</p> <p>5 《帰路》</p> <p>天橋立―宮津―真名井が原―福知山―氷上の黒井―難波</p>	<p>2 《往路》</p> <p>・須磨の馬子と明石の駕かきのお国自慢</p> <p>・雨やどり</p> <p>・うぶ砂神に奉りし御酒</p> <p>・蕎麦屋 古びたる香り</p> <p>3 城崎滞在</p> <p>難波の夜（現実）に戻る・分身との俳話</p> <p>4 《帰路》 1</p> <p>●芭蕉・蕉門俳人論 （二箇の里）</p> <p>5 《帰路》 2</p> <p>天橋立―真名井が原―味噌 （味噌）</p> <p>『伊勢物語』第十四段踏襲表現（古市）</p> <p>東久保―名塩―木の本―なま瀬―難波</p>
--	--



秋成は『去年の枝折』冒頭部の序で、「冬の夜の月さやかなる」時分に前年の城崎旅行の事を思い出し、「あだ言」を「手習い」に書く述べる。

城崎旅行中の十月上旬の脱稿とされる『ぬば玉の巻』では、『源氏物語』を「あだ（虚）ことをまめ（実）ごとにつとめたる」（カッコ内は原文の右注）（4）物語と評している。秋成の源氏物語論については多くの先行研究で述べられているため、ここでは省略するが、「あだこと」というのは、この場合、史実や実説を指す「まめ言」に対して、虚構化、物語化された話を指す。『去年の枝折』は『ぬば玉の巻』の一年後に執筆されているため、冒頭の「あだ言」という言葉も、虚構のことを指すと思われる。このことから、『去年の枝折』は旅の事実のみを記述したものではなく、虚構的作品として書かれていることがわかる。続いての「鬼貫」というのは、伊丹俳人・上島鬼貫に対しての敬意を次のように語った部分のことである。

むかし鬼貫といふ人有けり：其人の書捨て物を見れば、老たる親によくつかへたる人  
とこそ見えたれ。夫はかの人あつまの方に遊びたる事の有しが：親のおはさんほどは、  
おのれ赦すへき身かハとて、其見し所とのうつゝに見ゆる物から、空せみのもぬけの

門出して行くくちすさみす…よむにありかたき事共をおのか上にくらぶれば、其心さしの打信しられて面あからむ心地せらる。

傍線部の内容は、「老たる親によくつかへ」た鬼貫は、「親のおはさんほどは、おのれ赦すべき身かは」と、高齢の両親の身体を慮んばかって江戸下りを断念した。そこで、四年前に行った東海道の旅をもとに「禁足の旅」を行い、元禄三年（一六九〇）三十歳のとき『禁足之旅記』（5）を執筆した。それを読んで「ありがた」いことだと感心した、というものである。

「禁足之旅」とは、家に居ながらにして、魂のみ「空せみのもぬけの門出」して行く想像の旅のことである。秋成の今回の目的もそこにあり、『禁足之旅記』の趣向をもとに、『去年の枝折』を書いている。その結果、難波の家と城崎の旅中を心が行き来し、さらには青年時代の旅の思い出に遊ぶという虚構性の強い内容となっている。

【図1】のなかで注目すべき事柄は、正本綏子氏が指摘された『秋山記』冒頭場面での『伊勢物語』の影響である。『秋山記』によると、秋成は出立に際し、「したしき友垣の女」から防寒用の衣服を贈られて「情ある人のこゝろをつくし綿身にそへゆかばさむけくもあ

らじ」という歌を詠む。その直後に「うべしも天の羽ごろもと奉りぬるは」と述べる。この場面は、『伊勢物語』第十六段にみえる、零落した紀有常が、尼になる妻への餞別用にと友人から衣類を贈られ、それを有常が「天の羽衣」にたとえ「これやこのあまの羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつりけれ」と詠む話になぞらえたものだということである(6)。

前節で述べた通り、『去年の枝折』帰路後半の場面にも『伊勢物語』の影響が見られる。摂津国古市で、秋成は美人であると自惚れる「片山里」の女性に出会うが、すでに「男もたる」女性であると聞いていたので、戯れとして「いざといはん是の姉輪の雪の松」という句を詠む、というものである。これは『伊勢物語』第十四段の、昔みちの国に旅をした男が、田舎の垢抜けない女と別れる時に「栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを」と詠む話を踏まえる(7)。ここで秋成は「みちの国の女と違って、雪中の松のように美しく貞節なあなたに、一緒に来て下さいと言いましよう」と少々皮肉を込めた句を贈っていると考えられる。

このように秋成は『伊勢物語』を両紀行文で典拠として利用していることがわかる。従来の研究では、それぞれの紀行文は、異なる姿勢で執筆された独立した作品とされてきた。また、城崎旅行の行程を精細に整理された加藤氏は、『去年の枝折』末尾にある「秋山の

記の遺漏を翌年の冬難波にてかける也」という言葉をふまえ、作品の意義を考えるとときには『去年の枝折』はあくまで『秋山記』の遺漏であることを根底に据えなくてはならないとしている（8）。確かに秋成自身が作品の最後に記した「遺漏」という言葉は、原則として事実であると捉えるべきである。しかし同時に、『去年の枝折』は『秋山記』とは違う形で、古典を典拠とした作品だったと考えられるのである。

注

（2）（1）に同じ。

（3）東聖子氏「上田秋成『去年の枝折』考―俳諧的架空紀行の系譜と三重構造の心―」（『国文目白』第四十号、二〇〇一年二月）。

（4）『上田秋成全集』第五卷所収。六十四頁。

（5）『禁足之旅記』は明和六年（一七六九）跋の刊本『鬼貫句選』（大祇編）のほか、『犬居士』（元禄三年（一六九〇）刊）、『仏兄七久留万』（享保十二年（一七二七）自序）に収録される。東聖子氏は前掲論文において、『犬居士』は年代が古く、『仏兄七久留万』は写本でしか伝わっていないので、秋成は蕪村が跋文を書いた『鬼貫句選』によって読んだと推定されている。なお、『鬼貫句選』

は岡田利兵衛氏『伊丹風俳諧全集上巻』（柳原書店、一九四〇年）に、『犬居士』『仏兄七久留万』は、岡田利兵衛氏『鬼貫全集 三訂版』（角川書店、一九七八年）に所収。

- (6) 正本綏子氏「『秋山記』冒頭における『伊勢物語』第一六段踏襲の意図」〔『国文学攷』第一五七号（広島大学国語国文学会）一九九八年三月〕。歌の表記は『日本古典文学大系9 竹取物語 伊勢物語 大和物語』に拠った。なお、秋成の伊勢物語研究書である稿本『よしやあしや』には、「これや此天の羽衣うべしこそ君かみけしとたてまつりけれ」と記されている。

- (7) 本章第二節参照。なお、句で「姉齒（あねは）」が「姉輪（あねわ）」と記されているのは、秋成の国語学書『靈語通』（寛政九年〔一七九七〕刊）での仮名遣い否定論が影響していると思われる。

- (8) (1) に同じ。

## 二、『去年の枝折』冒頭部と『秋山記』冒頭部の『万葉集』利用

次に、『去年の枝折』及び『秋山記』冒頭部の俳諧と和歌が、『万葉集』を利用していることを述べる。冒頭場面の句を特に取り上げるのは、文章の性質を決定する重要な部分で

あると考えられるからである。

まず、『去年の枝折』冒頭句とその前文について、次に記す。

九月十二日の朝つとめて出たつ。露霜こそ寒けれ、朝かけのどこかにて道もすゝみがち也。武庫川にて、

鞍かりて蹴上つめたし朝ごころ（9）

この句は、『万葉集』巻第七の一四一番、

武庫川の 水脈を速みと 赤駒の あがく激ちに 濡れにけるかも（10）

を踏まえて詠んだものと考えられる。「水脈」は、河の中で舟の運航に適する底深い水流のことを指し、「激ち」とは水しぶきのことを指す。

一句自体には、言葉遊びの要素がうかがえる。「鞍かりて」には「暗がり」の意味が掛けられている。その下の「蹴上」には、前文を受けて、馬が霜を蹴上げて冷たい、という意味の他に、鞍に続けて、馬に上るための足がかりとする鐙に水がかかって冷たい、とい

う意味が掛けられていると思われる。

ただ、単なる言語の機智だけでは終わらずに、『万葉集』の歌を通じて、現実の風景に上代の世界を重ね、観念的な虚構の世界に遊んでいるといえる。

一方、『秋山記』冒頭でも、『万葉集』歌の影響が見える。

長月の十日あまり二日といふ日、かど出す。したしき友垣の女の許より、「あすなんと  
きこえ給ふにぞ、ゆくりなくもおもふたまふる。…此あつごへたるもの、いとあらく  
しげなれど、山里の朝よひしのがせたまはんにはとてなん」と、聞えこしに、  
情ある人のこゝろをつくし綿身にそへゆかばさむけくもあらじ（11）

これは、『万葉集』巻第三 三三六番 沙弥満誓の、

しらぬひ 筑紫の綿は 身に着けて いまだは着ねど 暖けく見ゆ（12）

という歌が明らかにふまえられている。この歌は古くから有名で、『八雲御抄』の「綿」の

項には「しらぬひのつくしのわた」という言葉が見える（13）。また、付合語をまとめた『俳諧類船集』（延宝四年〔一六七六〕刊）の「綿」と「温」の項にも、「しらぬひのつくしの綿は」の歌が紹介されている。

この歌について、のちに秋成は、万葉集研究書『檜の杣』（寛政十二年〔一八〇〇〕起稿）で次のように述べている。

草種の綿は、神護景雲三年、始て毎年太宰府に貢く事を令すと也。由て是を筑紫綿と  
は呼。おもふに、満誓此席に在て、帥卿の心ふかく物のたまふを感じて、身に着てん  
にはあたゝかにかたしけなかるへき君そと、たとへてほむるなるへし。（14）

また、晩年に執筆された万葉集研究書『金砂』（享和三年〔一八〇三〕成稿）には、

詠<sup>レ</sup>綿とあれと。比興の体にて。たのむ陰の人に。初てあひてよむか。或説には慈悲  
ある人は。其相にあらはるゝを。心としてよむかと云り。（15）



とある。これらのことから、秋成は、満誓が、筑紫綿を帝に献上した太宰帥の温和な物言いに感動し、その様子を筑紫の綿にたとえて歌を詠んだ、という説をもとに解釈していることがわかる。『秋山記』の歌にも、この解釈が反映されており、「したしき友垣の女」より贈られた、心尽くしの温かい綿入れを着れば、寒さも感じないであろう、と意が歌に込められている。

このように『秋山記』『去年の枝折』の歌と句はそれぞれ『万葉集』という同一の典拠をもとに作られている。秋成は、国学の知識を、和歌紀行文だけではなく俳諧紀行文にも同様に生かし、観念的な世界の中で句作を行っている。

このことは、同時代の秋成作品の読者も理解していたのではないだろうか。安永期に秋成と交流した与謝蕪村の書簡には、秋成への親愛の情を表しているものがある反面、秋成の句に対して厳しい評価を与えている。安永五年二月二十一日付几董（推定）宛には「一、むてふ発句参候由、すり物之事はいかが可致哉。御めにかかり御そうだん可仕候。しかしらぬもの歟にて候。」（16）と述べており、摺り物にするほどの句ではないとしている。しかし、秋成の切字論である『也哉抄』には序を寄せていることから、秋成の古学知識の文芸への応用についてはかなり期待を抱いていたのではないかと思われる。

また、『去年の枝折』を最初に書写した橋村正兌は、本居大平・春庭門の国学者であって、俳諧とのつながりは直接には見いだせない。この正兌は『去年の枝折』を写す際に、和文集『藤簾冊子』に収録されている作品とともに書写していることから、『去年の枝折』を俳文としてよりは、和文の変種として捉えていたのではないであろうか。

以上のことから、秋成は『去年の枝折』で、古典研究で得た教養を、和文のみならず俳諧にも用いて、新しい文芸世界を構築していく意志を表明しているといえる。

注

(9) 『去年の枝折』本文は、久松国男氏所蔵本『枕の硯』(写本二冊)所収『去年の枝折』に拠った。

なお、翻刻に際して、適宜句読点を加え、濁点を付した。

(10) 『新編日本古典文学全集 7 万葉集②』所収。

(11) 『上田秋成全集』第十卷(中央公論社、一九九一年)所収。

(12) 『新編日本古典文学全集 6 万葉集①』所収。

(13) 『八雲御抄 伝伏見院筆本』(片桐洋一監修、八雲御抄研究会、和泉書院、二〇〇五年)所収。

(14) 『上田秋成全集』第二卷(中央公論社、一九九一年)所収。

(15) 『上田秋成全集』第三卷（中央公論社、一九九一年）所収。

(16) 『蕪村書簡集』（大谷篤藏・藤田真一校注、岩波書店、一九九二年）所収。

### 三、『去年の枝折』の俳諧

それでは、本節のここまでの考察をふまえ、『去年の枝折』所収の俳諧を検討していく。同作品には、秋成の二十二の発句と付合一種（長句一句に短句三種）、および秋成の門人義竹の二句、同じく門人正名の二句が収載されている。次にその一覧を示す。（傍線部は季語を示す。）

#### ○旅の回想（難波↓城崎）

1 鞍かりて蹴上つめたし朝こころ（秋・朝寒）

2 雁啼て菊をかき根のやとりかな（秋・雁が音／菊）

3 祭餅それか夜寒の粥はしら（秋・夜寒）

4 何も／＼秋詠め也須磨の里（秋・秋詠め）

5 月に入ぬ彼朝霧のあかしかた（秋・月／朝霧）

6 灰小屋をもるとも頼め秋時雨（秋・秋時雨）

7 見あくれば月に声あり嶺の松（秋・月）

8 山畑や蕎麦やが軒に花かほる（秋・蕎麦の花）

9 秋山のしたゝみけりな物のへん（秋・秋山）

10 秋風に聲また青し笹のいほ（秋・秋風）

11 山を洗ふ雨に色なし秋の水（秋・秋の水）

12 渡る雁声をから櫓の入江かな（冬・雁が音）

13 わたくしの名にかくれたり初時雨（冬・初時雨）

14 曇ふる湯さめの床の夜もすがら（冬・曇）

● 現実（難波） 伊丹の門人義竹来訪。

① うつそりと春さかぬ木のかへり花（冬・帰り花）

② 何かふる夜半ともしらぬ寒さかな（冬・寒さ）

○ 旅の回想（城崎）

付合発句 月や霰其夜の更て河千鳥（冬・霰／河千鳥）

脇句案 一) 頭巾とらるゝ橋のにし風 (冬・頭巾)

二) 眠るか山の陰くらき岸 (雑)

三) 水も寝ぬのにさわぐ枯蘆 (冬・枯蘆)

● 現実 (難波) 門人正名、発句を懷に訪問。

① かよひ路はかれ／＼になる千鳥なく (冬・千鳥)

② 冴さゆる月にぬれたるいらかな (冬・冴ゆる月)

○ 旅の回想 (城崎↓難波)

15 桑の葉の是をや人の老といふも

(冬・木枯しに散る桑の葉 (句意より))

16 其濁り漉す物かさう旅頭巾 (冬・頭巾)

17 新なめを伸のふらせる木かけかな (冬・新嘗)

(昔伊丹村にあそびし時)

18 米つきも北へかへるや天つかり (春・帰雁)

19 霜曇り思ふかたから旭さす (冬・霜曇り)

20 いさといはん是の姉輪の雪の松 (冬・雪)

21 霜わけん道かさゝきの橋ならば（冬・霜）

● 現実（難波） 秋成の発句

22 暁や市の中にもかね氷る（冬・鐘氷る）

秋成の『去年の枝折』俳諧について、先行研究の多くではその一部を取り上げ、主に談林俳諧や同時代の交遊のあった俳人による俳諧からの影響を指摘していた。しかし、先述の通り、秋成の俳諧には、彼が修得した古典学からの影響もみられる。とくに『万葉集』や『夫木和歌抄』の歌を典拠としている句が多い。そこで、Ⅰ『万葉集』歌を典拠とする句、Ⅱ『万葉集』歌以外の和歌を典拠とする句、Ⅲ和歌以外を典拠とする句、Ⅳ典拠未詳の句に分類し、それに従って各句を検討する。

まず、Ⅰ『万葉集』歌を典拠とする句は、

1 鞍かりて蹴上つめたし朝こころ（秋・朝寒）

6 灰小屋をもるとも頼め秋時雨（秋・秋時雨）

7 見あくれば月に声あり嶺の松（秋・月）

9 秋山のしたゝみけりな物のへん（秋・秋山）

15 桑の葉の是をや人の老といふも（冬・木枯しに散る桑の葉〔句意より〕）

19 霜曇り思ふかたから旭さす（冬・霜曇り）

の六句と考えられる。

1の句は、先述の通り『万葉集』巻七の一一四一番、

武庫川の水脈を速みと赤駒のあがく激ちに濡れにけるかも（17）

を踏まえたものである。武庫川の流れの速さに赤駒があがいて水しぶきが立ち、濡れてしまった、と詠まれたこの歌は『歌枕名寄』巻第十四（18）にも収載されており、人口に膾炙した歌といえる。発句の意は、秋成が旅のために借りた馬が、武庫川の水を蹴り上げ、その冷たさに、朝の寒さをにわかを感じるというものである。旅をする自分の姿を上代人に擬し、古学の知識を生かして想像の世界に遊んだものといえる。

6は、『万葉集』巻八の一五七三番、

秋の雨に濡れつつ居れば賤しけど我妹がやどし思ほゆるかも（19）

を典拠として詠んだ句と考えられる。歌の意味は、秋雨に降られていると、恋人の家で寄り添って、雨に降りこめられていたい、というものである。秋成の場合は、想像の旅の中で、豆崎（ずさき）（現兵庫県高砂市）の宿の騒がしさに耐えきれず、夜遅くに出立して雨に降られ、妻が雨露を払う軒先もないと嘆いたのを聞いて詠んだ句であった。「賤（いや）しけど」という言葉を受けて、秋の時雨を避けるため、雨漏りのする粗末な小屋を二人で頼ろう、と言ったのだと考えられる。秋成夫婦の仲むつまじい様子がうかがえる。

7は、『万葉集』卷十の二二二五番、

我が背子がかざしの萩に置く露をさやかに見よと月は照るらし（20）

を踏まえていると思われる。同時に『夫木和歌抄』卷十三の秋部（四）「月」の前大納言経通の歌、嶺の松はらふあらしの木の間よりかげさたまらぬ山のはの月（21）を典拠とする



と考えられる。発句は、播磨の館（屋形）（現兵庫県神崎郡市川町）という里で十五夜の月を見て詠んだものである。「月に声あり嶺の松」というのは、月が「さやかに見よ」というように皓皓と照っているという万葉歌の表現に基づくものであろう。それとともに、風に揺れる「嶺の松」の間から月光が瞬くように見えるという『夫木和歌抄』歌の描写を踏まえていると思われる。『夫木和歌抄』を主な典拠とすると考えられる句については、のちに挙げる。

9 は、『万葉集』巻十の二二三九番、

秋山のしたひが下に鳴く鳥の声だに聞かば何か嘆かむ（22）

のなかの表現を踏まえて詠んだ句である。歌は、秋山の「したひ」（紅葉）の下で鳴く鳥のように、あなたの声だけでも聞ければ何を嘆くことがあるのか、という恋の気持ちを読んだものである。秋成の場合は、ある山里で里の名を尋ねたら、土地の者の「物の部」という答えが、訛りのせいで「物述べん」と聞こえて困惑した、という話を紹介している。「秋

山のした」までは万葉歌と同じであるが、先のエピソードを踏まえて、「舌(した)訛(だ)み」(訛り)という語をだし、さらに、「認(したた)み」(文字を書き)という語を掛け、「里の名を書いてあるからそれを見ろという意味で、物述べんというのか」というからかいの意を込め、「物のべん」という言葉で締めくくっている。滑稽さを前面に押し出した句といえるであろう。

15は、『万葉集』巻七の一三五七番、

たらちねの母がその業る桑すらに願へば衣に着るといふものを(23)

を踏まえていると考えられる。この歌は、母の仕事で採る桑でさえ、頼めば衣料となるのに、という意味で、その気になれば叶わぬ恋も必ず実するという意が込められている。しかし、発句中の桑という語は春の季語であり、前後の発句の季と合わない。秋成が述べるには、冬のただ中、旅先の蚕飼いを休む家々の中で、偶然に絹糸を掛けている粗末な家があった。その前の畑に植えられた蚕の飼料用の桑の葉は木枯らしで散っていたということである。万葉の時代から詠まれている貴重な桑の葉も、農夫の老いを表すかのように、木枯

らしに散ってしまった、と想像を交えながら寂寞とした情景を詠んでいると考えられる。

19 は、『万葉集』巻七の一〇八三番、

霜曇りすとかあるらむひさかたの夜渡る月の見えなく思(おも)へば (24)

を踏まえている。『万葉集』歌は霜の置きそうなほど寒い夜中に曇っている空であるから、夜空を渡る月が見えないのか、という意である。しかし秋成は、初句を「霜曇り」と始めながらも、曙の空に目を向けて「曇りかと思えば朝日が差した」と俳味を利かせている。秋成らしい句といえるのではないだろうか。

次に、曰『万葉集』以外の和歌を典拠とする句は、

2 雁啼て菊をかき根のやとりかな (秋・雁が音／菊)

5 月は入ぬ彼朝霧のあかしかな (秋・月／朝霧)

12 渡る雁声をから櫓の入江かな (冬・雁が音)

14 霰ふる湯さめの床の夜もすがら (冬・霰)

付合発句 月や霰其夜の更て河千鳥 (冬・霰／河千鳥)

脇句案㊦) 頭巾とらるゝ橋のにし風 (冬・頭巾)

㊦) 眠るか山の陰くらき岸 (雑)

㊦) 水も寝ぬのにさわぐ枯蘆 (冬・枯蘆)

正名発句① かよひ路はかれ／＼になる千鳥なく (冬・千鳥)

20 いさといはん是の姉輪の雪の松 (冬・雪)

21 霜わけん道かさゝきの橋ならば (冬・霜)

の十一句であると考えられる。

2 は、『伊勢物語』六十八段の歌、

雁なきて菊の花さく秋はあれど春の海邊にすみよしの濱 (25)

を踏まえている。「やどりの見入れよろし」と「住よしの里」(現神戸市東灘区住吉宮町)に宿泊したことから連想したと考えられる。しかし、和歌の方では、「雁」と「菊」という典型的な風物により規定された秋の浜辺は、春の住吉の海辺に比べ住み良くないとされる

が、秋成の発句では、古歌によって規定された秋の風物を思いながら一晚を過ごすことを喜んでるように思われる。「雁の声を菊（聞く）」という洒落とともに、俳諧味を感じさせる部分である。

5 は、『古今集』巻九の四〇九番の伝柿本人麻呂歌である、

ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思ふ（26）

を踏まえていると考えられる。先に述べたが（27）、かの人麻呂も詠んだとされる、明石潟の象徴である「月」を主体とせずに、月が沈む明石潟の朝霧を主体とする句である。人麻呂作とされる歌と同じく、「明石」には「夜が明ける」の意が掛けられている。秋成の人麻呂に対する敬慕の念は並々ならぬものがあり、連歌師宗椿に人麻呂の霊が物語論を述べる『ぬば玉の巻』（安永八年（一七七九）成）や、人麻呂の伝記『歌聖伝』（天明五年（一七八五）以前成）が執筆されている。

12 は、『夫木和歌抄』巻十二秋部（三）「雁」の前中納言通房の歌、

さ夜ふけてうらにからろの音すなり天のと渡る雁にやあるらむ

を踏まえていると考えられる。櫓を水中に浅く入れて漕ぐ「からろ（空櫓）」の音が夜更けにもかかわらず浦から聞こえて不思議に思い、天の川を渡る雁の声であろうか、と詠んだ歌である。秋成句の場合も雁が音を詠んでいるが、「声を枯らす」に「空櫓」を掛けて、あくまで俳諧は俳諧として詠むことに徹しているといえる。

14は、『夫木和歌抄』卷十七冬部（二）「囊」の藤原忠房の歌、

ひまを荒み竹のすがきの下さえて夜なく降るは囊なりけり

を踏まえていると思われる。『夫木和歌抄』の歌は、隙間が多くて粗く造られた竹の簀の子の床が冷える上、夜な夜な囊が降って寒い、と辛い暮らしを詠んでいる。しかし秋成はそれを、北国の城崎温泉で囊が降る夜は、竹の簀の子の上で湯冷めすると俳味豊かな発句に転換させている。

付合発句と脇句案㉒)については、すでに高田氏の前掲論文に解釈がある。『秋山記』には、城崎から笹の浦まで歩んで、「山の影江に沈みて、水の面のをぐらきに、鷗の立ゐる声々」を見聞きし、その後一晩のうちに月と霰の両方に出会った体験が記されている。それをふまえて、秋成は付合の発句「月や霰其夜の更て河千鳥」を詠んだあと、ひとり脇句を考えて愉しむのである。脇句案㉒)は、秋成が鳴く川千鳥から思い出したと『去年の枝折』で述べる『拾遺集』巻四冬部の紀貫之の歌、

思ひかね妹が行けば冬の夜の川風寒みちどりなくなり(28)

を踏まえている。千鳥を冬の季と結びつけた名歌として有名な貫之歌の「川風寒み」という言葉を、脇句㉒)では「頭巾とらるる橋の西風」と滑稽化させている。

脇句案㉒)は、『去年の枝折』本文に、「月の光を思ひて山陰のくらしとや…岸も又河ぎしとつゞきて」とあるので、付合発句をふまえて詠んだものと思われるが、「月」から「陰くらき」と連想したのは、『夫木和歌抄』巻二十九雑部(十一)「槿」の藤原信実の歌、

かけくらし槇のしけ山つれ／＼といつを月日のあかりともみす（29）

等に見られる和歌的伝統を踏まえている。

脇句案<sup>三</sup>は、付合語集である『俳諧類船集』（延宝四年（一六七六）刊）の千鳥の条に、「芦分小船」や「芦田鶴」という言葉があることから、一般的な付合的連想を働かして詠んだ句と思われる。秋成は『去年の枝折』本文で、「川上に千鳥の聲更わたる、夜水も寝ぬ斗、枯蘆の風にさわぐさまいと社よくも云次かれたれ」とこの句を自己肯定しつつ、「頭巾とらるゝ橋のにし風」の方が冬の風の寒さを表現していて優れているとしている。

正名発句①は、『金葉集』巻四冬部の歌、

淡路島かよふ千鳥のなく声に幾夜ねざめぬ須磨の関守（30）

を言葉のうえで踏まえていると思われる。歌の場合は、もの悲しい千鳥の声に、寂しさを駆り立てられる須磨の関の番人を詠んでいる。一方発句の方は、秋成に対する門人正名の気持ちを詠んだものである。城崎へ通う道筋を通じて秋成に会いに行きたかったが、忙し



くて訪問できず離ればなれになって、妻を恋い慕い鳴く千鳥の声を聞いて自分も寂しく思っていた、という意味と思われる。よい句とは言い難いが、秋成への真情を伝える句となっている。

20は、『伊勢物語』第十四段歌の、

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを（31）

を踏まえている。この歌は、昔みちの国に旅をした男が、田舎じみた女に思いを寄せられ、美しい「姉齒の松」が人であったなら、都に連れて行くのだが、と詠んだものである。先述した通り（32）、摂津国の片田舎である古市で、美人であることを鼻に掛ける女性に戯れで句を贈った秋成は、すでに「男もたる」人であることを承知の上で、「みちの国の女と違って、雪中の松のように美しく貞節なあなたに、一緒に来て下さいと云いましょう。」と少々皮肉を込めて詠んでいる。

21は、『新古今集』巻六冬部の大伴家持の歌、

かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける（33）

を踏まえていると考えられる。秋成が、摂津国「木の本」から「なま瀬」を抜ける間に、峡谷にある掛け橋を渡った体験がもととなっている。発句は、歌を受けて、カササギが天の川にかけた橋ならば、背に置いた霜を分けてくれ、と詠まれている。

次に、目録和歌以外を典拠とする句は、

4 何も／＼秋詠め也須磨の里（秋・秋詠め）

8 山畑や蕎麦やが軒に花かほる（秋・蕎麦の花）

正名② 冴さゆる月にぬれたるいらかな（冬・冴ゆる月）

16 其濁り漉す物かさう旅頭巾（冬・頭巾）

18 米つきも北へかへるや天つかり（春・帰雁）

の五句であると思われる。

4 は、芭蕉の門人荷兮編『阿羅野』（元禄二年（一六八九）刊）の巻之一「花三十句」の

貞室の句、「これは／＼とばかり花の吉野山」(34)を踏まえていると考えられる。貞室は、姓安原、松永貞徳に師事し、貞門派では松江重頼と双璧をなした俳人である。見事な吉野山の千本桜に圧倒されて言葉がない様子をあらわす貞室の句は、芭蕉の紀行文『笈の小文』(宝永六年(一七〇九)刊)に、吉野山の桜を詠んだ代表的作品の一つとして挙げられ、そこで詠まれた数々の優れた和歌や俳諧の歴史を思うあまり、詠句ができなかったと芭蕉に述懐させている。一方、秋成に影響を与えた蕉門十哲の一人である宝井其角も、『句兄弟』(元禄七年(一六九四)刊)の一番に自分の句とともに並べている。秋成の発句も、須磨浦の素晴らしい秋の眺めと、そこで生まれた数々の古典作品に心を揺さぶられ「何も／＼」と「詠(なが)む」(句を詠む)しかない心情を掛詞によって表している。

8は、『続猿蓑』(元禄十一年(一六九八)刊)所収の芭蕉句「蕎麦はまだ花でもてなす山路かな」(35)を踏まえていると思われる。芭蕉句の前書には、「いせの斗従に山家をとはれて」とある。珍しい客に蕎麦を振舞おうとしたが、蕎麦はまだ実らず、山路の途中の花でもてなすという挨拶句である。秋成の場合は、蕎麦の花は収穫期の九月を迎え、蕎麦屋の前で香る、と詠んでいる。しかし『去年の枝折』では、発句のあとに、せっかく食べた蕎麦が「古びたる香り」で気分が台無しとなる、と滑稽にまとめている。

正名②は、「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは」で始まる『徒然草』第一三七段の中の月の光を描写した文章、

望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて持ち出でたるが、いと心深う青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたる村雲隠れのほど、またなくあはれなり。椎柴・白檜などの、濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身に沁みて、心あらん友もがなと、都恋しう覚ゆれ。(36)

を連想させる。正名の句は、そのまま解釈すると、冴え冴えと澄み切った冬の月によって濡れたように光る瓦葺きの屋根であるよ、という意味となる。しかし芸術論として有名な『徒然草』のこの段をふまえると、秋成のような深い情趣を解する友人とともに、この覺に反射する美しい月光を眺めたいものだ、という意になるであろう。

16は、自家製のどぶろくが発酵してくると、頭巾を取って酒を漉し、またそれをのせたという陶淵明の故事をふまえていると考えられる(37)。『去年の枝折』では、道案内をする男たちが濁り酒に興じているところに、その濁りを漉すため、自分の旅頭巾を脱いで貸

そう、と冗談気味に話しかけるようにして句を詠んでいる。

18 は、『田舎の句合』〔延宝八年（一六八〇）刊〕の其角の句である、

帰る雁米つきも古里や思ふ（38）

を明らかに踏まえたものである。秋成が「昔伊丹村にあそひし」若い頃に詠んだ発句である。そのため其角句の剽窃と言われても仕方のない出来だが、懐旧の情から載せたものと思われる。

最後に、㊦典拠未詳の句は、

3 祭餅それか夜寒の粥はしら（秋・夜寒）

10 秋風に聲また青し笹のいほ（秋・秋風）

11 山を洗ふ雨に色なし秋の水（秋・秋の水）

13 わたくしの名にかくれたり初時雨（冬・初時雨）

義竹①うつそりと春さかぬ木のかへり花（冬・帰り花）

②何かふる夜半ともしらぬ寒さかな（冬・寒さ）

17 新なめを神のふらせる木かけかな（冬・新嘗）

22 暁や市の中にもかね氷る（冬・鐘氷る）

の八句である。

3 は、図太編『古来庵発句集 前集』（明和三年（一七六六）刊）に「霜にたつ柱を粥の情（こころ）かな」（39）とあるのを踏まえたかと思われたが、秋成と古来庵存義との関わりが不明なため、典拠と特定できなかった。発句は、「あすは新なめ奉る日なりとて」という前文から、新嘗祭でお供えた糯稻の穂が、新年十五日には粥に入れられる粥柱の餅となって食されているよ、という意であろう。

10 は、『夫木和歌抄』巻三十の後九条内大臣基家の歌「ささむすふ霜のいほりのかり枕たれとゐなののよるの月影」をあるいは踏まえているかと思われた。しかし、この歌に秋風は詠まれていない。また、秋風に笹が揺れるとする歌も発見することができなかった。したがって10は、実景に基づいて詠んだ句と考えられる。

11 は、特定の典拠はないが、『万葉集』巻十の二一七九番の歌「朝露ににほひそめたる秋山にしぐれな降りそあり渡るがね」（40）のように、秋の水とともに紅葉を詠む和歌の伝統を踏まえていると思われる。秋成の発句は、紅葉で色づく山の色を洗いおとすような

雨が降るが、紅葉は色褪せることなく、山を流れる秋の雨水も澄みきったままである、という意味で、紅葉の鮮やかさと秋水の透明なさまを詠んだ作と思われる。

13は、秋成の前に「わたくし雨」を詠んだ句は十数句あるが、特定の典拠となるような句は発見できなかった。『去年の枝折』本文には、「雨いやふりにふりて、こゝにのみとて私雨と云」あることから、北国の冬の初めの雨は、何日間も降り続くせいで、私雨と土地の言葉で呼び表され、冬の訪れを告げる初時雨という情趣ある言葉はその言葉の陰に隠れてしまった、という意味と思われる。

義竹①は、特定の典拠となるものは発見できなかった。擬態語を最初に持つてくる方法は、鬼貫の代表句「によつぽりと秋の空なる富士の山」(『大悟物狂』「元禄三年(一六九〇)刊」(41)に倣ったものか。しかし、鬼貫句ほどの強い印象を与える句ではない。ちなみに『日本国語大辞典』によると「帰り花」は、かえり咲きの花、再び時節外れに花をつけることを指す。

義竹②も、強い印象を受ける句ではない。何が降っているかわからない夜だが寒い、という意味であろう。

17は、秋成以前に「新嘗」を詠んだ句が殆ど発見できず、典拠を特定できなかった。『去

年の枝折』句の前に、丹波国真名井原の豊受大宮神社に参詣した折に、ご神木の木の実を拾う老神主にその理由を尋ねたところ、米が乏しいため朝夕の餅にすると答えたとある。食物を司る豊受大神の恩恵に与えますようにとの気持ちを込めて詠んだ句と思われる。

22の典拠は不明である。この句も含めて、「鐘氷る」という語を用いる句の大半は、冬の夜の寺で鐘の音を聞くさまを詠んでいるが、秋成は、寺だけではなく、現実の難波にもさえざえと響く鐘の音を詠み、それを合図に「禁足之旅」から戻り、俳諧的紀行文の締めとしたであろう。

おわりに

秋成の俳諧は、青年時における一炊庵紹簾門での俳交によって磨かれていったものである。ただ、秋成は、『列仙伝』〔宝暦十三年（一六七三）刊〕で、特定の俳諧集団に属しない「ひとり武者」であったと言われた。また、石川真弘氏が述べられたように、初期の秋成の俳諧は、宝暦年間に一般的であった「川柳的句体」をもち、特に人事句は「雑俳」的であった、それに加えて、秋成は、俳諧はあくまで遊芸である、という姿勢を崩さなかつ



た（42）。これらのことから、秋成の俳諧作品の評価は低かった。しかし、『去年の枝折』の俳諧作品を見ると、天象から人事まで幅広く詠んでいる上に、『万葉集』や勅撰和歌集の和歌から、芭蕉・其角の俳諧までを典拠とするなど、多彩で融通無碍な詠みぶりであるという印象を受ける。この作風こそが、秋成の中年期俳諧の魅力ではないであろうか。

注

- （17）『新編日本古典文学全集 7 万葉集②』（小学館）所収。なお、歌の解釈については、賀茂真淵著、狛諸成増補『万葉考 七く九』（天明五年（一七八五）刊、久松潜一監修『賀茂真淵全集』（続群書類従完成会、一九七九年）所収。）も参照した。
- （18）『歌枕名寄 第四冊（古典文庫三三八）』所収。
- （19）（17）に同じ。
- （20）『新編日本古典文学全集 8 万葉集③』（小学館）所収。
- （21）『夫木和歌抄（校註国歌大系 21）』（底本は寛文版本、国書刊行会、一九三〇年）所収。以下同じ。
- （22）（20）に同じ。

- (23) (17) に同じ。
- (24) (17) に同じ。
- (25) 『日本古典文学大系 9 竹取物語 伊勢物語 大和物語』(岩波書店) 所収。
- (26) 『新編日本古典文学全集 74 古今和歌集』(小学館) 所収。
- (27) 本論第二章第一節参照。
- (28) 『新日本古典文学大系 7 拾遺和歌集』(岩波書店) 所収。
- (29) 『夫木和歌抄(校註国歌大系 22)』(底本は寛文版本、国書刊行会、一九三〇年) 所収。
- (30) 『新日本古典文学大系 9 金葉和歌集 詞花和歌集』(岩波書店) 所収。
- (31) (25) に同じ。
- (32) 本論第二章第二節参照。
- (33) 『新編日本古典文学全集 43 新古今和歌集』(小学館) 所収。
- (34) 『古典俳文学大系 6 蕉門俳諧集 1』所収。
- (35) 『新編日本古典文学全集 70 松尾芭蕉集①』(小学館) 所収。
- (36) 『日本古典文学大系 30 方丈記 徒然草』所収。
- (37) 梁の昭明太子の『陶淵明伝』に見える。また、『蒙求』七十八「淵明菊を把り、真長月を望む」

で、「其の酒の熟するに逢い、頭上の葛巾を取り、酒を漉し畢わり、還た復た之を著く」（原漢文。

『鑑賞中国の古典15』所収。）とある他、陶淵明の詩『飲酒』其の二十には、「若し復た快かに飲

まずんば、空しく頭上の中になかん」（原漢文。『中国詩人選集』第4巻所収。）とある。

（38）『古典俳文学大系 8 蕉門名家句集 1』所収。

（39）『古典俳文学大系 11 享保俳諧集』所収。

（40）（20）に同じ。

（41）『新日本古典文学大系 71 元禄俳諧集』（岩波書店）所収。

（42）石川真弘氏「秋成と俳諧」（『上田秋成全集』第十一巻（中央公論社、一九九四年）月報 11）。

#### 第四節 『吉野山の詞』 発句考

はじめに

上田秋成の俳諧について、高田衛氏は、「隠逸者独自のナルシシズム」が見られ、「外部志向をもっていない」とし、「無腸論は作品論からひきだされはしない」と指摘されている（1）。このような評価が影響してか、同者の俳諧作品の研究は、国学や和文、和歌に比べると進んでいるとは言い難い。

その中でも、所謂『吉野山の詞』と呼ばれる句文作品については、『秋成遺文』（増補版）に翻刻と簡単な注があり、中央公論社刊の『上田秋成全集』で翻刻はなされているが、殆ど言及されることがなかった。その理由としては、過去の所蔵者が未詳であることが挙げられる。また、天明八年（一七八八）三月の飛鳥・吉野旅行を題材にしていると考えられるものの、同旅行の和文紀行文『岩橋の記』と違い制作時期が不明であるという事情もある。しかし、本作品は、観賞用に軸装された贈与品としての性格をもち、外部の存在である特定の読者を想定したものであることが明らかである。そこで、同篇中の文章および発

句三句を検討して、創作意識を探り、『吉野山の詞』の再評価を図る。また、秋成の晩年の自作自選句集である『俳調義論』中の、『吉野山の詞』の異文と比較し、秋成俳諧の特色について明らかにしたい。

注

(1) 高田衛「俳人無腸論——「月や霰の句をめぐって」——」、『上田秋成研究序説』（寧楽書房、一九六八年）所収。

# 一、書誌

**A** 天理図書館（上田秋成雑集一〇四）

自筆・掛軸一幅。（原寸）縦二九・〇糎×横四二・〇糎。（全体）縦四三・五糎×横一一〇糎。文末に「無」「腸」連印。

**B** 天理図書館（上田秋成雑集一二〇）

自筆・『鶉居帖』所収断簡一枚。縦二九・四糎×横四一・二糎。文末に「無」「腸」連印。

**C** 服部天神文庫

自筆・掛軸一幅。

**D** 天理図書館（〇九一―イ六九）

写本・『以文會筆記』卷二十七所収。（『以文會筆記』は縦二一・五糎×横一六・〇糎。）  
文末に「無腸」と墨書。

A 本は、自筆の掛軸で題簽、文章題ともがない。『天理図書館稀書目録』での仮題は「吉野山歌文」である。ただし、本発表では、『秋成遺文』（増補版）等に使用される一般的な仮題「吉野山の詞」を用いる。文章に句読点はない。全文が翻刻されている（2）。

B 本は、天理図書館所蔵『鶉居帖』中に貼付された自筆の断簡類の一である。これも題簽、文章題はなく、句読点はない。文末に「無」「腸」の印がある。抄録の形で翻刻されている（3）。

C 本は服部天神文庫所蔵本である。この軸については未だ閲覧していない。しかし、長島弘明氏の資料紹介では、「軸物」で「題」が「なし」、「正夢や」句の下に「無腸」と墨書があり、「呉春筆の瀟洒な桜の下絵の料紙に記され」たものと説明されている（4）。

D本は、文化八年から万延元年までに、以文会で披露された談話を筆記した写本『以文会筆記』に収録されている。以文会は、京都の文人や医師らが、月一回の会合で各自談話を発表する一種の親睦会であった（5）。前の三本と内容上の相違はない。

『吉野山の詞』の全体の特徴としては、最初の六行の文の行間に、散らし書きで後半の「あらいそかしの」から「里のわらはゝいふ也けり」までの文章を記している点である。これらのことから、『吉野山の詞』は、あらかじめ全体の紙幅と末尾の発句三句の配置とを考慮した「書」として、特定の人々に贈与することを想定して作られた作品であると思われる。（稿末資料【表2】として天理図書館蔵『吉野山の詞』の影印を付した。参照されたい。）

また、諸本の関係について、まず写本のD本は、内容、表記ともにB本と同一である。A本とB本は、表記に違いがあるが、使用されている語句は全く同じである。一方、C本は、長島氏の翻刻によると、語句がA・B本と数箇所異なるが、内容はほぼ同じである。このことから、他の秋成作品と比べて、諸本の間に内容の違いが見られないことがわかった。

注

(2) 『上田秋成全集』第十一卷(中央公論社、一九九四年)、藤井乙男『秋成遺文』(増補版)(修文館、一九二九年)補遺、岩橋小彌太「上田のひつじ」(『國學院雜誌』第三十三卷六号、一九二七年)に所収。

(3) 長島弘明氏「講演 断簡零墨の中の秋成——『鶉居帖』について——」(『ビブリア』第一三四号、二〇一〇年一〇月)所収。

(4) 長島弘明氏「秋成資料雜俎(二)——服部天神文庫・友山文庫資料他——」(『実践国文学』第二十四号、一九八三年一月)

(5) 三宅米吉氏『以文會筆記抄』(雄山閣、一九二九年)に拠る。

## 二、秋成の書の評価

秋成の筆による物は同時代の人々にどう評価されていたのか。飯倉洋一氏や長島弘明氏は、秋成の偽筆の多さや『胆大小心録』に載せた自己の手蹟に関する評判、短冊などの書の現存数が多いことなどから、秋成の筆は珍重されていたと指摘されている。そのことは、秋成在世当時の美術番付からもうかがえる。次頁の表は、文化四年初版の『名人古墨蹟時



『価録』にみる書の価格である。＊印は『平安人物志』（天明二年）版に掲載される人物である（6）。秋成の書の価格は五匁である。真淵の三百匁や宣長、芦庵といった各界の第一人者の価格とは格段に差があるが、同時代の草廬や忠原とはほぼ同水準の価格であることから、秋成の書には京の書家たちの作品と並ぶ美術的価値があつたといえる。

〔書家部〕 ＊九華		〔和歌部〕 真淵	
	四匁		三百匁
＊孟彪	六匁	芦菴	三十匁
＊草芦（草廬）	全	宣長	五十匁
＊忠原	四匁	嵩蹊	六匁
		春海	十五匁
		秋成	五匁

以上のことをふまえると、これまで等閑視されてきた『吉野山の詞』は、自己の内部で完結した作品ではなく、鑑賞物として京大坂の文人たちに享受されることを目的に制作された作品の一つとして、内容面からも改めて検証する必要があると考えられる。

注

(6) 『名人古墨蹟時価録』は、瀬木慎一氏『江戸・明治・大正・昭和の美術番付集成 書画の価格変遷二〇〇年』(里文出版、二〇〇〇年)に拠る。また『平安人物志』(天明二年(一七八二)壬寅七月刊)は、国際日本文化研究センター「平安人物志データベース」に拠る。

### 三、『吉野山の詞』冒頭部の文章

では、『吉野山の詞』冒頭部の文章について考察していく。はじめに『吉野山の詞』全文を掲載する。私に傍線を引いた部分について、注をつけていく。本文の底本はA天理大学図書館所蔵本である。

【本文】(底本はA天理大学図書館所蔵本。)

①吉野山の桜を、人まろの目に雲と見たまひしとは、②古今序中のまきれ事に、博識の翁達は申されたり。③雪とは友則の虚めぞ始なる。④又白雲とのみも、山籠りの法師か

偽ならぬは、後撰集に載てあらはなりけり。⑤かかる物たね植て、春の山となしけんは、千年こなたの事そなど、古ことさかしのいひ草、それともあれ、文人年々の山ふみに、長短の詠草、此峰と高きを争ふへし。⑥俳士も杖を曳ては、花をつくねて山もなしといひたる、詩歌の糟はくならずおほゆ。⑦是は／＼の歎望は、千古の絶章に人賞せるも、浜のまさこ路、豈尽さむやは。猶思ふてやむへからず。⑧花に年々の遅速有て、聞しにもあらぬといひ、おもふにまされりと云。⑨やかてに出ぬ山住の人にあひてこそ、奥山の谷の木かくれまでも、かたらせて聞へけれ。⑩ちもと谷、六田のつくり道、雲井、布ひき、如意りんの岨つたひ、きさ山のゝほりくたり、一とせに見はてんとは、あらいそかしの花物くるひやな。ことしのなこりは、あけのとしもあるそかし。⑪去年の葉の道かへて、⑫言葉のたねを植つけよとてこそ、めせ／＼桜苗めせと里のわらはゝいふけり。

⑬ 正夢や見し夜の花のよし野やま

⑭ 朝北よさくら心を吹とつる

⑮ みよしのや桜道しやは伊勢かけて

文章と発句の配置から、文章は発句の前書としての役割を果たしていると考えられる。

それでは、文章がもつ更なる意味について考察するため、注を付けながら読み進めて行く。

傍線部①「吉野山の桜を、人まろの目に雲と見たまひしとは」は、『古今和歌集』仮名序の「春の朝、吉野山の桜は、人麿が心には、雲かとのみなむ覚えける。」（7）という、人麿が桜を雲に見立てたという記述をふまえたものである。この部分に対し、傍線部②のように、秋成が「古今序中のまきれ事に、博識の翁達は申されたり。」と述べているのは、仮名序の古注には、吉野山の桜を雲かと思ったという柿本人麿の歌が挙げられず、代わりに「梅の花それとも見えずひさかたの天霧る雪の並べて降れば」という歌が挙げられている（8）ことが古来より問題とされてきたからである。

つづいて、傍線部③、④は、桜を雪や白雲など別のものに見たと詠む歌をふまえる。傍線部③「雪とは友則の虚めぞ始なる」は、『古今和歌集』巻第一春歌上に見える撰者紀友則の歌「み吉野の山べにさけるさくら花雪かとのみぞあやまたれける」（9）を指し、傍線部④「又白雲とのみも、山籠りの法師か偽ならぬは、後撰集に載てあらはなりけり」は、『後撰和歌集』の歌「み吉野の吉野の山の桜花白雲とのみ見えまがひつつ」（10）のことを指す。

また、傍線部⑤の「かかる物たね植て、春の山となしけんは」は、『新勅撰和歌集』巻第

一春歌上の藤原良経の歌「昔たれかゝる桜の花を植ゑて吉野を春の山となしけん」をふまえている。

このように、文章の前半部分は、吉野の桜を詠んだ古歌をもとに構成され、古今和歌集以来の「長短の詠草」の歴史の概略となっている。

続く傍線部⑥の文章は、『続山井』の友静句「み吉野は花をつくねて山もなし」(11)に拠る。秋成は、この句を「詩歌の糟はく」ではないとし、俳諧と和歌を同等のものとして評価している。傍線部⑦「是は／＼の歎望は」、は、有名な貞室の「是は／＼」の句をふまえるのは明らかである。その句を「千古の絶章に人賞せるも」というのは、あるいは三宅嘯山編『俳諧古選』(宝暦十三年(一七六三)刊)の句評のなかにある「古今ノ絶唱」(12)という言葉を意識したのではないか。嘯山と秋成の関係は不明であるが、同じ嘯山編『俳諧新選』(安永二年(一七七三)刊)には、漁焉の号で秋成の句が三句入集している(13)。

その次の傍線部⑧「花に年々の遅速有て」は、『和漢朗詠集』中の対句「東岸西岸之柳、遅速不<sub>レ</sub>同、南枝北枝之梅、開落已異。」をふまえるものと思われる(14)。有名な詩句であり、蕪村も「遅速」という語を引いて「二もとの梅に遅速を愛す哉」(『蕪村句集』(15))という句をものしている。

傍線部⑩は、許六編『本朝文選』吉野賦の、桜の名所を羅列する方法に酷似しているといえる（16）。

なお、傍線部⑨「やかてに出ぬ」は、『新古今和歌集』『西行法師家集』等に入集している西行の歌「吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらん」（17）を、その次の傍線部⑪「去年の栞の道かへて」も、「吉野山こぞのしほりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねん」（18）の歌をふまえる。秋成の西行への意識については、のちに触れる。

また、傍線部⑫「言葉のたねを植つけよとてこそ、めせく桜苗めせと里のわらはゝいふ也けり」というのは、現地の風習をふまえている。貝原益軒『和州巡覧記』に、「六田 名所なり。吉野のふもとにある町也。むつだ共、むだとも云。∴吉野山に上るには、六田より入るが本道なり。∴本道にも、わき道にも、童共櫻の木高二尺ばかりなるを多くうる。唐鋏をもちてうゝる。往来の人、是をかひて、うゑさせて通る」（19）と記されている。

以上、語句の解釈からもわかるように、『吉野山の詞』冒頭の文章は、古歌だけでなく漢詩や俳諧作品も用いて戯文体で記した作意性の高いものである。注目されるのは、秋成がこの文章を傍観者の視点から執筆しているという点である。「一とせに見はてんとは、あらいそかしの花物くるひやな」という文は、秋成の自嘲ではなく、吉野山に桜を觀賞しに

訪れ、風流を楽しもうとする当代の文人達に向けての、秋成一流の皮肉であると思われる。以上のことから、『吉野山の詞』の文章は、京大坂の文化圏に属する秋成周辺の人々に向けて執筆されたものであると考えられる。この事は、末尾の発句三句を考察する際にも念頭に置く必要があるであろう。

注

- (7) 『新日本古典文学大系 5 古今和歌集』(岩波書店) 所収。
- (8) (7) に同じ。
- (9) (7) に同じ。
- (10) 『和歌文学大系 6 新勅撰和歌集』(明治書院) 所収。
- (11) 『古典俳文学大系 2 貞門俳諧集 1』 所収。
- (12) 『俳諧文庫 18 俳諧珍本集』(博文館、一九〇〇年) 所収。
- (13) 『古典俳文学大系 13 中興俳諧集』 所収。
- (14) 『和歌文学大系 47 和漢朗詠集・新撰朗詠集』(明治書院) 所収。
- (15) 『蕪村全集 第3巻 句集・句稿・句会稿』(講談社、一九九二年) 所収。

(16) 『古典俳文学大系 10 蕉門俳論俳文集』所収。

(17) 『新日本古典文学大系 11 新古今和歌集』所収。

(18) (17) に同じ。

(19) 『貝原益軒全集 卷之七』(益軒全集刊行部、一九一一年) 所収。なお、本文中の旧字は現行のものに改めた。

#### 四、『吉野山の詞』末尾の発句

作品末尾にある発句三句については、すでに、石川真弘氏によって紹介されている(20)。しかし、石川氏は『俳調義論』といった秋成の別の句集に同じ発句があることを示しているのみで、特に作品解釈はなされていない。そこで、秋成作とされるこれらの発句について、検討を行う。

まず、傍線部⑬「正夢や見し夜の花のよし野やま」について考える。正夢という語に関して、秋成、『国歌大観』『私家集大成』や『類題和歌集』『夫木和歌抄』『古典俳文学大系』等でこの語の用例を調べたが、今回の発句と関連のありそうなものは見つけれなかった。



一見すると、吉野旅行で体験したことを述べただけの発句のように思える。しかし、同じ旅行を題材とする『岩橋の記』には、田原本で桜がすでに散ったことを聞く場面がある（21）。このため、秋成は、天明八年の吉野旅行では、「正夢や」という発句に現れる感慨を持ちえないことになる。

ところで、吉野山に憧れる人を詠んだ次のような秋成の和歌がある。その歌を見ると、違う見方ができる。

みよし野の花に心のいそがれて雨やめてともいはで行らむ

秋成の歌文集『藤簍冊子』巻二「文化三年（一八〇六）刊」の雑部（22）にあるこの歌には、「旅人雨を凌つゝつれだつ」という詞書がある。吉野の桜を早く見たいがために、雨のなか、先を急ごうとする旅人たちの姿を描いたものである。なお『藤簍冊子』巻四「文化四年（一八〇七）刊」所収の随筆「十雨言」の中にも、「みよしのゝ花にとて旅立人の、あまぎぬ打かづきて、散や過なんと、心あはたゞしくわけのぼるぞわりなき」という、先の掲出歌と同じ趣向の発言がある（23）。こちらは、吉野の花を目指す「旅立人」が、雨にもかかわらず山に分け入ることを「わりなき」と批評している。

両作品で注目されるのは、旅人を、劇中の登場人物のようにその心理をも含めて描いて

いることである。これは、『雨月物語』の「蛇性の姪」で、吉野の花を訪ねる人々を描いたり、「菊花の約」で加古川の街道を往来する旅人を描写したりしたときと同様の小説的、技巧的な方法といえる。したがって、「正夢や」の発句の場合も、吉野の花にあこがれて山に登る旅人の心情を述べたものと考えられるのである。

以上をふまえると、句の大意は、正夢であったのだな、旅をして登りたいとまで願うあまりに見た、花の吉野を訪れた夢というのは。春の夜の夢の中で見た吉野山と、実際に訪問して目にした現実の吉野山は全く同じ姿であるから、というものであろう。

続いて、二句目の傍線部⑭「朝北よさくら心を吹とつる」の検討にうつる。まず、「あさぎた」は『角川古語大辞典』にあるように朝吹く北風のことを言う。この語は『土佐日記』承平五年二月五日の条の「み船よりおほせたぶなり。あさきたのいでこぬさきに、綱手はやひけ」(24)から取られたものと考えられる。秋成と『土佐日記』で連想されるのは、秋成の『春雨物語』の一篇「海賊」である。この小説の冒頭では、都へ帰る貫之の船が、風に苦しめられなかなか進まないと描写する。

このことをふまえると、「あさぎたよ」の語には、「他者の行為を押しとどめる」という意味が付与されていると考えられる。秋成は、和歌や物語から引用した修辞に、多義性を

持たせるという、「正夢や」の句とは違ったかたちでの観念的な機智を見せているといえるのである。

一方「さくら心」というのは、古来より『古今和歌集』巻第二春歌下の歌「春風は花のあたりをよきて吹けこころづからやうつろふと見む」(25)等に見られるように、自ら散ろうとする心であった。秋成が述べる「桜心」も同じ意味である。しかし、秋成はそれを風が「ふきとづる」と続ける。朝の北風を、花を散らすのを早める邪魔なものを見ずに、桜の散りゆく心を吹きつけて変えてくれる存在として見て、知的な滑稽さとしたのである。「ふきとづる」と詠んだもう一つの理由は『古今和歌集』雑上の良峯宗貞の歌「あまつ風雲のかよひち吹きとぢよをとめのすがたしばしとゞめん」(26)が念頭にあったからと思われる。この歌が、『春雨物語』『天津乙女』の中にも宗貞のエピソードとして生かされているのは有名である。古歌をこの発句に重ね合わせることで、五節の舞をする姫たちが去るのを惜しむように、桜が散るのを惜しむ心情を表現したと考えられる。

以上の考察をふまえ、句意は、朝吹く北風の朝北よ、桜に吹き付けて桜の散ろうとする心を吹き閉じてほしい、桜の姿をもう少し眺めていたいから、というものと考えられる。

三句目の傍線部⑮「みよしのや桜道しやは伊勢かけて」については、「桜道しや」という

語は、辞書に見当たらず、『国歌大観』『私家集大成』や『類題和歌集』『夫木和歌抄』等の中から、関連する和歌を探したが、該当するものは見つからなかった。これは推測であるが、三年間吉野に滞在し、桜を雲とみる歌を多く詠んだ西行の姿を、当代の文人たちに重ねての秋成の造語ではないであろうか。

ただ、『角川古語大辞典』を見ると、「だうじや」は、「寺社や霊場に参詣する旅の修行者。信心のための回国者。巡礼」とあり、「連れ立って巡拝することが多い」とあり、『近世上方語辞典』（27）では、講を組んで社寺へ参拝する団体客、とある。さらに宣長の『玉勝間』（寛政十年（一七九八）刊）（28）巻八では、「伊勢にて、他国の参宮人を、道者（ダウシャ）といへり」とある。このことから、「桜道しゃ」という語には、西行のことのほかに、吉野に桜を見に行く僧形の旅行者を表していると考えられる。

一方「伊勢かけて」という語は『千載和歌集』の西行歌の詞書「高野の山を住みうかれてのち、伊勢の国二見浦の山寺に侍けるに」から、西行晩年の伊勢移住の事をふまえていると考えられる（29）。同時に、諸国を行脚し、桜が散ったら慌ただしく伊勢参拝に向かう物見遊山の旅人の姿も重ねていると思われる。

句の大意は、吉野の桜が散り終わったなあ。かつて吉野の桜を好んだ修行者である西行

法師は晩年に伊勢に移り住んだが、現代では、吉野の桜を愛するため都からやって来た遊山気分の巡礼者たちが、桜の季節が終わった途端に、伊勢神宮参拝のため一斉に駆けていく、というものである。この句も、多義的な語によって作品世界が構成されおり、前二句と創作方法が共通しているといえる。

注

(20) 「上田秋成発句集」『ビブリア』第一一五号、二〇〇一年五月) 所収。

(21) 『岩橋の記』は『秋成遺文』(国書刊行会) 所収のものに依った。なお、この異文として「いははし」が『上田秋成全集』第十一卷(中央公論社、一九九四年)に所収するが、僅かな出入りを除くと、全くの同内容である。

(22) 『上田秋成全集』第十卷(中央公論社、一九九一年) 所収。

(23) (21) に同じ。

(24) 『日本古典文学大系20 土左日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』(岩波書店) 所収。

(25) (7) に同じ。

(26) (7) に同じ。

(27) 前田勇編『近世上方語辞典』(東京堂出版、一九六四年)。

(28) 『日本思想史体系 40 本居宣長』所収。なお、適宜句読点を付した。

(29) 『新日本古典文学大系 10 千載和歌集』(岩波書店) 所収。

## 五、『俳調義論』中の異文との比較

前章で発句三句を検討したが、さらに秋成の俳諧の特色について考察するために、最後に『俳調義論』中に収録される『吉野山の詞』の異文との比較を行う。

『俳調義論』については、第三章第二節で取り上げたが、晩年の秋成の俳諧作品で、四季別に配列した発句一〇〇章による前半部と、芭蕉・宗因らの句の寸評等の後半部の二部構成となっている。『吉野山の詞』の異文が収録されているのは作品前半部である。この前半部は、中年期の秋成が蕪村周辺の俳人に宛てた書簡中にある発句が収録されていることから、秋成が、俳諧に關係する記憶を手がかりに、自作発句を心の赴くまま選り出した「自選句集」としての性質をもつといえる。つまり、『俳調義論』の前半部は、思い出を語るといった内的性質をもつと考えられる。

このことをふまえつつ、『吉野山の詞』本文と『俳調義論』に所収されている異文とを次に挙げ比較する。

・『吉野山の詞』〔天明八年（一七八八）三月以降成〕

①吉野山の桜を、人まろの目に雲と見たまひしとは、②古今序中のまきれ事に、博識の翁達は申されたり。③雪とは友則の虚めぞ始なる。④又白雲とのみも、山籠りの法師が偽ならぬは、後撰集に載てあらはなりけり。⑤かかる物たね植て、春の山となしけんは、千年こなたの事そなど、古ことさかしのいひ草、それともあれ、文人年々の山ふみに、長短の詠草、此峰と高きを争ふへし。⑥俳士も杖を曳ては、花をつくねて山もなしといひたる、詩歌の糟はくならずおほゆ。⑦是は／＼の歎望は、千古の絶章に人賞せるも、浜のまさこ路、豈尽さむやは。猶思ふてやむへからず。⑧花に年との遅速有て、聞しにもあらぬといひ、おもふにまされりと云。⑨やかてに出ぬ山住の人にあひてこそ、奥山の谷の木かくれまでも、かたらせて聞へけれ。⑩ちもと谷、六田のつくり道、雲井、布ひき、如意りんの唄つたひ、きさ山のゝほりくたり、一とせに見はてんとは、あらいそかしの花物くるひやな。ことしのなこりは、あけのとしもあ

るそかし。⑪去年の葉の道かへて、⑫言葉のたねを植つけよとてこそ、めせ／＼桜苗めせと里のわらはゝいふ也けり。

⑬ 正夢や見し夜の花のよし野やま

⑭ 朝北よさくら心を吹とつる

⑮ みよしのや桜道しやは伊勢かけて

・『俳調義論』所収異文〔文化六年（一八〇九）成〕

①よしの山の櫻を雲と見しとハ、②古今序中の紛れ者に古ごとしりのいハれし。③雲とハ友則のそら目ぞ始なる。⑥俳士も又箒を曳てハ花をつくねて山もなしとか、⑦是は／＼を古今の絶章とハいへりき。翁もむかし二たび迄登山せしが、⑩千もと谷・如意りの谷づたひ・雲居・布引・きさ山の登り下りを、一とせに見はてんことハ、あら心な老物狂ひやな、⑨やがて出じとよまれしこそ、谷のした陰・峯の白雲足疲さでイみけん。

⑫ されバこそさくら苗めせ／＼と里の兒どもハいふ也けれ。

⑬ 正夢や見し夜の花のよしの山

⑮ み吉のや桜道者ハ伊せかけて



風に晴て笠の軒から芳野雲

『俳調義論』の異文には、一重傍線部のような『吉野山の詞』本文との類似あるいは同一表現がある。ただ一方で、この異文には太字傍線部の「翁もむかし二たび迄登山せしが」のように異文にのみ見られる表現や、波線部の「一とせに見はてんことハ、あら心なの老物くるひやな」のように本文を一部改変した表現が見られる。これらの表現が示すのは、『俳調義論』所収の異文は、秋成自身の旅の記憶を回想した作品として書かれているということである。このことは、過去を追想する表現を使用していない軸物の『吉野山の詞』の文章と発句が、旅の経験を回想した紀行文的作品ではなく、吉野を訪問する文人の姿を描いた虚構作品であることを示しているといえる。

おわりに

『吉野山の詞』という作品は、秋成の筆のものを求める人々に応じて書かれたものと考えられる。そのような経緯から、文章は、吉野山の花を觀賞した秋成自身の体験を書き連

ねたものではなく、吉野の桜に憧れた風流人たちに向けて執筆されたものであった。作品中に見られる発句も、高田氏の述べるような、秋成の心の内で完結する性質のものではなく、吉野の花を訪ねる人々の心中を想像しながら詠まれたものであり、外的要素をもつものであった。

また、『吉野山の詞』と、『俳調義論』に収録されている同作品の異文とを比較した結果、文章量や発句に違いはあるものの、類似する表現が多く見受けられた。しかし、『俳調義論』中の文章と発句が、作者自身を主体とする一人称視点で執筆されたものであったのに対して、『吉野山の詞』の句文は、作者以外の人々を主体とする三人称視点で創作されていた。このことから、『吉野山の詞』は、秋成による吉野行の回想句文というよりも、吉野での詠作を願う俳人や文人の姿を滑稽に描いた戯句文として創作された作品であることがより明確となった。

このような趣向性を重視した秋成の創作態度は、秋成俳諧の本質や作品そのものへの評価と深く関わるものと思われる。だが、本節では、秋成の風流が外部に向かって発揮されることがあった、ということの確認に留めておく。本作品がさまざまな形態で現存しているのは、作品から窺えるこのような秋成独自の姿勢に、享受者が感興をそそられ、評価し

た結果と考えられるのである。

〔追記〕

『俳調義論』本文は天理図書館所蔵本『俳調義論』に拠る。なお適宜句読点を加え、濁点を付した。

## 第三章 秋成と俳諧

### 第一節『也哉抄』に見る秋成の文芸論

はじめに

『也哉抄』は、無腸（上田秋成）が切字の「や」「かな」を論じた俳諧語法書で、安永二年（一七七三）に成立した。『日本古典文学大辞典』では、竹岡正夫氏によって次のように説明されている。

也哉抄 やかなしょう 一冊。俳諧。無腸（上田秋成）著。安永三年（一七七四）一月夜半亭蕪村序。同年三月刻成り、天明七年（一七八七）刊。大阪増田源兵衛ら版。【内容】『統論』では、「てには」と切字を別物のごとく扱うのは誤りで、言語の活用即ち「てには」であり、五十音中、発語・体言以外の四十余音は口語・方言を問わずすべて「てには」の活用をなして不測の妙用をなすと説く。また、古来「や」「かな」の類を

切字の観点から種々の名目をつけて分類説明するが、本書では語義を中心に名目も略し、漢字の助字とも比べつつ、用例には口訳をかたわらに当てて説くと述べる。本文では、俳諧の切字を「や」「かな」に要約、「や」を詠嘆・願・疑・物を指す・数えるの辞に、「かな」を疑怪・詠嘆・願の辞に分類し、それぞれ古今の句例をあげて用法を説明する。「蕪村が「是不朽の書也」と云ったのは：過言とはいはれない。ここに俳諧の文法の論がはじめて正路に就いた」（山田孝雄）とする評価がある。友人富士谷成章（なりあきら）の「六運（りくうん）」説（『北辺七体七百首』）や口訳法、『脚結抄（あゆいしょう）』の所説の影響を受けているのは注目される。【翻刻】上田秋成全集2。日本俳書大系『中興俳話文集』。『切字の研究・資料編』（浅野信、昭和38年）。

『也哉抄』について、高田衛氏は「俳諧史に記憶される」書と位置づける（1）。また右の説明文中にあるように、山田氏は、俳諧文法をはじめて実証的に論じた書として評価されている（2）。近年では、同書に引用される富士谷成章の『あゆひ抄』等の検討をふまえて、切字論の体裁をとった「てにをは」論の書とも位置づけられている（3）。しかし、蕉門俳人である勝見二柳の本書に対する論難書『みなし蟹』（天明八年（一七八八）刊）について

は、本書への反応を窺い知る資料として翻刻紹介されている(4)ものの、北田紫水氏が二柳の俳諧理念を述べる際に取り上げたのみである(5)。二柳は、『也哉抄』を蕉門非難の書ととらえ、『みなし蟹』で同書における秋成の句解を「いたつらに筆墨のつゐへのみ」と痛烈に批判している。この問題は、『也哉抄』の位置づけや、秋成の文芸に対する姿勢に深く関わっていると考えられる。

そこで、『みなし蟹』における二柳の批判の理由を探り、『也哉抄』の内容を考察する。その際、秋成が「てにをは」論の書や連歌俳諧論の書をどう参照しているか、改めて検討する。最終的に、『也哉抄』に見られる秋成の文芸論を明らかにしたい。

#### 一、『也哉抄』の主旨

二柳の批判について検討する前に、『也哉抄』の主旨について確認していく。本書の主旨は「統論」にまとめられ、主に三つの要素によって成立している。

又其てにはの中にて。語、意、結、絶、の用をなすを切、字と云は。又後なる名、目也とする

べし（中略）。是には十八の切字と云が古<sub>レ</sub>来<sub>レ</sub>の名<sub>レ</sub>目也。然ども伝へ異<sub>レ</sub>説ありて。猶十八にかぎるまじく云人あり（中略）。先ツ切字の目は。手爾波大概抄やはじめ也けん。此書は定家卿の作のよしにいへど。さは偽<sub>レ</sub>物にて。最も信<sub>レ</sub>用しがたき俗<sub>レ</sub>書也。さて此表<sub>レ</sub>題をもても。切字即てにはなる事をさとるべし。此目ありてより。是はてには。こは切字と。こと物の如くいひわかつてよりして。別にてには切<sub>レ</sub>と云事を。口<sub>レ</sub>伝秘<sub>レ</sub>藏の事に云は僻事也（中略）。てにはと云も。言語の中なる活用の物を取り出てよべる俗目なれば。すべてはこと葉と云ぞ雅言なる。（6）

第一に、切字は独立した存在ではなく、語の切れ続きとして働く「てには」と同じものである、とする。秋成は「切字」という概念を「後なる名目」とし、後から作られたものと批判し、「切字即てにはなる事をさとるべし」と述べ、切字と「てには」は異なるものではないとしている。秋成は「此目ありてより。是はてには。こは切字と。こと物の如くいひわかつてよりして。別にてには切<sub>レ</sub>と云事を。口<sub>レ</sub>伝秘<sub>レ</sub>藏の事に云は僻事也」と述べ、和歌や俳諧における「切字」という考えが、秘伝などの神秘主義を生み出したことを批判している。さらに、「てには」と云も。言語の中なる活用の物を取り出てよべる俗目なれば。

すべてはこと葉と云ぞ雅言なる」と述べる。ここで秋成のいう「てには」というのは、現代では助詞のこのみを指すが、『也哉抄』では言葉同士を切り、つなぐ語のことを指す。「活用」というのは「働き」という意味である。切字だけではなく「てには」も、言語の中にある働きを殊更に取り出して立てた「俗目」であるとし、本来はその働きも全て含めて「こと葉」というのが正しいとしている。

秋成の「切字即てには」という考えは、「切字」は「語、意、結、絶の用をなす」という言葉からもうかがえる。一般的な切字の定義は、滝芳山著の俳諧作法書『俳諧暁山集』（元禄十三年（一七〇〇）刊）（7）に「切字と云物ハ其一首を云綴る所の語、絶するもの也。絶するとハ詞終ル義也。」（句読点は筆者）とあるように、「語、絶」する、すなわち言葉を一旦区切るというものであるが、秋成は語を「つなげる」という意味もあるとしている。その上で「切字」を「俗目」とし、あくまで「や」「かな」を「てには」として論じていく姿勢をとるのである。

第二に、「切や」「治定の哉」などの「名目」を「俗目」として廃し、語義を重視する。その際、漢文の助字と比較する、という姿勢を見せる。



一 俗「目」の切字の中に猶俗「解」ありて。くはしからんがため。かへりてことわりの疎かなるがあり。其条々

「や」にはへ切や一にまたるゝやへ口合のやへ腰のや（中略）

「かな」にはへ治定の哉一ニ落着のかなへ現在のかなへ浮たるかなへ沈む哉へかへる哉へやかなへこそといひてとぢむる哉へ誰何なとゝうたかひてとぢむる哉 是ら説得んとし  
て。かへりてまぎらはしく。且無「用」の弁「義」をなすもの也。仍て今は言「語」の義を専ら  
として。名「目」を約し。且漢の助「字」をも牽合せて解なすもの也。是「必」漢の助「字」のこゝ  
ろ。てにはに同じきと云にはあらず。たゞこゝろ得安からんための諺「解」のみ也。

秋成は、「切字」そのものだけではなく、その中で細分化された「切や」「治定のかな」のような名目も「俗目」として批判している。その上で、語の本義を重視し、漢文の助字と比較してそれを説明しようとするのである。

第三に、俳諧では、俗言や方言までもが使われ、作者の自然な「心」が表現される、「てには」もそれらの言葉に従って働く、よって、生半可に連歌論書を参照するべきではない、と述べる。

俳諧はことにいたりて後の世の言語にて。しかも雅俗の別なきのみにあらず。あやしの俚語。聞とりがたき方言までも。心のゆくまゝに打出るものなれば。てにはも又それ／＼なる主どりして。奴僕のはたらきをもなすべし。仍て連歌家の作例の外なる変格もあるべし。且さばかりの俚語方言も。おのづから言語をなすといふは。すこしく物心得たらんうへの遊びなれば也。たとひ物こゝろへぬ人也とも。おのが思ふ心ばへを打出なんに。彼寒暑をとふらひ。米塩をかたるほどの実よりいひつらねん言の。てにはのことわりたがふまじきを。なまなかに連歌家の抄書を読んでは。彼俗目になづめる意得たがへも稀々聞ゆる也。

秋成は、俳諧で使われる「あやしの俚語」といった俗言や「聞とりがたき方言」は、「心のゆくまゝに打出るもの」であるため、作者の自然な「心」を表現すると述べる。また「てには」もそれらの言葉に従って働くものであるため、ときには「連歌家の作例」からは外れる場合もある、と指摘する。その上で、どのような人々でも、日常生活で言葉を使うときに「てには」を間違えることはない、したがって、日常語を用いる俳諧では、

「なまなかに連「哥」家の抄「書」を読んでは。彼俗「目」になづめる意「得」たがへも稀々聞ゆる也」と述べ、中途半端に連歌論書を参照すると、名目にこだわるあまり、語の働きを間違うと主張するのである。

## 二、『也哉抄』の内容

前章で、『也哉抄』統論に示された主旨を確認したが、それでは、これらの主張について作品内でどのように論証されているのか見ていく。

『也哉抄』で和歌を引用して説明している部分は『あゆひ抄』・『詞の玉緒』の影響が見られると既に先行研究で指摘されている。

たとえば、『也哉抄』「や」の項の、

へ大原や小塩の山へ菅原や伏見の里といへる「や」は（中略）。これらを「や」とな  
がめたる也とことわりし人あり。さるべき事におぼゆ。又或人は。是を雑のやと云物  
にことわれし。何ともなき名「目」也。

という記述の二重傍線部は、富士谷成章著の『あゆひ抄』（安永二年（一七七三）六月序、安永七年（一七七八）刊。）巻一咏属「や」にある「さて五言に足らねば。異文字を入れずして。「や」と詠めて置けるなり。」をふまえている（8）。また、波線部は、本居宣長著の『詞の玉緒』四之巻「や」（安永八年（一七七九）序、天明五年（一七八五）刊。）の雑のやの項目に「ゝすがはら「や」伏見の里ゝ大原「や」をしほの山」の歌が掲げられていることをふまえている（9）。この例のほかにも、両書からはほとんどの和歌が引用されている。

一方、秋成は『也哉抄』執筆に際し参照した文献として、「統論」に、享保六年（一七二一）頃成立の連歌書『連歌提要』（10）や、元禄期成立の貞門の作法書『俳諧新式大成』『俳諧をだ巻綱目』『俳諧晧山集』の書名を挙げている。連歌発句は、このなかでは特に『連歌提要』と『俳諧晧山集』から引用されている。

それでは、『也哉抄』における連歌発句の引用の実態はいかなるものか。ここでは、作品中における和歌と連歌の出典と引用数について、次の二表にまとめた（11）。

【表1】

	あゆひ抄	詞の玉緒	合計
や	12	25	37
かな	8	4	12

【表2】

	句番号	也哉抄	作者	誹諧暁山集	連歌提要
や	25	民安く国も治まる時なれや		×	六7
	26	かくしても身のあるべきと思ひきや		×	六7
	27	忍びゆく袖は闇路もいとはめや		×	六7
	28	ちる花や嵐につれてまよふらん		×	六1
	29	秋風やかなしき物と聞わびて		×	六1
	30	おもふやと逢夜も人をうたがひて		×	六4
	31	涼しやと柳がくれのやすらひに		×	六4
	42	月や花夜見る色のふかみ艸		60	六3
	43	又や見ん老が世の花翌も見む		×	六3
	53	ほとゝぎすやは初雁のさよまくら	兼載	×	二13
	54	しくれやはひとつに染し春の山	紹巴	×	二13
	55	十かへりの松にもえやは梅の花	宗祇	×	二13
	56	藤のみや比はたそかれほとゝぎす	宗祇	×	二13
	58	月の秋花の春たつあしたかな	宗祇	×	二1
かな	16	橘の蚊にせゝられて寐ぬ夜哉	宗長	×	×
	19	山や雪木の葉吹こぬあらし哉		86	二1
	21	花さかり誰がおぼゆる日数かな	宗長	84	二17
	22	誰も身のゆくへは野辺の霞かな	紹巴	×	×
	23	誰が袖ぞうら山咲のにほひかな	宗祇	×	二17
	24	さく藤のうら葉は波の玉藻かな	宗砌	87	×
	25	闇からぬ月はかつらの木陰かな	親当	87	×
	26	袖にこそ契る花折る野分かな	宗祇	85	二25
	28	雲は雪月は氷と見ゆるかな		86	二1
	29	梅は花柳はまゆをひらくかな		86	二1
	38	いはほにも花さく世哉石の竹	宗祇	×	二1
	39	浮世かな月出てより小夜しぐれ	紹巴	×	二1
	40	をり得たる色哉水のあやめぐさ		×	二1
	41	花鳥も時なるかなや桜がり	宗砌	×	二1
	42	けふぞへにあまねくもあるか春の雨	宗碩	×	二1

【表2】

『也哉抄』連歌発句の出典と引用数

【表1】

『也哉抄』和歌の出典と引用数（出典不明の二首は除く。）

一見してわかるとおり、和歌の用例は『也哉抄』の「や」の項に集中している。一方、連歌の用例は、特に『誹諧晧山集』からの引用については「かな」の項に集中している。

各々の切字によって引用書が異なる理由を探るため、引用された内容についての『也哉抄』の項目ごとに見ていく。

まず、『也哉抄』「や」の項を見ると、詠嘆の「や」の呼称を紹介している箇所で、『あゆひ抄』『詞の玉緒』が援用されている。

一 「や」は咏歎の辞也。咏・歎とは。人情事物のそれ／＼に付て感ずるあまりに。打ながめていへる辞也。仍て是を<sup>ゑ</sup>ながむる「や」とも。<sup>ゑ</sup>なげきのやとも云べし。

最初の傍線部「<sup>ゑ</sup>ながむる「や」とも」は、『あゆひ抄』巻一の咏属「や」の、「おほよそ哥は咏をもとゝする故に。神楽の早歌などにも。哥毎に初めに「や」と咏めて歌へり」をふまえている。次の傍線部「<sup>ゑ</sup>なげきのやとも」は、『詞の玉緒』四之卷「や」の「歎息<sup>なげき</sup>のや」の説明をふまえている。

一方「かな」の項においては、『誹諧晩山集』を引用し批判している箇所が複数みられる。

へ浮たる哉と云はへ霞む哉へやどるかなへ濁る哉など。てにはよりつゞく詞也。或抄に。是をもくるしからぬがあり。又あしきがあり。但哥には其あしきと云もよみ入る事有。いかなればと云に。三十一字を上下にわちて。其詞をいひまはすによりてくるしからず。連俳の十七字には。いひまはす詞多からぬ故にあしき也といへり。さらばいひおほせたらんには。哥によむ詞を。何のにくむ事かあるべき。又或抄には。此格をかくすべからぬ物にいへり。

雲は雪月は氷と見ゆるかな

梅は花柳はまゆをひらくかな

此二句ともに言語とゞのひて聞ゆ。是を忌むは必竟其時の師家の私にて。不朽にたふべき教訓にあらずとするべし。

(中略)

へ沈むかなと云目なるは。同じくてにはよりつゞく「かな」也。

空かける鷹はむかひの鳥をがな

名月に旅たつ人は須磨へがな

是らはいかさま聞よからず。かく句は作らずとも。いかやうにもあるべき事也。さて浮くゝ沈むの目は例の私なる俗目也。

右の『也哉抄』の「浮たる哉」における傍線部の「或抄にゝ連俳の十七字には。いひまはす詞多からぬ故にあしき也といへり」という記述は、『誹諧曉山集』の五九番「五つの哉の事」中の項目「うきたる哉」の説明をほぼ元の形で引用しており、その上で「さらばいひおほせたらんには。哥によむ詞を。何のにくむ事かあるべき」と批判している。その次の傍線部の記述「又或抄には。此格をかたくすべからぬ物にいへり」および「雲は雪月は氷と見ゆるかな」と「梅は花柳はまゆをひらくかな」の二句は、『誹諧曉山集』八六番からの引用である。此二句について同書は「是等ハ前に云ゝうき哉の類にて哉の詮なき也」と「うき哉」を否定するための根拠として挙げているが、秋成はそれに対して「ともに言語とゝのひて聞ゆ。是を忌むは必<sup>一</sup>竟其時の師<sup>一</sup>家の私にて。不<sup>一</sup>朽につたふべき教<sup>一</sup>訓にあらずとしるべし。」と批難している。また、『誹諧曉山集』五九番の中では、「しづみ哉」の修辭的欠陥を示すために「空かける鷹はむかひの鳥をがな」と「名月に旅たつ人は須磨へがな」という二句を



挙げている。これに対して『也哉抄』では「是らはいかさ聞よからず。かく句は作らずとも。いかやうにもあるべき事也」と、わざわざ句を挙げるまでもないと述べている。最終的には、「さてゝ浮くゝ沈むの目は例の私なる俗目也」と結論づけている。

このように、「や」と「かな」では引用する文献がそれぞれ異なっているのみならず、引用した内容の扱いにも違いがある。その理由は、「や」と「かな」の名目の性質に違いがあるためと考えられる。「や」の名目は、語義よりも「や」を置く位置を重視して立てられている。たとえば「又や見む」のように上五の三つめにおく「口合いのや」や、「散る花や」のように上五の末におく「切るや」などである。よって、「あゆひ抄」「詞の玉緒」の精緻な語学論を引用することで名目は否定できる。一方「かな」の名目には、「治定のかな」のように意味によって規定されるものや、「浮きたる哉」「沈む哉」のように、前の語との関係によって規定されるものがある。したがって、秋成はこれらの名目の意義を説明した『誹諧曉山集』を引用し批判することによって、名目を否定しようとしたと考えられるのである。

また、『誹諧曉山集』に対しての秋成の批判には、別の側面もある。同書は、浅野信氏の指摘の通り「おそらく切字の説明書としても作法書としても、もっともくわしくそしてもっとも整頓された、貞門系統の集大成された良識書ともいい得べきもの」（12）という特徴を

もつ。つまり、俳人たちにとって権威ある式目の概説書であったといえる。よって、秋成の批判は、切字の名目の否定という意味をもつと同時に、俳諧の権威への挑戦という側面も持つのである。

### 三、『みなし蟹』の『也哉抄』批判

前章では、『也哉抄』中の批判の持つ意味について説明した。それでは、同時代の蕉門俳人である勝見二柳はどう反駁したのか。『也哉抄』に対する論駁書である『みなし蟹』を通じて見ていく。

『みなし蟹』の書誌を改めて確認すると、半紙本一冊の写本で、白岳道人の名で勝見二柳が執筆し、天明八年（一七八八）七月に刊行された書である。明治大学図書館に所蔵され、下巻のみが現存している（13）。

勝見二柳による秋成批判の特徴は、『也哉抄』の蕉門俳人の句解に現れている。

夜あるきを母寐さりける水鶏哉

其角

此句は「かな」の義はたがはねど。自、他のことわりたがへれば。ついでに云也。是夜あるきする子を。母のなげきて寐ざりけるといひ立て。水鶏のたゞくをは。野らものがかへりしかと思ふとの意なるべし。是へ水鶏哉とはかりにては。さる長々しき心はことほりたらず。くひなは思ひ子の帰りしにたとへ。寐ざるは母の慈愛とわかれて、自、他の差別なき也。大かたてにはのことほりあはぬと云は。初、学のしわざなるを。是らは達、人の巧みに過たるにて。わづか十七字の間に。ふさはぬ長きころはへを打出るがあやまれる也。哥にもあれ。発、句にもあれ、それがいひおほすへきほど／＼の事を打出んに、言語をなさん事はあらしものを、たとへゞ千里を一日にゆかん竜、馬と云も。数万、斤を負せなば一歩もすゝむべからず（以下略）。

「かな」の項の其角の句について、秋成は、十七字の中に「長々しき心」「長き心はえ」を含めようとするのは無理があるとしている。また、「はは寐ざりける」は母、「くいな哉」は子である自分と、中七と下五で主体が違っているにもかかわらず、作者がそれを問題としないことを批判している。その上で、「てにはのことほりあはぬ」ことは「達人の巧み」さによるものでも認めず、語法に従い表現すべきとしている。

これに対して、二柳は、『みなし蟹』において次のように反論している。長文となるが、当該部分を引用する。

此句解、又奇々怪々たり。をのか心のいたらさるより、却て古人をあやまてりとするや。此言かことくにては、只十七字のほ句を、夜あるきと母と水鶏と、五七五はなれ／＼にきく法やはある。其みつかからこしらへたる非義をのへて、自他の差別なき也なとゝは、言語道断也（中略）我今為に此句を説かん。耳の穴をさらえて聞へし。此句は、自愧と云二字を題して、全く角かみつからの上をいへり。さるは、かの云托物比興也。是即水鶏は我身を比していへり。此句の体也。さて、夜あるきも母寐さりけるも、共に句作りにして、其用也。されは、我夜あるきによりて夜ことに戸を敲ケは、其度／＼に母の開に出玉ふは、其時に臨て戸をたゝく音に眼さめて、起出給ふならんと思ひしに、今心付て、よく／＼かうかへみれは、さにはあらて、我夜あるきの行先キを案しつゝ、宵々ことにゐもねすして待玉ふ也。されはこそ、扉をたゝく程もなくて開玉ふにそと也。母寐さりけると云詞の巧ミにて、幾夜／＼も母の寐さりける事をいひて、くるなは悔のひゝきをとれる也。是子として親の慈愛を思ひしれるの実情を

尽せり。是を俳諧の諷諫といひて、志ある人は、此句を聞ては、ひそかに涙をおとす（中略）。さるを、をのれか心の不実なるより、さる諷諫にもあつからさるのみか、ふさはぬ長／＼しき事の巧みに過たり、ほ句に云とられすは、三十一言の哥あり、狂哥など、今日いやしくも俳諧の詞宗とも呼るゝもの、こはほ句には云かたしとて、哥によみ、狂哥につくるのうろたへものあらんや。かつ、千里の竜馬も、荷か過れは一歩もすゝますなど、笑ふへくして、かつにくむへし（中略）。其角はことに俳中の竜象也、かはかりの荷は物の数かは。猶此上に百倍すとも、豈何そおもとせん。甲に似せて穴を堀るとやらんみなし蟹こときの小き心をもて、いかんそ真竜の志をはからんや（中略）。是また／＼我蕉門の中にも、其角、嵐雪、去来等あるをきゝしりて、かくのこといへるは、ほのかに蕉門をそしらんの微意ならずや。是予か怒りを引所以也。

二柳は「自愧」という前書を挙げ、「夜あるきを」句は、其角が自らの身の上に恥じ入って作った句であると述べる。その上で、其角自身を指す「水鶏」は句の中心である「体」に当たり、その体を支える「用」に当たる語が「夜あるき」「母寐さりける」と述

べる。

しかしながら、これらの解釈は、文法理論に基づいたものではなく、「夜あるきを」の句を援護するための主観的な分類に過ぎない。

また、二柳は、この句が「親の慈愛」を思い知るといふ実の情を表しており「諷諫」の役割をもつとしているが、これも倫理的側面を強調するのみの主張である。

さらに、同者は、其角をはじめ蕉門俳人の句に対する秋成の批判は、蕉門中傷の意志の現れであると解し、蕉門を擁護するために『みなし蟹』を執筆したとする。

以上のことから、『みなし蟹』の主張は、秋成の述べる「てには」理論に対し、それを上回る語法論を提出しておらず、直接の反論ともなりえていないとわかる。

ただ、二柳の論駁には、蕉門非難に対する嫌悪の他に、別の側面があったと考えられる。

それは、専門俳人ではないにもかかわらず、俳諧の伝統や權威に刃向かう秋成の態度に対する反発心である。『みなし蟹』では、「かな」について、秋成のように「〔か〕に「な」を添るの何のかのと、事むつかしくいへるは、人を導くの法にあらず」と批判し、難解な語法は、初心者 of 俳諧指導において適切ではないとする。また、「かな」の意味とされる治定や落着は、字義はともかく、古来より人々に馴染んだものであるので、「神国の妙義」

すなわち優れた意味であるとし、今さら改めて何の得かあるのか、と伝統を変えることを拒絶している。

これらの批判は、多くの門人を抱え、指導する宗匠の立場からすれば当然の反応であるといえる。

#### 四、秋成の文芸論

では、権威や伝統に反抗した結果、「無腸」という俳号によって、器量の小さい「みなし蟹」のようだという非難まで浴びた秋成が主張したかったことは何なのか。秋成の『也哉抄』に見られる文芸論の性質をふまえながら考察していく。

秋成は、表現する内容の量に応じて文芸様式を選択すべきとの主張を展開している。『也哉抄』「かな」の項では、

言語の神妙。てにはの活用も。凡其文字の数に負すべき限りあるへし。十七字に巧みえぬは。三十一言の哥有。狂歌有。猶いひたらずば長哥あり。文辞あり。其ほど

／＼をはかりて打出べきもの也けり。

と述べている。つまり、言語での表現に際し、自由にその様式を選択することを望んでいたのである。「名目」に対する批判も、「名目」という存在が文芸様式の束縛につながると認識していたためと考えられる。

特定の文芸様式に拘ることへの批判は、『也哉抄』以外にも見られる。『俳調義論』（秋成著、文化六年（一八〇九）成立）では、次のように述べている。

そのかミ人々ハれん哥狂歌はいかい、いづれの舟にても御よせ候へと、其代の人ハおしへたに、桃青にいたりて吞するなしの一道と成て、俳かいだによくせば天下政教の道も明らむべしとハさりとてハく伊賀人もひが言ハ云也けり、この毒流れてハ百年来風流の人なし、我もわかき時にこの皿ねぶりてぞ云た事よ。

秋成は、一つの道を極めることを至高とする風潮が、文芸様式を選択する自由を制限することを恐れていた。実際、『俳調義論』中の秋成の俳諧には、平易な言語表現を好み、



雅語と俗語といった異質な言葉の取り合わせで滑稽さを強調しているという特徴がある（14）。つまり、秋成は表現内容に応じて文芸様式を使い分けるべきであると考え、それを実践しているのである。

では、秋成がさまざまな文芸様式を駆使して表現したかったのは如何なることか。『也哉抄』統論には、次のような記述が見られる。

一 五十の音の中にて。発語となり。体語となりて。活用をなさざるは。わづかに五七音に過ず。四十余の音は。こと／＼てにをはの活用をなして。打出る心の主に従ひ。言語は是が臣妾となりて。下につゞき。上に倒り。或は句を結め。事をかさね。或は情を余して。不側の妙用をなすもの也けり。

秋成は、文芸作品は「心」を主体とし「言語」を道具にして表現されるべきものであると主張している。様々な文芸様式を使用するのも、「心」を余すところなく表現したかったからであつた。

ただし、秋成は、自由に「心」を表現するためには、新奇な言葉遣いをすればよいとし

たものではなかった。「言語」に付属する権威や前例を否定するにしても、語の本来の意味を検証し理解するという手続きを踏む必要があると考えていた。『也哉抄』〔かな〕の項で、秋成は、語の「本義」を守ることの重要性を説いている。

一 近代の歌に。〔かや〕といひて〔かな〕に通はせてよめるがあり。さらば〔や〕は打ながめたる辞としてよめる成べし。本義にはかなはぬ詞ならん歟 連俳などの文字すくなきには。聞まがひすべき事也。必用うべからずこそ 又是は論にも足ぬ事なれども。言のついでに言也。近<sub>レ</sub>来いさゝかも物心得ぬ俳士達の。十七字の末を。へ<sub>レ</sub>鶯やへ<sub>レ</sub>梅咲やなど結むるが稀々見ゆ。連<sub>レ</sub>哥<sub>レ</sub>家にかけても思はざる句づくり也。俳諧にも古人の作例あることなし。もしたま／＼に。近江のやと末におきて。鏡山をいはねど聞えさするやうの作意なる活用などは自然の事なれば赦すべき歟。それとても巧<sub>レ</sub>者のうへの事にて。しかもしひては好まざる事也かし。

この、語の「本義」を前提として「心」を表現すべきとする秋成の文芸論は、当時の俳壇において新鮮なものであったことは、『也哉抄』の蕪村序からもうかがえる。

爰に我友無腸居士なるものあり（中略）。ふかくやまとの国ふりにふけり、人しらぬ古き書をさへさかし見すといふことなし（中略）。おのれかこゝろの適ところに随ひて、よき事をよしとす。まことに奇異のくせもの也。此ころ一本を著し、其門生二三子、余にしめす。ゝなはち也哉抄となつく。其説数条、おの／＼古き書によらさるなく、たま／＼さとしやすからんことをおもひて、みつからの論を加ふといへとも、つゆも古人のゝりにもとらず、憶説といふへからず。余つら／＼とよみゝて、たゝむきを扼けていふ、是不朽の書也、二三子はやく木に上して同志の人の聞につたへよ。二三子諾す（以下略）。

蕪村は、秋成が「古き書」によりながら、「古人ののり」に勝るとも劣らない持論を展開していると評価し、『也哉抄』を「不朽の書」としている。俳諧史において蕉風復興の中心的存在とされる蕪村が、蕉門批判の書とされた『也哉抄』を激賞するのは一見不可解にみえる。しかし、蕪村は、『也哉抄』序を執筆した当時、京俳壇の蝶夢を中心とする蕉門と、都市系蕉門の改革派として対立していた。蝶夢は、私意を捨て実景を詠む平明な作風を尊

んでいた（15）。蝶夢の俳風に反発していた蕪村にとって、「心」を重要視し、語法の裏付けがある秋成の論は心強く感じられたと考えられるのである。

おわりに

『也哉抄』は、他の俳論書や俳諧語法書とは違い、「や」「かな」を切字ではなく、語の切れ続きとして働く「てには」とする立場から論じていた。よって、二柳が『也哉抄』の論難書である『みなし蟹』を刊行したのは、単に蕉門俳諧の正当性を主張するためだけではなく、俳諧の伝統を守るためであつたと考えられる。しかし、『みなし蟹』では秋成の「てには」論の代替となる文法理論が掲げられておらず、真の反論と成りえなかつた。

秋成は、『也哉抄』の「てには」論を通じて、語の「本義」を最重要視し己の「心」を表現する「言語」を手に入れようとした。その上で、その「言語」を用いて、「心」を様々な文芸様式で表すことを理想とした。このような新しい文芸表現を目指す姿勢が、蕪村が序に書く「不朽の書」という評価につながったのであろう。

注

- (1) 同氏「俳人無腸論―「月や霰の句をめぐって」―」(『上田秋成研究序説』(寧楽書房、一九六八年)〕。
- (2) 同氏『俳諧文法概論』(宝文館、一九五六年)。
- (3) 金田房子氏「『也哉抄』論述の性格」(『国語国文』第六七三号、一九九〇年十月)。
- (4) 『上田秋成全集』第六卷(中央公論社、一九九一年)所収。
- (5) 同氏『俳僧蝶夢』(大蔵出版、一九四八年)第一章第五節「二柳と其俳諧理念」参照。
- (6) 『也哉抄』の本文は、末吉家蔵本を底本とする『上田秋成全集』第六卷(中央公論社、一九九一年)の翻刻を用いて、柿衛文庫蔵本のマイクロフィルムを適宜参照した。なお、『也哉抄』諸本では「や」「かな」などの切字の殆どを、やのように四角で囲んで記すが、翻刻に際しては、「」の中に入れて表記した。
- (7) 天理大学図書館綿屋文庫蔵本のマイクロフィルムを参照。なお、浅田信『切字の研究・資料編』(おうふう、一九六三年)に、切字論の翻刻がある。
- (8) 竹岡正夫氏『富士谷成章全集 上巻』(風間書房、一九六一年)所収。

- (9) 『本居宣長全集』第五卷（ちくま書房、一九七〇年）所収。
- (10) 早稲田大学図書館伊地知鐵男文庫蔵。なお、本文は同図書館の古典籍データベースを参照した。
- (11) 二表をまとめる際には、金田房子氏の前掲論考を参照した。
- (12) 同氏『切字の研究』（おうふう、一九六二年）。
- (13) 『みなし蟹』の書誌と本文は『上田秋成全集』第六巻に依拠した。
- (14) 本章第二節「『俳調義論』に見る俳諧観」六 秋成の俳諧観」参照。
- (15) 田中道雄氏「蕉風中興運動の二潮流―京俳壇を中心に―」（同氏『蕉風復興運動と蕪村』（岩波書店、二〇

〇〇年）」。

## 第二節 『俳調義論』に見る俳諧観

はじめに

本節の目的は、上田秋成が没年の文化六年（一八〇九）に編集した『俳調義論』をもとに、秋成が自身の俳諧観をどう表明したかを明らかにすることである。

『俳調義論』は、江戸の俳人鈴木道彦（一七五七～一八一九）が、江戸下りした京の絵師渡辺南岳を通じ、秋成の句を所望したのに応じて編纂されたものである。四季別に掲げた自作自選の発句一〇〇章と短文、芭蕉・宗因句の短評、それぞれ発句一章を含む亡妻追悼文と歌舞伎役者藤川平四郎の思い出の文の二文、追加の句四章を収録する。

この作品についての先行研究は、秋成の「そのかミ人々ハれん哥狂歌はいかい、いづれの舟にても御よせ候へと、其代の人ハおしへたに、桃青にいたりて吞しるなしの一道と成て、俳かいだによくせバ天下政教の道も明らむべしとハさりとてハく、伊賀人もひが言ハ云也けり」という芭蕉への酷評と受け取れる言辞のみを取り上げ、それをふまえて秋成の俳諧観を論じるものが殆どである。また、作品内容については、藤井乙男（紫影）氏が翻刻を行っ

た際、解題の中で寸評の一部について触れている（1）が、その他は、作品内発句数句の印象批評がある程度である。

しかし、今回の論考では、『俳調義論』の内容とともに、その成立状況を再検討する。まず『俳調義論』の書誌と、秋成の発句を求めた鈴木道彦の人物像とを確認した上で、『俳調義論』がどう享受されたか、柿衛文庫所蔵の秋成句自筆短冊との比較をもとに考察する。その上で、『俳調義論』後半の芭蕉・宗因句の寸評に注目し、上方俳壇の宗因顕彰に対する批判意識を確認し、秋成の宗因観の様相を探る。また、同じく後半に収められる芭蕉紀行文中の発句および宗因発句の寸評を検討し、秋成の俳諧観を解明したいと思う。

## 一、書誌

【A】天理図書館綿屋文庫所蔵本（半紙本一冊）

【表紙】縦二三・四糎×横一六・六糎。濃鮮黄色無地。

【題簽】無し。

【内題】「俳調義論」



【書写者】得閑齋山田繁雅写。嵐桂舎沙月転写。

【行数・丁数】本文十行。序十行。跋六行。十六丁。丁付なし。

【奥書】右 俳調義論ハ無腸隠士の俳にして

繁雅子の寫置れしを其儘かいつけ侍る

時ハ文化八の未春やよひはじめつかた成けらし

### 嵐桂舎沙月書

墨付十六丁

得閑齋山田繁雅（寛延元年（一七四八）～文化十年（一八一三））は『国書人名辞典』（岩波書店、一九九三年）によると、京の鈍永門の狂歌師で、撰集の狂歌集は九種ある。嵐桂舎沙月は未詳。ただ、井田太郎氏が紹介された（2）酒井抱一の挿絵と発句とを収めた蘭室一周忌追善集の曲笠庵（国枝春来）編『天の川』（寛政九年刊）の、沙月による文化八年書写本（天理図書館綿屋文庫所蔵）が残る。

【B】関西大学所蔵本（半紙本一冊）

【表紙】縦二三・二糎×横一六・四糎。萌黄色格子文様。

【題簽】表紙左「無腸翁俳調義論」。墨書。四周子持枠。後補。縦十六・一糎×横三・九糎。

同右肩「夜<sup>一</sup>六十七<sup>卷</sup>」。墨書。無辺。後補。縦五・一糎×横二・一糎。

【内題】「俳調義論」

【書写者】百田沙月転写。

【行数・丁数】本文十行。序十行。跋六行。十六丁。丁付なし。

【奥書】右口俳調義論ハ無腸隠士の俳にして

繁雅子の寫置れしを其儘かいつけ侍る

時は

嵐桂舎沙月書

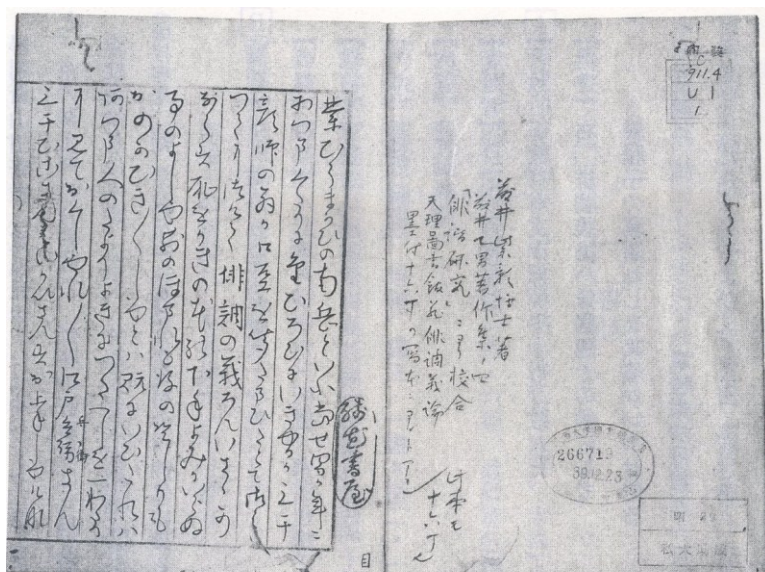
文化八未春やよひ 百田 沙月聿

はじめつかた成けらし

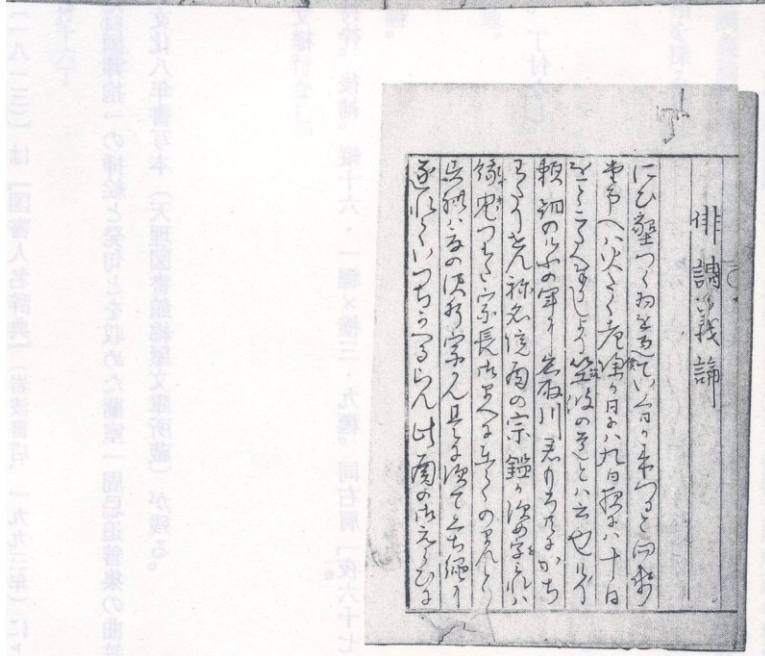
【印記】「残花書屋」。

【図版 1】

〔見返し・一丁表〕



〔二丁裏〕



B本は一九六四年に関西大学に収蔵されたもので、一丁表から四丁裏の本文の一部、および十六丁裏の奥書には、朱字での校合がある。これについては見返しに「藤井紫影博士著／藤井乙男著作集ノ四／「俳諧研究」ニヨリ校合／天理図書館蔵俳調義論／墨付十六丁の寫本ニヨルトアリ／此本も十六丁」とある（図版1参照）。この記述から、『藤井乙男著作集4』所収の藤井氏前掲論文中のA本（天理図書館綿屋文庫所蔵本）翻刻に拠る校合とわかる。校合者の詳細は不明である。B本奥書の翻刻では、朱字の校合を私に太字ゴシック体で示した。表紙には、A本と違って題簽が二つある。表紙右肩に付された方は、所蔵者であったと印記から判明している詩人・評論家の戸田残花（一八五五―一九二四）による整理番号か。表紙左の題名も、筆跡から同者によると思われる。

この本の内容や本文の字体、匡郭の体裁自体は、A本とほぼ同じである。ただ、両本を対校した結果、B本の十二丁裏一行目で、A本にあった本文の一部を書写者が書き落とし、後から書き足すなどの、本文表記についての違いが、少数であるが見られた。加えて、奥書で書写者の名は、A本では「嵐桂舎沙月」、B本では「百田沙月」となっている。同者が文化八年に書写した先述の『天の川』では、奥書の署名は「嵐桂舎沙月」となっている。

以上の両本の対校の結果や署名をふまえて、書写順を、私にA本↓B本とした。ただし原本

からの書写状況は、秋成自筆本が未発見であるため明らかでない。そのため、本稿の『俳調義論』の本文はA本に基づくこととした。その際藤井氏前掲論文の翻刻も参照した。

注

- (1) 藤井乙男氏「上田秋成の俳調義論」(『藤井乙男著作集4』(秋田屋、一九四八年)所収)。
- (2) 井田太郎氏「抱一の江戸の表象」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四十六号(第三分冊)、二〇〇一年二月)。

## 二、道彦の意図

さて、秋成が最晩年に『俳調義論』を編集したのは、前述のとおり鈴木道彦が秋成の発句を求め、それに応えたことによるものである。では、道彦はなぜ秋成の句を欲したのか。

『上田秋成 没後二百年記念 図録』(日本近世文学会「特別展観 没後二百年記念 上田秋成」実行委員会編、二〇一〇年)内における『俳調義論』解説で稲田篤信氏は、本書の序文の内容を受けて「秋成は江戸でも知られた俳人であった」と述べている。しかし、

当時の秋成は、特定の俳壇に属さず、刊本の俳書へ句を寄せた形跡もない。よって、秋成の道彦との交流は、あくまで南岳を介したものであると考えざるを得ないのである。

また、道彦の経歴からも、秋成の発句を求めた理由が見いだせない。道彦は天明八年（一七八八）、中興俳諧運動の中心人物の一人である加舎白雄（一七三八～一七九一）によつて品川（海晏寺）で行われた芭蕉百回忌繰上げ法要に、門人として参列している（3）。また、俳論書『奇談夢の棧』（天保四年（一八三三）刊）では、道彦の霊が、門人の護物を「是よりは前非を悔て、まさに正風の正路に趣かん」と悔悟させるなど、天保期には蕉風の正當な継承者と捉えられていた（4）。一方の秋成は、青年時には玄人的な俳諧活動を行つてゐるものの、宗匠にはならなかった。俳風は、上方俳壇に属していたこともあつて、宗因風に親炙していた。

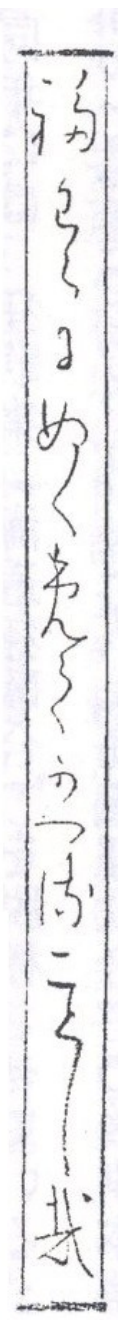
このように両者の俳諧活動は対照的であり、道彦が、秋成の発句そのものを積極的に鑑賞しよう、と思つたとは凡そ考えにくい。

そこで、道彦の目的を考察するため、『俳調義論』中の発句三章と、それと同じ発句が書かれた秋成自筆短冊の図版を示し、両書を比較して秋成の筆跡の特徴を確認する。

なお、『俳調義論』の図版は綿屋文庫所蔵本を使用する。

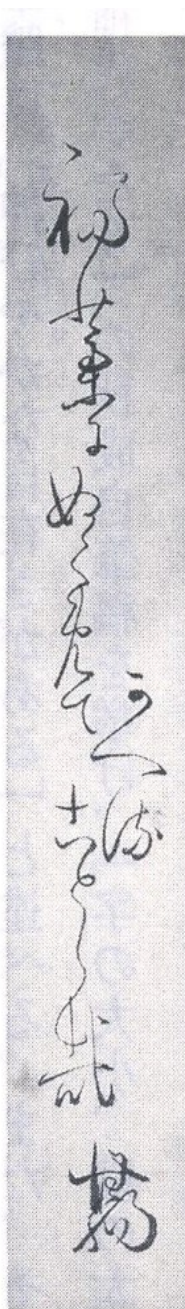
【図版2】『俳調義論』中の発句三章と秋成自筆発句短冊との比較

・「福わらにぬくめてかへることし哉」(『俳調義論』二丁表)



・「福藁にぬくめてかへることし哉」(『柿衛文庫目録 短冊篇』)

・「初藁にぬくめてかへることし哉」(石川真弘氏「上田秋成発句集」翻刻(『ビブリア』第一一五号、二〇〇一年五月))

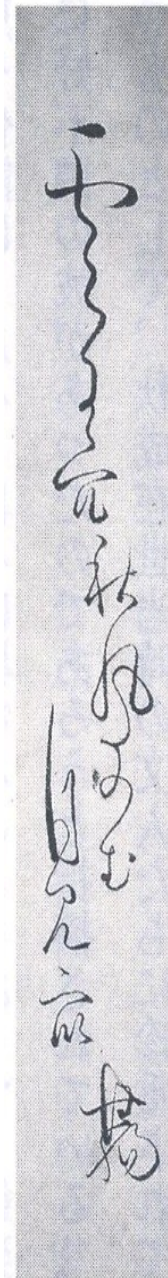


・「雲かく□あき風たのむ月見衆」(『俳調義論』七丁裏)





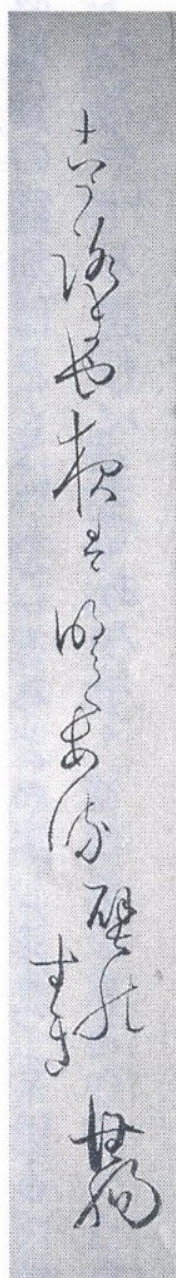
・「雲に穴秋風たのむ月見衆」（『柿衛文庫目録 短冊篇』・石川氏前掲論文翻刻）



・「こうろきや夜ハ明てある壁のすき」（『俳調義論』八丁表）



・「こゝろよや夜は明てある壁のすき」（『柿衛文庫目録 短冊篇』・石川氏前掲論文翻刻）



まず、「福わらに」の句である。『俳調義論』の傍線部の「福」の字に比べ、柿衛文庫所蔵の自筆短冊の「福」の字は右上の部分がほぼ消えており、一見して「福」とは読みにくい。そのことにより『柿衛文庫目録』の翻刻は「福」、石川氏の翻刻は「初」となっている。



ただ、「初藁」という言葉は辞書にはなく、傍線部は「福藁」と読むべきである。

次に、「雲かく□」の句であるが、『俳調義論』傍線部の字間には繋がりがなく、翻刻が困難であった。一方、自筆短冊は、全体的に字間に繋がりがあるため、傍線部は「雲に穴」と読める。この句の場合は、下につづく言葉をふまえて、「雲に穴」と読むのが妥当である。

最後の「こうろきや」の句は、「雲かく□」の時とは逆に、傍線部の字間に繋がりがあることで、かえって自筆短冊の方が「こうろきや」と読みにくくなっている。それにより『柿衛文庫目録』、石川氏前掲論文の当該部分の翻刻はともに「こうろよや」となっている。

だが、この句は「こうろよや」では意味が通じず、「こうろきや」と読むべきであろう。

このように、転写本である『俳調義論』の字と、秋成自筆短冊の字との比較からうかげることは、秋成の字は、その享受者にとってしばしば難解で、書写しにくいということである。それは、現代においても秋成発句の翻刻者を戸惑わせることに繋がっている。

この理由の一つとして、長島弘明氏は、秋成の「目の状態や体調は、月々、日々に異なることもあって、筆致もそれに従って様々な揺れを示す」状態で、老齢で半盲の秋成に好不調の波があったのであろうと指摘されている（5）。

ただ一方で、その難解な秋成の字風が、独特な特徴をもつものとして、秋成在世当時の

文人たちに珍重されていたのも事実である。中村幸彦氏の指摘する通り、生前から偽筆まで出回っていたことがそれを示している（6）。秋成の筆運びの魅力について、長島氏は、『胆大小心録』八九の「ちか頃目くらく、老にいたりて、たゞ字とも何とも思はずして、心ニまかせて筆を奔らすを、ある人は、よめかたしと：又あるとき、善書の人か：仏祖たちなどの豪牧にまかせられしに似たり、といふ」という記述を引き、秋成の筆蹟に「伸びやかな自在さがある」と述べる。また、その具体例として、『俳調義論』と同じ文化六年に書写された『神代かたり』の秋成自筆稿を挙げ、「字の大小、線の太さ細さの変化は、墨継ぎ以外の所にも認められ、これ又、リズムミクな印象を与えている。」と指摘されている（7）。以上の指摘から、書写者である得閑斎繁雅がこの作品を写した理由も、秋成の筆蹟にあったと思われる。確かに秋成は、大田南畝と文化二年（一八〇五）に対面を果たし、同年には、狂歌集『海道狂歌合』を脱稿させている。同じ京に住む狂歌師の繁雅も当然、このような秋成の活動は知っていたであろう。だが、『海道狂歌合』の後刷本が、渡辺南岳と河村文鳳の図譜のみを独立させて編集されていたことが示すように（8）、秋成の狂歌は、必ずしも当時の一般の狂歌愛好者が評価する作品ではなかった。

同じことは、道彦にもあてはまるであろう。先述のとおり、道彦と秋成に俳諧上の接点

は見いだせない。にもかかわらず、道彦が秋成の句を求めたのは、南岳が秋成の文名を伝えたとき、当然その筆遣いについても話題にしたか、あるいは直接見せたのではないか。それにより、道彦が、秋成独自の奔放な筆のものを欲したから、と考えられるのである。

注

- (3) 文入宗義氏編『俳句講座3 俳人評伝 下』（明治書院、一九五九年）。
- (4) 勝峰錦風氏校註『古俳書文庫第六篇 奇談夢の棧 附高館俳軍記』（天青堂、一九二四年）。
- (5) 『上田秋成全集』第八卷、月報10（中央公論社、一九九三年）。
- (6) 『上田秋成全集』第六卷、月報5（中央公論社、一九九一年）。
- (7) (5)に同じ。なお、『胆大小心録』の本文は、『上田秋成全集』第九卷のものを参照した。
- (8) 鷺山樹心氏編『海道狂歌合 文化八年版本』（和泉書院、一九八一年）解説。

### 三、前半の意図

『俳調義論』の受容の実態について、主に道彦の立場から考察をすすめてきた。では、

一方の秋成は、この作品を編纂した際、どのような意図をもっていたのか。

ここで、『俳調義論』について、『俳文学大辞典』での説明を引用する。

俳諧句集。写半一。余斎（上田秋成）著。文化六（一八〇九）成。同八・三、嵐桂舎沙月奥。画師渡辺南岳の伝えた道彦の言葉に応じて晩年の秋成が編んだ自選句集。四季別に配列した発句一〇〇章と、その後に書き留め風に芭蕉・宗因らの句の寸評、おのおの発句一章を含む亡妻を悼む文と歌舞伎役者藤川平四郎の思い出の文の二文、追加の句四句を収録。得閑斎繫雅の写本を沙月が筆写した唯一の伝本が綿屋文庫に所蔵されている。（9）

関西大学所蔵本についての記述がないことを除くと、『俳調義論』についての的確かつ簡潔な説明といえる。ただ、「自選句集」であるこの作品に、なぜ俳論書であるかのような「俳調義論」という題名が付けられたか、については述べられていない。

この疑問は、この作品が「四季別に配列した発句一〇〇章」による前半部と、「芭蕉・宗因らの句の寸評」等による後半部の、二部構造からなると考えることで解消する。では、

それぞれの部分の意図を、前後半の句文の典拠判明状況を述べながら考えていく。

前半部（一丁表一行目～十一丁表六行目）の発句一〇〇章は、一〇〇句中四八句の典拠が判明している。発句の成立年代ごとの典拠作品数は、安永年間（一七七二～一七八一）が六、天明年間（一七八一～一七八九）が四、寛政年間（一七八九～一八〇一）が四、享和年間（一八〇一～一八〇四）が一七、文化初～六年（秋成没年）まで（一八〇四～一八〇九）が一七となっている。典拠の内訳をみると、『年中行事絵巻』（享和二年（一八〇二）成）等、秋成の晩年である享和年間以降に成立した作品が多いが、『去年の枝折』（安永九年（一七八〇）成）等、中年期である安永期から寛政期に成立した作品も三割弱ほどある。

その中には、先行研究では指摘されていなかったが松村呉春や紫暁といった、蕪村周辺の俳人との交遊を追想していたことを窺わせる発句がある。七句目「七艸や何が足ずと我垣ね」は、秋成の松村月溪宛の書簡〔寛政元年（一七八九）（10）の「かきね漬のこ」と葉」と題された文章の冒頭、

なゝ草やなにが足ずと吾垣根といはひ言せしは。はやも二とせのむかしの春と成ぬよ

が典拠である。月溪は京の人で、蕪村に画を学び、後に中国風に呉春とも名乗った。蕪村没後は円山応挙に師事し、四条派の祖となった。秋成とは俳諧の友人として終生親交があった。発句が詠まれた時期は、「はやも二とせのむかしの春と成ぬよ」という言葉から、天明七年（一七八七）とわかる。

また、十四句目「彼岸とてあだ鐘つかす野寺かな」は、同じく寛政元年の宮紫暁宛書簡（11）の中にみえる「望の夜は」という前書の発句、

名月にあだ鐘つかす野寺かな

が典拠であろう。紫暁は、蕪村の後継者である高井几董の没後、夜半亭一門を継承した俳人である。几董の追善集『鐘筑波』（寛政二年（一七九〇））を編集したが、その方針を巡って一門の間に少々争いがあった。これに秋成は嫌気がさし、青年時から几董と親友であったにも関わらず、追善集には追悼句を一句寄せるのみであったという経緯がある。

これらの書簡自体は伝記研究との関わりで既に知られていた。しかし『俳調義論』という枠で見なおすと、秋成の俳諧にとって、蕪村とその周辺の俳人との関わりが重要な要素

であったことが改めて確認されるのである。

発句間に挿入されている文章の典拠についても、冒頭文以外全て判明している。それらの典拠は秋成晩年期に成立した『茶痕醉言』〔文化四年（一八〇七）成〕等の作品があるのは当然であるが、『俳諧発句むかし口』〔安永六年（一七七七）刊〕等の、中年期に成立した作品もある。秋成が、与謝蕪村や高井几董らと懇意にしていた時期も懐かしみつつ、文章を採録している様子が窺える。

一方、『俳調義論』中の典拠未詳の発句については、既に中村幸彦氏がその一部に説明を加えられている（12）。そこで、典拠未詳の句に絞って中村氏の検討内容を見ていく。発句の上の番号は私につけたもので、『俳調義論』内での出句順を表す。

2 大ぶくの茶のあつさにぞうめ法し

16 きさらぎや二日の月もちりげほど

18 うぐひすが背やすりにけん餅のかび

#### 梅翁百年忌

23 目を閉てあいて又観るさくらかな

興につきて百韻せしこと忘れた

26 駕が曰されどもかろし花のゆき

30 あがる時すつともいはぬひばり哉

83 うつくしや巨たつに酔たかほよ人

98 をし鳥やよくも男に生れたぞ

104 うぐひすやうめ蹴ちらしてどちとんだ

まず、「談林調といえはいえる」句として、16、26の二句を挙げ、30は「軽い所が来山調ではあるまいか」とされている。因みに、中村氏論考のなかでは来山の発句が挙げられていないが、「軽い所」というのは、燈外自序・来山跋『俳諧生駒堂』（元禄三年（一六九〇）刊）中の来山の発句「山のへや風より下を行燕」（13）に見られるような、技巧を凝らさず日常語によって眼前の風景を詠むという姿勢を指すと考えられる。

また、<sup>104</sup>は「鬼貫の口語調」とされている。こちらも例句は挙げられていないが、鬼貫の『仏兄七車』（享保十二年（一七二七）成）の元禄十六年の句「鶯よ花はちるとも飛まはれ」（14）等に見られる、会話調の句風を指すものと思われる。

これらの選句は秋成の好みが反映されているといえるであろう。実際、天明七年（一七八七）に几董が仙台の東臯に宛てた書簡（頼原退蔵「俳家尺牘」に抄録。『頼原退蔵著作集



第四卷』所収)では、

摂陽に無腸といへる一大家あり。詩をよくし、万葉歌をよみ、はいかいは宗因、鬼つら、来山をとる。無双の才子也。白眼にして世と交はらず。可惜。

とある。この傾向は基本的には終生変わらなかったといえる。長島弘明氏は、「秋成の俳歴―漁焉時代を中心に―」(15)で、秋成の晩年の俳風について、

秋成にとって俳諧は、歌文と学問に専念する日常の、その余暇に成る、文字通りの心楽しい遊びであった。句の風も、寛政初年までの蕪村風を離れて、談林風、あるいは来山、鬼貫風とでも称すべき軽妙・滑稽の句ぶりのものが目立って来る。

と述べられ、『俳調義論』中の「人はいさ貴様はやはり梅の花」等の句をその例として挙げられている。氏の見解に概ね異論はないが、『俳調義論』に絞って検討した筆者としては、秋成は晩年において、先に几董が挙げた俳人のなかで、宗因の俳風に対し最も敬意を払っ

ていたという印象を受ける。それが窺えるのが、23の句である。梅翁百年忌というのは、梅翁（西山宗因）の没後百年の、安永十年（一七八一）のことで、この句はその時の吟かと思われる。安永六年（一七七七）に、秋成が初の宗因俳諧発句集である『むかし口』を刊行していることもふまえると、宗因への高い評価が感じられる。

一方で、中村氏は、2は貞門調であり、18は芭蕉句「鶯や餅に糞する縁の先」を、98は、其角句を下敷にしているとし、これらを「本歌取り」の句と指摘されている。因みに、その其角句とは、有名な「夕すゞみよくそ男に生れけり」（『五元集』）のことである。

さらに、83は「誰が見ても蕪村調」と述べておられる。この句からは、天明期に没した蕪村を懐かしく思い起こす秋成の姿勢が窺える。

このように、秋成は、自身の評価する宗因、鬼貫、来山のみならず、貞徳、芭蕉、同時代の蕪村といった著名な俳人達の句風を真似ている。これらの発句は、中村氏も述べられているが、蕪村やあるいは几董、月溪に対して戯れに詠んだものといえるのではないか。そう考えると、秋成が選んだ典拠未詳の発句も、亡き俳友達に向けたものであり、心の内で自由な「あそび」に興ずる秋成俳諧の性質を表すものであったと考えられるのである。

以上のことから、『俳調義論』前半部は、秋成が、俳諧に関係する記憶を手がかりに、自

作発句を心の赴くまま選び出した「自選句集」といえる。よって、俳論書であるかのよう  
な「俳調義論」という題は、前半部を念頭において付けられたのではないといえる。以上  
の分析から、前半部は自作句を含めた秋成の「自選句集」であるといえ、この部分で秋成  
は道彦の要望に応えたといえる。

しかし、後半部（十一丁表八行目～十六丁表六行目）の、句の寸評と各々一句を入れた  
二つの文章、および追加の発句四句の典拠は判明していない。したがって、後半部は、道  
彦のためというより、秋成が自己の思いを表明するために書き下ろしたと考えられる。

注

（9）『俳文学大辞典 普及版』（尾形仿ほか編、角川書店、二〇〇八年）。

（10）天理図書館所蔵「秋成書翰集」（九一三・六五―イ二七―一一三）。なお『秋成遺文』（修文館、  
一九一九年）に翻刻がある。

（11）『秋成遺文』（修文館、一九一九年）所収。

（12）中村幸彦氏「上田秋成雑記（二）秋成と俳諧」（『中村幸彦著述集』第六卷所収。初出『俳句』  
第二十四卷第一号（角川書店、一九七五年）。）、長島弘明氏「秋成の俳歴―漁焉時代を中心に

―〔高田衛氏編『論集近世文学5 共同研究 秋成とその時代』（勉誠社、一九九四年）所収〕  
等。

（13）『和露文庫 蕉門珍種百種別巻』（思文閣、一九二八年刊、一九七一年複刻）所収。

（14）岡田利兵衛編『鬼貫全集 三訂版』（角川書店、一九七八年）所収。

（15）高田衛氏編『論集近世文学5 共同研究 秋成とその時代』（勉誠社、一九九四年）所収。

#### 四、後半部の芭蕉・宗因句評の意図

前章で述べたように、秋成側による本作品の編纂意図を解明するには、後半部分に注目すべきと考えられる。そこで、「俳調義論」という題名をふまえ、特に後半部の芭蕉・宗因句への寸評に焦点を当て、秋成がこの句集に込めた意図について分析していきたい。対象となる句文を、次に示す。

はせをの

塘より田のあをやぎていさぎよき

凡兆

賀茂のやしろハよき社也

芭蕉

是ハよし

夏ごとにほそ本手なるならがよひ

鳴てきさうな六月の夏とハ

なのこちや／＼なのこちやへ」（一一ウ）

梅翁の

恋はたゞ捨入道のひとり寝に

あかしかた／＼ふるふあかつき

是は連歌也

はじめの凡兆と芭蕉の連句「塘つづみより」は、『猿蓑』の灰汁桶の巻に収録されている（16）。前句は、堤から一面の青田が見わたせてすがすがしい、の意である。それに対し芭蕉は、京の賀茂神社は実に神々しい社であると付けて、賀茂川の堤からの風景としている（17）。次の「夏ごとに」の連句は、『炭俵』の梅が香の巻を引用したものである。ただ実際の連句は、

奈良通ひ同じつらなる細基手

野坡

今年は雨のふらぬ六月

芭蕉

である（18）。藤井乙男氏は秋成の記憶ちがいとされている（19）。しかし、凡兆・芭蕉の連句は正確に記述していることに加え、凡兆の名を明記しているのに対し、野坡の名は出していないことをふまえると、野坡に対する批判的な意識により、あえて覚えていない風を装ったのではないか。

野坡は第一章で述べたように、大坂の蕉門俳人であるが、淡々や祇空のように其角の流れを汲む都市系蕉門ではなく、関西や中国・九州地方での俳壇活動に力を入れた地方系蕉門であった。また、晩年の芭蕉の直門で、『炭俵』撰者の一人であり、同書の代表的作家でもあった。青年時、特定の俳系に属さなかったものの、大坂俳壇に身を置いた秋成は、その俳風に抵抗感があつたと考えられる。

野坡の作品については、卑近な人事的題材を扱ったものが多い（20）。先述の連句の発句も、零細な基手（資本）で奈良通いをして、夏の商品（奈良名産の晒布<sup>さらし</sup>）を仕入れにいく商人を詠む。前句に「娘を堅う人にあはせぬ」とあるのをふまえ、娘を家から出さない同業者に対し、同じ身分ではないか、とわらうという意である。つぎの芭蕉は、前句を受けて、商

人同士の時候の挨拶を付句にしている（21）。

では、これらの各々の連句自体を秋成がどう批評しているか。「塘つづみより」の連句については、まず凡兆の句で、堤の先一帯に広がる水田の風景の清爽さが表現されている。その情景を、芭蕉の付句が、賀茂川の堤から神徳に感謝しつつ眺める田面と名社の風景へと転換しており意外性がある。加えて「よき社也」という言葉にもおかしみがある。このような凡兆句と芭蕉の付け方双方に対して「是ハよし」と述べたと考えられる。

一方、秋成の覚え間違いとされる「夏ごとに」の連句の方では、前句は、奈良通いする夏ごとにますます基手（資本）が細くなり、泣けてきそう、と小商人の悲哀を詠み、滑稽さがある。付句は、前句を受けて泣き出しそうな夏の空模様の意を掛けている。秋成によって元々は雑俳風に改変されたが、それでも付合は単調で意外性に欠ける感は否めない。それは、元々の連句の方でより明確である。まず野坡は前句で、零細商人の世界を軽い調子で詠み滑稽味を出している。ただ野坡の句は、人事趣味にとらわれ、狭い世界に止まることがある（22）。今回の句もその傾向にあるため、芭蕉も、商人の挨拶言葉をそのまま付句としており、連句としての変化に乏しく、滑稽性や意外性が弱い。これらの特徴をふまえた上で秋成は「なのこちや／＼」と厳しく批評したと考えられる。

ここで、秋成がなぜこれらの連句およびその評を出してきたのかという疑問が浮かぶ。藤井氏は、芭蕉への反発という文脈でとらえられている。しかし今回に関しては、それぞれの連句ごとの短評を見る限り、芭蕉個人に対して批判を加えようとする様子はない。よって、つづく梅翁（宗因）の連句作品も含めて検討してから、秋成の意図を読み取るべきであろう。宗因の「あかししかた／＼ふるふあかつき」句について、秋成は「是は連歌也」と述べている。この評に対して、中村幸彦氏は、「上田秋成雑記（二）秋成と俳諧」（23）の中で、

もつとも「あかししかた／＼」を、秋成は「明かしかねて」とのみ解しただけでの評である。捨入道に、『源氏物語』の明石入道がかかり、「かた／＼ふるふ」と擬態語で続く働きをかねていることに気づけば、これまさに結構な俳諧である（中略）ここは秋成の誤解を指摘するためではなく、「俳意たしか」をきびしく意識していたことがわかれば足りる。

と述べておられる。確かに秋成は「かた／＼ふるふ」の表現を十分に解釈できずに宗因句を「俳意たしか」でないと考えたように思われる。しかし、秋成は自己の作品中にこの句



を好んで使っている。明和三年（一七六六）刊の『諸道聴耳世間猿』二之巻の一「孝行は力ありたけの相撲取」の文章中には、「鶉越のからき世を逆落とはあやにくの。所の名さへこり須磨や。明石がたがたふるひつゝ」（24）と見られる。

また、城崎旅行の回想紀行文である『去年の枝折』（安永九年（一七八〇）成）にも、この句をふまえた表現が見られる（25）。

今宵ハ十三夜也。所がら行やハ過んとてあかしの泊定めぬ。此家のうしろハ濱邊にて、波こゝもとにと云古言も思ひ出てあはれ也、枕の戸ハ皆明て月を夜すがらみる。濱風をさへひきてなん、むかしの梅翁があかしがた／＼ふるふ曉といひしハ、また／＼今宵のさましたり。

月は入ぬ彼朝霧のあかしがた

傍線部分では、「濱風をさへひきてなん」とあるため、秋成が「かた／＼ふるふ」の意味を解していることは明らかである。

以上のことから、秋成は「あかしがた／＼」の句に込められた言葉の働きを解した上で

「是は連歌也」と述べたとわかる。中村氏の言う「俳意たしか」は「俳言の使用や、いわゆる俳諧化から始まって、対象、発想、表現の非和歌性、非連歌性」と、広い意味をもつとされている。しかし、秋成は、宗因句のような「明石潟」に「かた／＼ふるふ」という俳言の使用のみでは、俳諧の滑稽性として不十分であるとしているのではないであろうか。

この宗因の連句に対する短評によって、秋成が芭蕉らの連句を示した理由を推測することができる。すなわち、秋成は、句の寸評を通じて、俳諧は、あくまで和歌や連歌とは違う遊芸であり、和歌的・連歌的発想や表現から離れた俳味を強調すべきであると表明したかったのである。そのために、蕉門の連句中から、変化に富み意外性の強いものと弱いものを選んで、各々に寸評を加えたうえ、自らの好む宗因句も、本歌取り等の換骨奪胎が行われず、物語を表面的にふまえた掛詞や俳言を使用するに留まっていると、きびしい態度で断じたのである。

注

(16) 『古典俳文学大系 6 蕉門俳諧集 1』所収。

(17) 樋口功氏『新芭蕉講座第五卷 連句篇(下)』(三省堂、一九九五年)、『芭蕉講座第四卷 発

句・連句鑑賞』（有精堂、一九八三年）等を参照した。古注については、雲英末雄氏 編『芭蕉

連句古注集 猿蓑篇』（汲古書院、一九八七年）を参照した。

（18）（16）に同じ。

（19）（1）に同じ。

（20）『俳句講座 3 俳人評伝 下』「志太野坡」（明治書院、一九五九年）。

（21）参照した現代の注釈書は（17）に同じ。古注は竹内千代子氏編『炭俵 連句古註集』（和泉書院、一九九五年）を参照した。

（22）（20）に同じ。

（23）『中村幸彦著述集』第六卷所収。

（24）『上田秋成全集』第七卷（中央公論社、一九九〇年）所収。

（25）久松国男氏所蔵本『枕の硯』（写本二冊）所収『去年の枝折』に拠る。翻刻に際して、適宜句読点を加え、濁点を付した。

## 五、秋成の宗因観

前章で『俳調義論』の宗因句への評は、秋成の俳諧観によるものとしたが、そうすると、一つの疑問が浮かび上がる。中村氏の前掲論文等で指摘されているが、秋成の俳諧観は宗因句から学ぶなかで形成されたと考えられる。いくら「俳意たしか」を意識していたとはいえ、なぜ、自己の俳諧観を脅かす危険を冒してまで、宗因句を「連歌」としたのか。

秋成が編纂した宗因俳諧発句集『むかし口』（安永六年（一七七七）刊）（26）の巻頭に据えられた梅翁伝には、「翁か俳諧は、只連歌のいとまなるたはふれなりしかば」と述べられている。これは、もともと連歌師である宗因の俳諧は、連歌の合間に楽しむあそびであるに過ぎなかったという意である。宗因の句をみた後の世の「はいかいのみ学ふ」俳人からは「あた／＼し」、すなわち不誠実な俳諧であるとされると非難されると述べる。それに反論する形で、秋成は宗因の俳諧について次のように述べる。

そは詞こそうちくつろきたれ、心は哥連歌のまことにもをさ／＼劣らふもの歟。

つまり、言葉はおどけているが、本式の和歌連歌にも等しい詩精神をもつ、とし、連歌を本分とする宗因の遊びの俳諧の方が、かえって俳諧の本質を表現している、と賞賛して

いるのである。

このような秋成の宗因観からしても、『俳調義論』で宗因句に対しどうして先述のような評を行ったのか、やはり疑問は残る。

そこで、『俳調義論』から離れ、安永から寛政にかけての上方俳壇の動向に目を移すと、秋成が、青年期に俳交の場とした一炊庵紹廉門の跡を継いだ几掌（万翁）が、宗因百年忌を間近に控え、自己の俳系を宗因末流に位置づけようと動いていたことがわかる。そしてそのことが、もう一つの理由に関連していると思われるのである。

『むかし口』の梅翁伝には、

ことし安永六年まで（宗因没後から）九十六年に成ぬ。翁か統系をとなふる人は、百とせの作善次て営なみ給へ。おのれ其任にあつからされと、ひたすら昔をしのひ出て、もゝくさの菓とるいとまに、此故よしを書いてしなべに、俳かいのほ句百余章、可否をえらはすかいしるして、いさゝか手向の心はへを、遠き人にさゝけまつる。

とある。秋成は「翁か統系をとなふる」几掌の活動と対比して、自己の『むかし口』編集

刊行はそれとは全く違い、宗因在世の「昔をしのひ」ながら行ったものと強調している。

ただ、一炊庵二世万翁が在世のうちは、まだ宗因称揚の動きに一定の抑制が効いていた。

それが窺える資料が、万翁序、朶輝跋、茶裡編の『俳諧九千日』〔安永九年（一七八〇）成〕（27）である。これは一炊庵紹廉門の十南斎白羽の二十五回忌追善集である。この中に収録される二条庵杉丸の「はいかい自記」では、当時の俳風について「今専らとするは、松永氏、西山氏、松尾氏の三流に過ねば、試に其一班を覆ふ」と述べ、貞徳、宗因、芭蕉の句風をまねた発句「ふり出て聞や鈴鹿の時鳥」「螢火や扇の芝の砂なとも」「日の恩に限なし苔の苔の花」の三句を等間隔に並べている。

文章の末尾には「右一章白羽子追悼に記す 甲子夏皐月 二条庵杉丸」とあり、延享元年（一七四四）成立のこの文章が、『俳諧九千日』のためのものではないのは明らかである。だが、それをあえて収録したところに意図的なものを感じる。宗因百年忌の一年前であるが、三人の俳祖を同等に扱うことで、『むかし口』とは違った方法で、宗因の再評価を図っているといえる。これは同時に、『むかし口』を尊重した形となっている。

だが、『むかし口』も、宗因俳諧継承者を名乗る人々と無縁ではいられなかった。宗因称揚の動きと『むかし口』との関係について、尾崎千佳氏は次のように述べられている（28）。

寛政十二年二月、菊舎太兵衛から行われた『宗因俳諧発句集』半紙本一冊は、『むかし口』の板木をほぼそのまま流用した改題改竄本で、新たに「浪速正檀林一炊菴」の序と竹巢月居の跋が付け加えられたものである。（中略）ここにおいて『むかし口』は宗因流俳諧称揚の一齣として、一炊庵の業績に組み込まれてしまった。

当然ではあるが、『むかし口』の題を変えただけの『宗因俳諧発句集』に秋成は一切関わっていない。この作品の序者について、尾崎氏は、天明五年に死没した几掌ではなく、その門弟で『万翁発句集』編者の一炊庵三世宮田泊帆とする。この泊帆は『宗因俳諧発句集』刊行と同年の六月、「浪華正檀林一炊菴」の署名で『宗因文集』をも出しており、発句集との同時編纂刊行をねらったと思われる。しかしこの文集は、俳諧発句の前書を独立した文章として挙げ、また『津山紀行』（承応二年（一六五三）成）の前半を削除し、後半部分のみを載せるなど、編集の粗雑さが目立つものであった（29）。

このような自派の権威づけを目的とした形振り構わずの宗因顕彰に対して、秋成が深い嫌悪感を抱いたことは容易に推測される。

以上のことから、『俳調義論』の「あかしかた／＼」句に対する「連歌也」という短評は、宗因の連歌師としての経歴や作品に目を向けず、「檀林」の祖としてのみ評価しようとする俳人達への抗議の意も込められていると考えられるのである。

注

(26) 高田衛氏「翻刻・宗因俳諧発句集」(「東京都立大学人文学報」第一七三号、一九八五年三月)。

(27) 柿衛文庫蔵(は一六八―五五)。半紙本一冊。挿絵が多い。

(28) 同氏『宗因顕彰とその時代』(『連歌俳諧研究』九十七号(一九九八年八月))。

(29) 柿衛文庫蔵(は一九〇―一三六三)浪花正檀林蔵板。巻末に「四季混雑」として、泊帆・月居等四十名の各地俳家の発句を添える。

## 六 秋成の俳諧観

これまで、「俳意たしか」であるべきとする秋成の俳諧観は、宗因観にも影響を与えていることを述べた。ただ、秋成の考える「俳意たしか」とは具体的にいかなるものか。中村



氏は、諸家の句風に倣うことを試みた秋成句を挙げて、「俳意たしか」な作品の一部とされているが、厳密な定義はされていない。

そこで、秋成の俳諧に対する考えが特に現れている、後半の芭蕉紀行文中の発句および宗因発句の寸評を検討していき、秋成の俳諧観について考察する。該当部分を次に示した。便宜上この本文を各評ごとに四分割して、それぞれを詳細に検討していく。

①はせをが句に

露とく／＼試ミにうき世すゝがバヤ

露とはいかに、岩清水ならバさはいハれじ

②又キ角が人の子のなく成しに

さぞ涙饅頭見ても菊見ても とハ

いかに、花見てもとこそいハめ

ある人の句に是も人の子のとむらひにとて

花ちりて枕にのこる小豆哉

かくこそありたけれ」(一三ウ)

③ 又桃青どのゝ

田一まい植て立さる柳かな とハ

得しがたし、植はてゝ立よるハ男をとめ等也、

たちよるハ柳陰かなとハなぜいハぬ、かく

とゝのはぬものを、天下政教の道が

明らめられう者か、まだ有しかど忘れた

④ 宗因の

申／＼六蔵が申をミなへし とハ

落馬と、ちと聞にくしかし」（一四才）

まず、傍線部①「はせをが句に 露とく／＼試ミにうき世すゝがバや 露とハいかに、岩清水ならバさハいハれじ」である。このなかの芭蕉の句「露とく／＼試ミにうき世すゝがバや」は、紀行文『野ざらし紀行』（30）中にあり、吉野山の西行の草庵跡を訪ねた芭蕉が、有名な伝西行歌「とく／＼と落つる岩間の苔清水くみほすほどもなきすまひかな」にちなんで詠んだ句である。西行の歌は『吉野山独案内』（「揺春庵周可編、寛文十一年（一

六七一）刊」（31）をはじめ、多くの地誌で紹介されている。

この発句に対し秋成は、「露とはいかに、岩清水ならバさはいハれじ」と、石清水が流れるさまを「露とく／＼」とは言わないだろう、と述べている。

たしかに、芭蕉句以前に「とくとく」を「露」とともに使用している例は殆ど見られない。例外として、重頼編『時勢粧』（寛文十二年（一六七二）刊）第四下に「一ふしを露とく／＼と舞すまし」（32）という句がある。しかしこの場合の「とくとく」は『日本国語大辞典』でいう「ゆつくりと足をふみしめて歩くさま」を表し、「露」という語は全体の句の調子を整えるために使われている感が強いので、芭蕉句と同列に論じることとはできない。さらに、芭蕉の門人たちの「とくとく」を使用している発句を見ると（33）、

炭や岩間こがしの清水とくとくと      其角（『五元集拾遺』）

とくとくと解て落るや凍清水      許六（『正風彦根躰』）

峯の雪とくとくとくひたす袂哉      車庸（『幻の庵』）

いずれも「露」とともに使ってはいない。

以上のことから、秋成は、芭蕉の「とく／＼」句に対し、西行歌を意識しつつ独自の趣向を追求するあまり、不自然な言葉づかいとなっていると考えたと思われる。この秋成の芭蕉句に対しての苦言からは、俳諧は自然な言葉づかいで表現すべきとの秋成の姿勢が窺える。

次の傍線部②「又キ角が人の子のなく成しに さぞ涙鰻頭見ても菊見ても とはいかに、花見てもとこそいへめ ある人の句に是も人の子のとむらひにとて 花ちりて枕にのこる小豆哉 かくこそありたけれ」であるが、この「さぞ涙鰻頭見ても菊見ても」の句は、其角の作品中になく、典拠は不明である。其角には「鰻頭で人をたづねよ山桜」(『韻塞』(元禄九年成) )(34)、「鰻頭をうれしき袖に包みける」(『あら野 員外』(元禄二年刊) )(35)等の句があり、別の作者の句を其角句だと覚えちがいをしていたかと思われる。また、「花ちりて」の句も典拠未詳である。

さて、「さぞ涙」の句についての評である。秋成自身としては、子を亡くした親の気持ちを強調するため、鰻頭という日常語に、同じレベルの「菊」という語よりも、桜の「花」という、春の訪れを感じさせ華やかな印象を持ち雅にも通ずる語を合わせ、子どもの死との落差を鮮やかに印象づけたかったのではないか。だからこそ「あずき」という卑俗なものを桜と対比させた「花ちりて」の句を「かくこそありたけれ」としたと考えられる。

このように秋成は、芭蕉句と其角（作とされる）句のそれぞれの「俳調」つまり俳諧のしらべに対して批評し、奇抜な言語表現で滑稽さを狙うのではなく、日常の中で使用する言葉の意外な組み合わせによって滑稽さを表すべきという考え方を表明していることが窺える。秋成にとつての「俳意たしか」とは、普段使う言語を組み合わせせて俳諧としての面白さを出すことであつた。

では、秋成の俳諧表現に対する姿勢をさらに明確にするために、次の傍線部③「又桃青どのゝ 田一枚植て立さる柳かなとハ 得しがたし、ゝかくとゝのはぬものを、天下政教の道が明められう者か、まだ有しかど忘れた」について考察していく。

この「田一枚うえて立ち去る柳かな」の句は、『おくのほそ道』（36）の、殺生石・遊行柳の条に見られる句で、西行が立ち寄った芦野の里で詠んだ歌「道のべに清水流るる柳かげしばしとてこそ立どまりつれ」にちなんで詠んだものである。秋成の批判について、藤井乙男氏は「又「田一枚植て立さる」の句も、芭蕉の意を誤解してゐるらしい」と述べている（37）。また、宮本三郎氏も、『俳調義論』は芭蕉に対して批判的である」とした上で、田一枚の句について秋成は「芭蕉を罵っており」としている（38）。

両氏とも秋成の批判が芭蕉嫌いによるものと述べられている。しかし、藤井氏は、秋成

が「田一枚の句」をどう「誤解している」のかについてそれ以上述べておられない。また宮本氏は、秋成が「前掲（支考『俳諧古今抄』）の説と同じく、柳のもとに立寄る人を田植の人とみる立場」とする。その説は、蓼太が『芭蕉句解』（宝暦七年刊）で、西行の「道のべに」の歌を根拠に「はや田一枚植けるよと、おどろきたち去りたる旅情也」と解釈し否定したと述べられている。ただ、つづけて「この句は上述のごとき諸説を生じ問題の起こるところに、なお考察の余地が残されているとしなければならない」と述べられている。

実際、この句については、さまざまな議論がなされてきた。穎原退蔵氏・尾形仿氏訳注『新版 おくのほそ道』では、『植ゑて立ち去る』と続いた二つの動詞において、おのおのその主語を異にするのは、いかに文法上の破格を許し得べき特殊の詩形にせよ、はなはだ無理の措辞といわねばならぬ。」と述べられている（39）。

そこで、「植て」と「立去る」の動作の主体について、先行研究の概観をまとめた。

- ① 「植ゑて」の主体は早乙女、「立去る」のは芭蕉。
- ② 「植ゑて」の主体も「立去る」の主体も早乙女。
- ③ 「植ゑて」「立去る」の主体はともに早乙女だが、「立去る」は芭蕉自身の行動も含むとする。

④ 「植ゑて」も「立去る」も柳（柳の精）とする。

⑤ 「植ゑて」も「立去る」も芭蕉とする。

現在まで通説となっているのは、田一枚を①「植ゑて」の主体は早乙女、「立去る」のは芭蕉、というものである（40）。

一方、②「植ゑて」の主体も「立去る」の主体も早乙女とするものもある。これは、近代の正岡子規の写生の教えにもとづいた内藤鳴雪著『芭蕉俳句評釈』にみられる。

つづいて、③「植ゑて」「立去る」の主体はともに早乙女だが、「立去る」は芭蕉自身の行動も含むとする説が唱えられた（41）。

また、謡曲『遊行柳』を背景とする説として、④「植ゑて」も「立去る」も柳（あるいは柳の精）とする説と、⑤「植ゑて」も「立去る」も芭蕉とする説もでている。前者は『遊行柳』の柳の精霊の舞を想像しての句と解し（42）、後者は、西行をはじめ古人に対する鎮魂の思いから、芭蕉が自らを能の舞台上のワキ僧に擬して、田一枚を植えたような気持ちのまま、そこを立ち去ってゆく心象を詠んだ句と解している（43）。

ちなみに、秋成は、『雨月物語』等の著作から、能に詳しいことが窺えるが、謡曲『遊行柳』には触れていない。ただ、管見の限りでは、近世期の注釈は『遊行柳』に言及してい

ない。よって、この時代には夢幻能の世界になぞらえる発想がなかったとも考えられる。

諸説の概観から、「田一枚」の句について各人各時代によってさまざまに異なる解釈がなされていることがわかる。「植えて立ち去る」という表現について、多くの読みを許すのは、芸術的表現であるから、という考え方もできる。しかし、主語が曖昧になった芭蕉の特異な言葉づかいを、秋成は不明瞭な表現ととらえ「得しがたし」と述べた。これを、芭蕉嫌い、と片づけるのは簡単ではある。だが、『おくのほそ道』研究における「無理の措辞」という意見もふまえると、ある程度妥当な解釈といえるのではないか。

このように、秋成は、俳諧は自然な言葉づかいの方法に従って表現することが大事としていることがわかる。それが秋成にとつての「俳意たしか」にも繋がっていると考えられる。「天下政教の道が明らめられう者か」と、秋成が「道」という言葉にこだわったのも、俳諧が複雑で難解なものと捉えられることで、普段の言葉づかいの中で「おかしみ」を作り出せる、俳諧が本来もつ魅力が損なわれていると考えたからではないか。

さらに、言葉づかいの自然さ、わかりやすさを重視する姿勢が窺えるのは、傍線部④「宗因の 申／＼六蔵が申をミなへし」とハ落馬と、ちと聞にくしかし」という部分である。この「申／＼六蔵が申をミなへし」という句について説明すると、「六蔵」は馬方を指し、



その馬方が、馬上の主にたいし野に咲く「女郎花」の存在を申し上げる情景を詠んだものである。

この句は、秋成の好んだ宗因句の一つであったことは、先に紹介した、秋成が編纂した初の宗因俳諧発句集『むかし口』の中に見られることからわかる。作品の成立年次は未詳であるが、元禄期の俳人燈外序の『俳諧生駒堂』（44）や、鬼貫自序『仏の兄』（元禄十二年（一六九九）刊）（45）に、同じ「申／＼六蔵か申をミなへし」の句が見られるなど、上方俳人の間で有名な句であったことがその一因であろう。

だが、秋成はこの句について、つづけて「落馬と、ちと聞にくしかし」と述べている。これは、馬上の人は、馬方の声が聞こえないから、身を乗り出して落馬してしまうだろう、と、この発句の現実感のなさを批判しているとれる。同時に、「申／＼六蔵か申」と三回つづけて「申す」というのが、発句の調べとしてよくはなく、聞こえにくい、という意味も含ませていると思われる。このように、芭蕉句だけではなく、終生傾倒する宗因の句に対しても批判していることから、現実の場面をふまえた俳諧の発句には、言語の組み合わせによるおかしみだけではなく、現実感を持たせることも必要とする秋成の態度が窺えるのである。

注

- (30) 『新編日本古典文学全集 71 松尾芭蕉集②』所収。
- (31) 横山重氏監修・岡本勝氏解説『吉野山独案内 南北二京霊地集（近世文学資料類従 古板地誌編 15 b）』（勉誠社、一九八一年）所収。
- (32) 『古典俳文学大系 2 貞門俳諧集二』所収。
- (33) 『古典俳文学大系 8 蕉門名家句集一』所収。
- (34) 『古典俳文学大系 7 蕉門俳諧集二』所収。
- (35) 『古典俳文学大系 6 蕉門俳諧集一』所収。
- (36) (30) に同じ。
- (37) (1) に同じ。
- (38) 同氏「芭蕉の助詞「て」の用法―『おくのほそ道』等の解釈をめぐって―」（同氏『蕉風俳諧論考』（笠間書院、一九七四年）所収。）
- (39) 角川ソフィア文庫、二〇〇三年（旧版は一九五二年）。
- (40) 櫻井武次郎氏「殺生石と遊行柳」（『奥の細道の研究』（和泉書院、二〇〇二年）所収）等。

(41) 久富哲雄氏『おくのほそ道全訳注（講談社学術文庫）』（講談社、一九八〇年）。

(42) 山下一海氏「大切の柳一本」『芭蕉の世界（角川選書）』角川書店、一九八五年）。

(43) 尾形仿氏『おくのほそ道評釈』（角川書店、二〇〇一年）

(44) (13) に同じ。

(45) (14) に同じ。

おわりに

俳人無腸としての秋成の本質を的確に表す文章として、先行研究において引用されてきたものの一つに、安永三年（一七七四）に秋成の切字論『也哉抄』（安永二年（一七七三）成）に寄せた蕪村の序がある。

客を謝して俗流に交らす（中略）。もとより俳諧をたしみて、梅翁を慕ふといへども、芭蕉をなみせず。おのれかこゝろの適ところに随ひて、よき事をよしとす、まことに奇異のくせものなり。（46）

確かにこの評は、先述の几董の無腸評と共に秋成の才質をよく表現したものといえる。ただ同時に、先行研究の間で、これらの優れた評にともすれば依存し、秋成の俳諧に係する意見の読解が後回しにされる傾向を作り出していたのではないか。

『俳調義論』後半の宗因句の寸評からは、宗因への親近の情だけではない秋成の俳諧に対する認識の深さや、当代の上方俳壇において、宗因を「檀林」の祖として奉る動きへの批判的な視点が垣間見える。秋成の筆蹟を所望した道彦らにとって、作品内容自体は二次的なものであったかもしれないが、単なる自作自選句集で終わらない『俳調義論』には、最期まで旺盛であった秋成の批評精神が確かに存在している。

また、今回『俳調義論』後半部の句評を検討した結果、秋成は「俳調」について論じ、同時に自己の俳諧観を表明していた。「俳調義論」という題名もこの部分に対して付けられたものといえる。そこで表された秋成の俳諧観は、宗因や鬼貫、芭蕉らに対する好悪の情だけではない複層的なものであり、同時代人の評でも捉えきれない物があると改めて認識させるものであった。

俳諧そのものについては、連句では、趣向の連続を避け、変化をつけることを、発句では、日常で使う言葉の意外な取り合わせでおかしみを作り出すことを強調していた。同時に、徒に技巧に走らず、自然な言葉づかいによって句意をわかりやすくすることが大事であるとしている。これは、前節で論じた『也哉抄』の統論の「俳諧はことにいたりて後の世の言、語にて。：心のゆくまゝに打出るものなれば。てにはも又それ／＼なる主どりして。奴、僕のはたらきをもなすべし。」という考えに基づいたもので、晩年に至るまで秋成の俳諧観は一貫していたといえる。同時に、蕪村の言う秋成の「おのれかこゝろの適ところに随」う俳諧であり、秋成にとって「俳意たしか」なものであったと考えられる。

自己の俳諧観に従い、俳諧の原点に還ろうとする直観的な詠みぶりは、蕪村に「奇異のくせもの」と評させ、二丁半の序を執筆させた俳人無腸の本領の一端を表すものといえる。

一方、前半部で、近世の諸俳人の俳風を倣ってみせた句を選んだのは、京上方の文人達の間ですぐに共感できる面白さを重視したからであろう。門派や俳壇、時流に囚われない秋成であるからこそ可能な俳諧であった。それとともに、秋成がかつ

て夜半亭門との交流を通じて存した中興俳諧期の雰囲気の後世に伝えるものでもあったといえる。『俳調義論』は、単なる自作自選句集ではなく、そのような彼の俳諧そのものを表した作品となっているのである。

注

(46) 『上田秋成全集』第六卷（中央公論社、一九九一年）所収。

### 第三節 無腸の俳業

はじめに

本章では『也哉抄』や『俳調義論』等を通じて秋成の文芸観や俳諧観を考察してきた。しかしながら、秋成がそうした持論を俳諧作品にどう反映させていたかについては明らかにしていない。これは、紀行文や語法書、俳諧撰集といった作品ジャンルと関連づけながら、秋成の句文や批評を検討していったためであった。確かに、文章や和歌と比較対照させながら考えていくことで、秋成の俳諧の多面性を明らかにできた部分はあった。ただ一方で、俳諧そのものの性質や魅力については十分に分析できていないという問題が残った。

そこで、蕪村や宗因句の影響が強いとされる、無腸改号後に作られた安永期の発句について検討し、秋成の俳諧の特色を検討する。それをふまえ、秋成の和歌における俳諧の影響を指摘し、秋成の俳業の意義について述べたい。

一、改号後の秋成俳諧

安永二年に無腸と改号した秋成は、高井几董を通じて蕪村率いる夜半亭一門と親交を深めていった。第一章でも述べたが、青年時代の秋成は、几董の父である几圭に俳諧の指導を受けたことがあり、宝暦八年（一七五八）刊の几圭薙髮賀集『はなしあいて』（1）にも句が入集している。しかし、几董との直接の俳交が確認できるのは、安永元年刊の『其雪影』（2）に出句しているのが最初である。したがって、改号する少し前から蕪村・几董との交流が深まったと考えられる。

それでは、改号したのちの秋成の俳風を明らかにするため、この時期の発句の一部を見ていく。

- ① 枕にもならふもの也春の水
- ② 櫻／＼散て佳人の夢に入
- ③ あなかまと青梅ぬすむ衣の音
- ④ 梶の葉に硯はづかし墨の糞
- ⑤ 朝顔に島原ものゝ茶の湯哉



右の各句は、安永五年（一七七六）に刊行された、几董編『続あけがらす』（3）に入集する秋成の発句七句の内五句を季節順に並べたものである。先行研究で、この時期の秋成の佳句として紹介されるものも含まれている。ただ①は、安永二年（一七七三）刊の『俳諧新選』（4）に「枕にもならぬ物なり春の水」として漁焉号で入集するが、これは二柳の『みなし蟹』によると、編者嘯山による改作とのことである。

『続あけがらす』は、当時蕉風復興運動の中心にいた蕪村・大魯・几董ら夜半亭一門と、暁台一門・樗良・寥太・旧国（大江丸）・麦水・蝶夢・二柳ら諸国の俳人の句が入集する一大撰集である。秋成が無腸号で寄せた跋文には、几董の父几圭の「ことし十まりな」とせの手むけすと聞に」とあり、上下二巻巻末に几圭追善句を載せているが、俳諧史では、几圭追善集としてよりも、安永期を代表する俳書として位置づけられる。

さて、右の発句のうち②③⑤について、長島弘明氏は、蕪村の影響を受けた「華麗で浪漫的な句」（5）として紹介されている。しかし、それらも含めた①から⑤までの句に見える特徴は、それぞれ微妙に異なると思われる。そこで各句を検討しその特徴を明らかにしていく。

まず、①は、漱石枕流の故事に取材したものである。自然を直観的・写實的に詠むの

ではなく、典拠の世界を重ねて知的・観念的に詠んでいる。

②は、自然や現実の風景を目の前にして詠んだ句ではなく、完全な観念的世界を詠んだ句である。その世界は「さくら」「佳人」「夢」という秋成の中で理想化された概念によって構成されている。蕪村句のもつ幻想性や芸術的雰囲気に通ずるものが感じられる句である。

③は、「あなかま」「衣の音」という王朝趣味を感じさせる語に、秋成の古学研究者としての一面が垣間見える。しかし中七では「青梅盗む」と続き、若い女性への皮肉な視点を窺わせる。秋成は王朝的物語的雰囲気の中で作品世界を構成しようとはせず、むしろそれに反発して、卑俗な風景を取りいれて滑稽味を出そうとしており、「俳優たしか」にするための機智が先にたった句となっている。

④も、七夕の時に歌を書きつけ織女星に祭る「梶の葉」を出して、王朝趣味を見せているが、この句も③と同じように機智的発想から「硯はづかし」と詠んで、「墨の糞」という語で意外性を強調している。そのため、各々の語が結びついて一つの世界を形作るのではなく、各語が相互に自己の存在を強調し、反発し合って滑稽さを出す句となっている。

⑤は、朝顔の咲いている朝、かつて島原の遊女であった女性が、今は行いすまして静かに茶の湯を楽しんでいる、という句である。「島原者」から受ける艶美さと「茶の湯」から受ける上品さや閑寂さが、朝顔の醸し出す清新な雰囲気のなかで溶け合って一つの世界を作っている。こちらは、互いの語が対照的な雰囲気を持ちながら、情趣を感じさせる句となっている。

以上のように、①から⑤は、いずれも秋成が蕪村一門に近づいた時期の発句であるものの、蕪村的要素は句によって濃淡があり、それぞれ違う趣向をもつ。蕪村的要素が比較的強い③の句にしても、王朝趣味に陶醉して創り上げられたものではなく、青梅を盗む若い女性に対する冷めた視線が混交している。そのことは、「青梅」と女性を詠んだ蕪村の句と比較するとより明快である。

青梅に眉あつめたる美人哉（「夏より」明和五年）（6）

蕪村の句は、「顰みにならう」の故事に材を取る。「顰み」とは、古代中国の美女西施が胸の病気に苦しみ眉をひそめた仕草を指す。その表情を醜女たちが真似て気味悪が

られたことから、「顰みにならう」は、身の程を知らずに人の物真似をすることの愚かしさをいうようになった。蕪村は、その故事を反転させ、中国の美女と違い、本朝の美人は青梅を眺めて、その酸っぱさを想像し眉根を寄せると詠んでいる。「青梅」によって、当代日本の美人に置き換えて詠みながらも、ほのかに浪漫性を感じさせる句となっている。

また、「盗む」という語を使った蕪村句に、

菓盗む女やは有おぼろ月（『蕪村句集』明和八年）（7）

というものがある。「菓盗む女」は、古代中国の姮娥（嫦娥）のことを指す。この人物は、西王母から夫の羿がもらった不死の菓を盗み、月の中に逃げた仙女である。一句は、朧月の優艶な光に情趣を感じ、やはり月に仙女はいるのか、と賛嘆する気持ちを表現したものである。この句も、神秘的な光を放つ朧月と、艶な趣のある「菓盗む女」という語が調和しているといえる。

以上のことをふまえると、秋成は蕪村と比べて、言語表現や構成といった趣向自体を

より重視して作句しているといえる。その結果、「青梅盗む」とそれ以外の語のように、取り合わさった二つの素材同士が対立し、一句の滑稽性や意外性が強調されることもあれば、「島原者」と「茶の湯」のように、素材同士が調和して、趣をもった句となることもあると考えられる。

このような秋成俳諧における表現方法の形成過程においては、金子金治郎氏（８）や中村幸彦氏（９）の指摘にあるように、宗因俳諧の影響は無視できないものと考えられる。もともと大坂の俳人にとって宗因は郷土の偉人であり、尊敬の対象であった。それに加えて、先述の通り、秋成は安永六年（一七七七）に宗因俳諧発句集『むかし口』を刊行するほど、宗因の俳諧を愛好する念が深かった。さらに、『也哉抄』の蕪村序には、「梅翁を慕ふといへども、芭蕉をなみせず」とあることから、秋成は宗因の俳風にかなり親しんでいたと考えられる。

また、秋成が宗因句と同一の言葉や典拠を使って作句した例もある。紹介する宗因の発句は、『むかし口』に収録されるものである。

秋や来るのう／＼それなる一葉舟 宗因

梅柳のう／＼あれに御立ある

無腸（『俳調義論』）

秋成の「梅柳」句は「梅翁の口まね」と題し、宗因の謡曲調をまねて詠んだものである。また、宗因には次の句のような言葉遊びが見られる。

駕籠はあれと只すね萩の花野かな

幸手の宿にて

是は偕さつてのやとの時雨哉

「萩」（脛）や「偕」（幸手）がそれであるが、秋成の句にも無腸改号前から掛詞を用いたものが見られるのは、第一章で見た通りである。これは宗因を俳系の祖とした大坂の紹廉門と交流していた時の影響が大きかったと考えられる。

ただ、秋成が宗因から取りいれたのは言語上の機智だけではない。既に金子氏によって指摘されている句であるが、次に紹介しておく。

月は入りぬ彼朝霧の明石潟

無腸（『去年の枝折』）

みじか夜や彼五文字に明石潟

宗因

両発句とも、柿本人麻呂の「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く船をしぞ思ふ」を典拠とすることは一目瞭然である。秋成は朝霧を詠み込み、宗因は「ほのぼのと」という五文字を詠み込んでいる。

雁啼て菊を垣根の宿りかな

無腸（『去年の枝折』）

雁鳴て菊屋のあるじのわたり候か

宗因

こちらは両句とも『伊勢物語』の「雁なきて菊の花さく秋はあれど春の海邊にすみよしの濱」を踏まえている。このような例は、秋成の発句のなかでも稀であり、和歌を典拠としてふまえながらも、宗因の句を意識して詠まれたものと思われる。ただ、金子氏も述べるように、秋成が学んだのは、典拠となった和歌そのものではなく、眼前の風景に和歌の世界を重ね合わせるといった観念的な趣向であったと考えられる。

以上のことから、秋成は宗因流の俳諧を通じて、より趣向性を重視する俳風を形成していったと考えられる。しかしながら、秋成の俳諧に情趣が存在しないという訳ではない。先述したように、②の句は機智的なものよりも情調的なものが一句を支配している。

これについて金子氏は、「俳句自身が要求する成長の方向」に従った結果、②のような「純粹に観念的なもののみ」で構成された句が生まれ、「一種華なる芸術の世界」を創り出していると述べている。確かに、②の句は詩的情趣を漂わせ、美的世界を展開している。しかし、②から⑤までの発句はほぼ同時期に作られたものであり、金子氏のように発句間に成長関係を見るのは無理があるのではないか。むしろ秋成は、自己の俳風のなかに宗因風、蕪村風の要素を取り込み、ある時は蕪村的に、ある時は宗因的に、またある時は別の俳人的に、というように各々の要素を自在に用いて、その時々の実感や真情を俳諧で表現していたといえる。

これは、『也哉抄』の統論で、俳諧について「あやしの俚語。聞とりがたき方言までも。心のゆくまゝに打出るものなれば。てにはも又それ／＼なる主どりして。奴・僕のはたらきをもなすべし」と主張していることと一致しているのではないか。現実から得られた印象を古歌によって再構成するといった趣向は、一見作為的・技巧的に思えるが、



自己の「心」の実感に基づいて創作していることには変わらない。この点では、秋成の俳諧文芸における信念は俳諧作品の上においても一貫しているといえる。

このような秋成の俳諧経験は、晩年の和歌の発想や題材等にも影響を与えることとなる。

注

(1) 『上方俳書集下』(上方藝文叢刊二―二)〔大谷篤蔵編、八木書店、一九八一年〕所収。

(2) 『古典俳文学大系13 中興俳諧集』所収。

(3) (2) に同じ。

(4) (2) に同じ。

(5) 長島弘明「秋成の俳歴―漁焉時代を中心に―」〔論集近世文学5『共同研究秋成とその時代』(勉成出版、一九九四年)、後に『秋成研究』(東京大学出版会、二〇〇〇年)所収〕。

(6) 『蕪村全集第1巻 発句篇』(講談社、一九九二年)所収。

(7) (6) に同じ。

(8) 「無腸俳句小見」〔『月刊日本文学』第二巻第一号、一九三一年。『秋成研究資料集成』第十二巻(ク

レス出版、二〇〇三年）所収」。

(9) 「上田秋成雑記(二) 秋成と俳諧」〔『中村幸彦著述集』第六卷所収。初出『俳句』第二十四卷  
第一号(角川書店、一九七五年)。〕

## 二、秋成の和歌に見る俳業の意義

秋成の晩年の俳諧は、蕪村との交流のあった中年期とは違い、雑俳的で力の抜けた俳風となり、浅野三平氏に「張りつめた芸術的意欲が窺われない」(10)と評される。その俳諧は、国学研究や和歌・和文創作の合間に楽しむ遊びであった。実際、前節で紹介したが、『俳調義論』には、宗因や来山・鬼貫など諸家の滑稽洒脱な俳風を真似た句が収められており、俳諧に対する晩年の秋成の気儘な態度が見受けられる。

では、秋成が晩年に打ち込んだ和歌についてはどうか。その詠風を確認したうえで、俳諧の影響を検討して行き、俳業の意義について考察していきたいと思う。

秋成の歌風は、多くの要素があり、一言では言い表しがたいが、「まこと」を表現することを重視していたことは、浅野氏(11)や吉江久弥氏(12)が言及されている。こ

の「まこと」とは、『春雨物語』（文化五年本）「歌のほまれ」に

歌よむはおのか心のまゝ、又浦山のたゝすまひ、花鳥のいろね、さかくいひたる  
ものにはあらず。是をなん、まことの道とはいふべけれ（13）

とあることから、己の正直で偽らない心のことを指し、「まことの道」とは、己の偽らない心を有りのまま表現することであるとわかる。これは『也哉抄』の主義主張と通底しているといえよう。

このような考えから、秋成の和歌は様々なしきたりによる束縛を嫌った自由なものであった。それは和歌の式目として存在する四季についての論から窺えるということは、丸山季夫氏（14）や日野龍夫氏（15）が指摘されている。『遠駝延五登』二（異文）〔享和三年（一八〇三）頃成立〕（16）では、

いにしへの哥は、あめつちの自然につきて、時との物を詠せし也。四の時との木草  
の花、鳥虫の声、年の遅速につきて定なかりし也。

と述べ、古代の和歌は四季のしきたりに拘泥せず詠まれていたと説き、以下長々と例を引いている。例えば「吉野の山ふみ、夏近きまで分入る歳もあり」や「なてしこは夏花なから久しかれば、秋の七草にかそへたり」等である。続いて、

一とせを四つに截たち、又十二月に隔なして、其垣守のこえさせしとする心のせはさよ。さる式と云物、いにしへはあらさりき。天に道ありて、寒暑温涼のうつりゆくにつきて、木草の花、鳥虫の声、おのか時とのありて、なとや法式にしたかひをらん。文かき哥よみては、法立さりしいにしへの事用ひましく云とも、物音おくれさいたつさまをまさ目に見るには、ことわりともうへなひかたし。

と述べ、今の和歌は、人為的な四季の枠を自然の景物に当てはめて、本来のあり方を見失っていると説く。つまり秋成は、春は鶯、秋は紅葉といった和歌における景物にとらわれることを批判しているといえる。この季節についての論は、『檜の杣』（寛政十二年（一八〇〇）起稿）序例（17）や『金砂』（享和三年（一八〇三）成）巻一終末文（18）、

『遠駝延五登』（享和三年頃成立）二（19）のほか、『胆大小心録』一四六（20）に見られ、秋成が好んで取り上げ敷衍した問題であった。また、『俳調義論』でも、「四季と云式ありて、れん歌ハもとより俳徒のわづらひとなりぬ」と、和歌だけではなく、詩歌全体の非として歎いている。

このように、創作の際に、季節の決まり事によつて自由を制限されることを秋成は拒絶した。季節以外の法についても同様である。実際、秋成の和歌を見ると、詠歌の際のさまざまな規範をしばしば逸脱し、自分の心に従つて、自由に創作しようとする態度が明らかである。

そこで、秋成の和歌が具体的にどのような規範を乗り越えて「心」を表しているのか見ていきたいと思う。

規範にとらわれない秋成歌については、日野龍夫氏が既に数首紹介されているため（21）、最初にそれ等について再検討した上で、新たな見解を加えていきたい。

まず、秋成が文法意識にとらわれずに詠んだ歌として、日野氏が指摘された例を次に挙げる。

梅花風に散る毎鶯の笠とられたるこゝちやはする（藤簑冊子）（22）

蘆しげみ葉うらにすがる夏虫の隠れてもほの見ゆる光は（藤簑冊子）

庭草になきにしものをきりぎりすうたて夜さむの床に近よる（藤簑冊子）

一首目の「毎（ごと）」については、「たび毎に」の意味で使っているが、和歌では「ごと」は「如く」の意味で使われることが普通なため、口語を無造作に持ち込んだものとされている。的確な指摘であると思うが、なお補足するなら、「如く」の意味の「ごと」は『万葉集』歌で多く使用されている。秋成の歌論は、当初の時点では、賀茂真淵の歌論の影響を受け、『万葉集』を尊ぶ姿勢が見られるという浅野氏の指摘がある（23）。真淵は秋成に数年間国学を指導した加藤宇万伎の師に当たる。しかし、この「毎（ごと）」の使い方からは、歌作においては秋成が万葉調のみに拘ってはいないことが窺える。

なお「やは」については、疑問の意味で使用されているが、反語の意味が本来普通であったと日野氏は指摘されている。右歌と同様の例としては「人やりの身をはわすれて風ふけはうめやはちるといこそねられね」、「散ことに花をさそへる棚はしの下ゆく水のきしの梅かえ」（以上詠梅花五十首）（24）がある。

二首目は「ほの見ゆ」という語が二句にまたがっており「優雅ならざる詠み方」であることを指摘されている。確かに、『新編国歌大観』や『私家集大成』および『夫木和歌抄』や『類題和歌集』で調べた限りでは、この言い方は見当たらない。

また、三首目は「なきにしものを」が和歌として無理な措辞であり、「庭草ではない」という口語を文語に持ち込んだと表現と指摘されている。これも同じく古歌には見いだせず、妥当な見解であろう。

次に、語彙・素材・発想に関して型にはまらないと日野氏が指摘された歌を挙げる。

ただならぬ雲の気色に門たててすはさればこそ野分ふく風（藤簍冊子）

恋ひよれど妻もさだめぬのらねこの声鳴きかはす軒に垣根に（秋の雲）（25）

一首目の「すはさればこそ」も、非和歌的な措辞とされ、「にわか

に空が曇って風が吹き始めたという、一種の不安をはらんだ雰囲気」を的確に表現していると評価されている。二首目の「のらねこ」も『夫木和歌抄』に二首採られてはいるものの、それ以外の古歌の用例は見当たらず、通常は歌人に敬遠される語と指摘されている。

これらの日野氏が挙げられた歌以外にも、語彙・素材・発想に関して秋成の融通無碍な態度が示された歌は多い。その中の典型例と思われる歌を次に挙げる。

いぎたなき朝戸をもるゝ花の香に日影も高し起きよいざ子ら（藤簍冊子）

下野や今も那須ののきつね原弓箭おひてぞ人のゆくなる（鶉居倭哥集）（26）

トととひて吉備津の釜のあしきねにおもひいやます恋に死なゝん（鶉居倭哥集）

一首目の「いぎたなき」は、『源氏物語』帚木に見られる語であるものの、非和歌的な語であることは意味や使われ方から明らかである。ただ、そのような語であるからこそ、「いざ子ら」という呼びかけと相まって、庶民的で温かい家庭の様子を表現しえているといえる。

二首目は、明らかに殺生石の説話をふまえている。玉藻前が那須野で殺されて石化し、通行する人に災いをなしたという話であるが、一首は、今の世でも弓矢を背負って狐を追う人がいる、といういかにも小説的な発想で作られた歌である。

三首目も、『雨月物語』「吉備津の釜」と同じ題材で作られており、小説的である。



このように、秋成の歌は、現実の中で実感したことや己れの心に浮かぶイメージを再構成して詠んだ自由なものであった。日野氏も指摘されているが、和歌の法や規範に縛られずに歌を詠むべきであるという考えは、京都歌壇の重鎮で、秋成と親交のあった小沢蘆庵の歌論のなかにも細部は違っているが存在する（27）。しかしながら、それを真に実践できたのは、自身の強烈な個性を基準にして主体的に判断、行動し、それを曲げなかった秋成であったといえる。

では、秋成が独自の詠風を創り上げることのできた背景には何があるか。やはりそこには、他の歌人とは異なり、文事の出発点が俳諧であったということが考えられる。

そこで、秋成の和歌における俳諧的な語彙・題材および発想を指摘し、俳諧の素養が和歌に与えた影響について述べていく。俳諧趣味をもつ秋成の和歌については、日野氏や吉江久弥氏が指摘されているが、それ等を改めて検討した上で、俳業の意義を述べたいと思う。

まず、先の「のらねこ」の歌について、日野氏は、俳諧の春の季語である「猫の恋」を念頭に置いていたと述べる。実際、秋成は、次のような歌を詠んでいる。

老ぬればあはれ恋せぬから猫の我とつながるうづみ火のもと（自筆画賛）（28）

老境の孤独さを猫によって慰める様子が表現されている。日常の一齣を詠んだもので、これも俳諧的な歌といえるであろう。

続いて、俳諧的な要素をもつ歌の例として日野氏が挙げられた五首を次に挙げる。

曇り日のいはせの森の時鳥あなま鳴きてうとむとも聞く（藤簾冊子）

夏ならぬ絵かきすさべる蝙蝠のそれも涼しき花のくさぐさ（藤簾冊子）

一日てふそれも栄えを朝露のひるまを待たぬ野辺の貌花（藤簾冊子）

何にこの茎葉とどめし花蓮浪もこぞめの色に見えしを（藤簾冊子）

何にこの落つる涙ぞ秋の日の夕吹く風におくる虫の音（献神和歌帖）（29）

まず、一首目の歌については、日野氏と見解の相違があるため、後に詳述する。

二・三首目の「それも」という語は、用法が近世的であると述べ、三首目についてはほとんど口語の「しかも」の意で接続詞的に用いていると指摘する。蕪村の発句に、

絵団扇のそれも清十郎にお夏かな（『蕪村句集』明和八年）

鶯を雀かと見しそれも春（『蕪村句集』明和八年）

月清しそれも阿漕が恨みかな（『落日庵』明和七年）（30）

といった用例があることから、秋成歌の「それも」の使い方は、俳諧由来のものとされている。蕪村の影響は晩年の発句に見られることから、妥当な意見と思われる。

四・五首目の「何にこの」は、古歌には全く見いだせない措辞であること、芭蕉句に、

何にこの師走の市にゆく鳥（『花摘』元禄二年）（31）

という発句があることを指摘し、芭蕉句の表現の魅力を認めた上での用法であるとされている。「何にこの」の語は『源氏物語』『末摘花』にも見られるため、俳諧の影響のみとは断定できない。ただ、秋成が芭蕉句を『也哉抄』で積極的に引用しているということを見ると、その影響を受けた可能性はあると考えられる。

日野氏の指摘された歌以外にも、俳諧的な語彙をもつ秋成歌はある。現時点で確認できた歌を次に挙げる。

しら／＼と窓のすき風身にしみて鐘よりはやき雪のあかつき（鶉居倭哥集）

人妻の是や卯月の夏衣馴ればかぶるならひ有る世に（藤簍冊子）

まず、「しら／＼と」という語についてであるが、「しら／＼し」という用例が古歌には多く、「しら／＼に」という例は『夫木和歌抄』に一首、「しら／＼と」という例は、『撰集抄』の江戸時代以来の流布本である慶安三年版に「しらじらとしらけたる夜の月影に雪かきわけて梅の花折る」とあるが、それ以前の版は「しらじらし」であった（32）。反対に俳諧では、多くの「しらじらと」の用例が見いだせる。したがって、「しらじらと」は近世的な口語であり、秋成は俳諧で目にしていたこの表現を、和歌に取り入れたと考えられる。

次に、「人妻」という語であるが、これは万葉歌に数多く見られるが、いずれも人の妻となっている美人に対しての恋心を歌ったものである。それに対して秋成の歌は、衣

更のときに、着慣れてしわのよった袴を着替えるように、馴れた夫を捨て、すぐに再婚する人もあるものだ、と、人妻に対してかなり辛辣な見方をしている（33）。発想がすでに俳諧的であるが、同じ「人妻」という語を用いた蕪村句を挙げると、万葉歌との違いが明らかになる。

人妻の暁起や蓼の雨（明和七年詠草）（34）

この句は朝早く起きて家事をこなす農家の人妻の姿を、流しの横に生えている蓼に降り注ぐ雨と取り合わせて詠んだものである。蕪村は秋成とは対照的に人妻に対する視線に暖かなものがあるが、恋情は持たない。秋成の歌も、生活の中で身近に見かけそうな人妻を詠んでいるという点で、蕪村句と共通しているといえる。

なお、吉江氏が俳諧性をもつとして挙げられた次のような述懐歌がある。

世を秋の此の身ながらもしづ／＼にあれとて人のいふがたのもし（画賛）

津の国のなにはにつけてうとまるゝ蘆原蟹の横走る身は（藤簍冊子）

我よりもまづしき人の世にもあればうばらちちひまくづる也（藤簍冊子）  
世の中にあふさきるさを身にしめてとありかゝりもいはてやみなん（鶉の屋）  
（35）

これらの歌に見える心境は、晩年の俳諧にも見られる。

死神に見はなされたか老の春（「年の夜俳諧」（36）『俳調義論』）

炭きらす夜はびんぼうをしぐれかな（『俳調義論』）

口切よ老がしゃく銭なしはてん（「俳諧短冊二十八葉」（37）『俳調義論』）

他にも吉江氏は次のような歌を俳諧的要素があるとして挙げられている。

年ごとにやらへど鬼のまうでくる都は人のすむべかりける（献神和歌帖）

また、発句と同種の題材を用いているものとして次の歌を挙げられている。

雲ふり夜のふけゆけば有馬山出で湯の室に人の音もせぬ（藤簾冊子）

これは、『去年の枝折』中の発句「雲ふる湯ざめの牀の夜もすがら」と同じ境地の歌とされている。「有馬山」は虚構であり、一首の風姿を整える役割をもつと吉江氏は指摘される。

さて、先ほど挙げた「あなかま」という語をもつ歌についてであるが、日野氏はこの歌に関して、『源氏物語』夕顔に見えるものの、平安時代の口語であり、歌にふさわしい語ではないとされている。

秋成自身の発句に、

あなかまと青梅盗む衣の音

とあることも、その根拠とされている。

確かに「あなかま」と聞いて近世人が最初に思い浮かべたのはおそらく『源氏物語』の用例であろう。しかし、『国歌大観』第一、二巻を調べたところ、勅撰集に「あなかま」を使用した歌が五例存在することを考えると、この語が歌にふさわしくないとはいえないのではないか。また「あなかま」という語は『新古今和歌集』の用例のように、

みかりするかたののみにふる霰あなかもまだき鳥もこそ立て

崇徳院

ゆかちかしあなかもよはのきりぎりす夢にも人の見えもこそすれ

藤原基俊（38）

といった、自然や動植物の出す音をうるさいと聞いて「あなかも」とするものが主であり、秋成歌もそれに当てはまる。したがって、秋成は俳諧経験を基礎として「あなかも」という語を発想しながら、それに拘泥せず自分の実感を表現するため、伝統的な歌語として用いたといえる。

秋成は、晩年の随筆である『胆大小心録 書おきの事』で次のように述べている。

食祿も藝技も、天稟とおやのたま物なれば、下手しやとてしや〔う〕事が無い。梅に鶯、道成寺、三輪、おさだまりの事では、風韻といふ事にはいたられぬ。風韻といふ事、うまれ付と習ふていたるとあり。習ふていたつた故、さてもしんとい事しやあつた（39）。

「梅に鶯、道成寺・三輪」は、和歌の規範といって差し支えないであろうが、そのよう



なものだけでは、風趣をもった和歌を詠むことはできないと秋成は述べる。その風韻は先天的なものと後天的なものがあるが、自分には生まれつきそれがなかったので、勉強して身につけるしかなく苦しかったと振り返る。また同じ『胆大小心録 書おきの事』では、「翁わかき時は俳かいとかいふ事を習（う）て、凡四十ちかくまで、是よりほかの遊びはなかりし」と述べ、人から「哥よめ。はいはいはいやし」と言われても、「歌はお公家さまのまねが出来るものか」と反発したという記述がある。この「四十ちかくまで」には議論があるが、それはひとまず置いておく。ここで言いたいのは、秋成の発言から、俳諧経験に対する負い目と、和歌に対するコンプレックスが感じられるということである。つまり、俳諧経験は、秋成歌の語彙や題材、発想に影響を与え、他に類をみない個性を獲得させたが、同時に秋成にとって詠歌の際の障害ともなり、それを克服するため、和歌の考究に勤しんだのではないか、と考えられるのである。その結果生まれたのが、秋成独特の歌風であったといえるのではないであろうか。

おわりに

日野氏が述べるように、秋成の歌風に俳諧的な表現を見いだすことができるのはこれまで確認してきた通りである。しかしながら、その表現は直観的に用いたものではなく、秋成が己の心を偽りなく表現するために選択したものと思われる。例えば、庶民的な世界を詠むときには、俳諧的な語彙や素材を用いて、王朝物語的な世界や自然を詠むときには和歌的な用法に従った、といったことが考えられる。秋成は勝手気儘に歌を詠んだのではない。俳諧体験は自己の語彙や発想の源泉に結びついており、それを取り除くことはできないため、一層和歌の研鑽に励んだと考えられる。その結果自己の中に吸収した全ての要素のなかから、「おのが心」を表すための素材を取り出し、独自の世界を創り上げることができたのだといえる。以上のことから、秋成の俳業は、秋成の歌風に影響を与え、幅広い詠みぶり、自在さをもたせるに至ったといえよう。

注

- (10) 「上田秋成晩年の俳諧―その俳諧賛二巻をめぐつて―」(『国語と国文学』第四十巻第七号、一九六三年七月、『秋成研究資料集成』第十二巻(クレス出版、二〇〇三年)所収)。

- (11) 『増補秋成全集とその研究』研究篇「七 秋成の歌論」(おうふう、二〇〇七年)。
- (12) 『歌人上田秋成』第二部「秋成の歌論」(桜楓社、一九八三年)。
- (13) 『上田秋成全集』第八卷(中央公論社、一九九三年)所収。
- (14) 「上田秋成の歌学考」(『国学者雑攷』(吉川弘文館、一九八二年)所収)。
- (15) 「本居宣長と上田秋成」(『宣長・秋成・蕪村』(日野龍夫著作集2、ぺりかん社、二〇〇五年)所収。
- (16) 『上田秋成全集』第一卷(中央公論社、一九九〇年)所収。
- (15) 『上田秋成全集』第二卷(中央公論社、一九九一年)所収。
- (17) 『上田秋成全集』第三卷(中央公論社、一九九一年)所収。
- (18) (17)に同じ。
- (19) (16)に同じ。
- (20) 『上田秋成全集』第九卷(中央公論社、一九九二年)所収。
- (21) (11)に同じ。
- (22) 『上田秋成全集』第十卷(中央公論社、一九九一年)所収。
- (23) (15)に同じ。

(24) 『上田秋成全集』第十二卷（中央公論社、一九九五年）所収。

(25) (24) に同じ。

(26) (24) に同じ。

(27) 小沢蘆庵『布留の中道』（寛政十二年（一八〇〇）刊）「塵泥」には「昔人の歌を詠める、みな心より詠み出でたる也」「されば我心に先立つものなし。人に習ひて詠まず。作例に拠りて詠まず。是無法無師の証なり」とある。なお「塵泥」には、日常的な雅言で歌を詠むべきとする、有名な「ただごと歌」についての論述がある。『新日本古典文学大系 68 近世歌文集下』所収。

(28) 『増補秋成全歌集とその研究』所収。

(29) (24) に同じ。

(30) 『蕪村全集』第一卷（発句篇）では、引用三句のうち、「絵団扇の」句の下五が「お夏哉」、「鶯を」句の中七が「雀歟と見し」と表記される。

(31) 『新編日本古典文学全集 70 松尾芭蕉集①』では、「何に此師走の市にゆくからす」と表記される。

(32) 『撰集抄全評釈』（笠間書院、二〇〇三年）解説。

(33) 和歌の解釈は『新日本古典文学大系 68 近世歌文集下』に拠った。

(34) (30) に同じ。なお、発句の解釈も同書に拠る。

(35) 『上田秋成全集』第十一卷（中央公論社、一九九四年）。

(36) 柏原家文書中の上田秋成稿本類所収（大阪府立中之島図書館蔵）。文化五年（一八〇八）成。

「新出の上田秋成稿本類―柏原家文書からの翻刻と紹介―」（『大阪府立図書館紀要』第三十一号、一九九五年三月）に翻刻（抄録）。

(37) 文化年間成立。柿衛文庫蔵。

(38) 『国歌大観』第一巻に拠る。

(39) (20) に同じ。

## 結論

本稿では、秋成が文業を転換した理由や、秋成俳諧の性質や俳諧観、さらには俳諧経験が秋成の和歌に与えた影響について考察した。

第一章では「漁焉の俳諧」と題し、第一節で、播磨の俳人滝瓢水の追善集『おそねはん』に入集する「漁焉」号の秋成の追悼句を紹介した。またその発句によって、先行研究で秋成との親交を指摘された高井几圭や小野紹廉といった大坂の宗匠たちの死だけではなく、瓢水の死も、秋成の新たな文事を目指す契機となっていることを確認した。

第二節では、松木淡々と小野紹廉の俳歴を中心に京大坂俳壇史を通観し、青年時代の秋成が宝暦期の大坂俳壇から受けた影響について検討した。その上で、秋成が宝暦期末に俳壇から離れた理由として、几圭や紹廉、瓢水といった宗匠達の相次ぐ死により、秋成にとって俳諧のあそびを行う場が失われたことがあると考察した。また、宝暦から明和にかけての大坂俳壇で、蕉風復古の機運が高まっていたことが、秋成に新たな文事への転換を促した契機の一つとなったと論じた。

第二章は「無腸改号後の俳諧」と題し、第一節では、秋成が「無腸」と改号した後の城崎

旅行で、自己の学芸の問い直しを試み、挫折したことを指摘した。

また、第二節では、同旅行を題材とする紀行文『去年の枝折』と『秋山記』を対照させ、『去年の枝折』翻刻の誤りを正し、後半の旅程を整理した。その上で、芭蕉や蕉門の漂泊批難を経て、無腸独自の俳諧世界を志向していることを指摘した。

第三節では、『去年の枝折』所収句は、『秋山記』所収歌の典拠と共通するものがあり、かつ古歌や俳諧を自在に典拠とすることを確認した。

第四節では、秋成の俳諧について「外部志向をもっていない」とする高田衛氏の指摘と異なり、『吉野山の詞』発句は文人たちとの交流をふまえて作られていることを述べ、秋成の俳諧の風流が外部に向かって発揮されることがあったことを確認した。『吉野山の詞』の享受者層については、元々の所蔵者が確認できなかったため、秋成の周辺にいた京大坂の文人グループと推測した。ただ、俳諧作品であるため、秋成と交流のあった几董や夜半亭門の俳人達との関係も想像できる。この事について本稿では考察が及ばなかったため、『吉野山の詞』を生み出した京大坂の文人の交遊状況については、今後さらに研究を進めていきたい。

第三章は、「秋成と俳諧」と題し、第一節『也哉抄』に見る秋成の文芸論「で、俳諧語法書『也哉抄』を通じて、秋成の文芸論を検討し、語の「本義」を最重要視しながら、己の「心」

を様々な文芸様式で表すことを理想としていたと論じた。

第二節『俳調義論』に見る俳諧観」では、晩年の自作自撰句集『俳調義論』は、秋成の筆蹟を求める動きに応じて成立したことを指摘した。次に、作品中の句評から、秋成は、上方俳壇における自派の権威づけのための宗因顕彰の動きに批判的であったことを確認した。また、秋成は、日常語の意外な取り合わせと、自然な言葉づかいによる表現を重視する俳諧観をもつことを明らかにした。その上で、この俳諧観は『也哉抄』の統論と共通した考えであることを指摘した。

第三節「無腸の俳業」では、几董編『続あけがらす』に入集する発句の検討を通じて、秋成の俳風が融通無碍な側面をもつことを指摘した。さらに、秋成の和歌に見られる俳諧趣味や小説的要素を指摘し、俳諧経験が和歌にも影響していたこと、それに止まらずに秋成が和歌の研鑽を重ねた結果、秋成独自の自在な歌風が創り出されたと結論づけた。

なお、第一章の第二節で、蕉風復興運動の中心にあった蝶夢を取り上げたが、秋成との直接的・間接的な交渉の有無については十分な考察に至らなかった。明和期以降の蝶夢は蕪村や嘯山との交流も絶えていたという田中道雄氏の指摘（1）もあるため、秋成との直接の関わりは考えにくいという面はある。しかしながら、『也哉抄』に反駁した二柳と蝶夢との関



係、あるいは蝶夢と交流を続けた几董の存在をふまえると、なお検討の余地はあると考えられる。

また、秋成俳諧の全体像を解明するためには、全発句を検討するべきかと思うが、本稿では、青年期の追善句、『去年の枝折』の全発句と『俳調義論』の発句の一部、および『続あけがらす』に入集する発句の検討に止まった。また、俳諧的な語彙や題材、発想を含む和歌については、俳諧からの影響とのみ言えるか慎重に検討する必要があるため、本稿では数例のみ紹介した。以上のような検討・分析すべき問題については、本稿の考察を進める過程で得られた知見をもとに、今後も研究を進めていきたいと思う。

本稿では、秋成の俳業について、文事における最初の転機を秋成に経験させたこと、中年期では国学研究の成果を取り入れて独自の俳風をもつに至ったこと、さらには晩年の和歌創作に大きな影響を与えたということを結論としたい。

注

(1) 「蕉風中興運動の二潮流―京俳壇を中心に―」〔同氏『蕉風復興運動と蕪村』（岩波書店、二〇〇〇年）〕。

## 【使用・参照テキスト一覧】

藤井乙男氏『秋成遺文』（増補版）（修文館、一九二九年）

中村幸彦氏『日本古典文学大系 56 上田秋成集』（岩波書店、一九五九年）

浅野三平氏『雨月物語・癩癧談』（新潮社、一九七九年）

『上田秋成全集』第一～十二卷（中央公論社、一九九一～一九九五年）

## 【参考文献】

### ・書籍

『俳諧文庫 18 俳諧珍本集』（博文館、一九〇〇年）

『俳諧叢書 3 名家俳句集』（博文館、一九一三年）

『和露文庫 蕉門珍種百種別巻』（思文閣、一九二八年刊、一九七一年複刻）

北田紫水氏『俳僧蝶夢』（大蔵出版、一九四八年）

『藤井乙男著作集 4』（秋田屋、一九四八年）

一海知義氏注『陶淵明（中国詩人選集 第4巻）』（岩波書店、一九五八年）

山田孝雄氏『俳諧文法概論』（宝文館、一九五六年）

- 『俳句講座 1 ～ 3』（明治書院、一九五八～五九年）
- 『日本古典文学大系 46 芭蕉文集』（岩波書店、一九五九年）
- 竹岡正夫氏『富士谷成章全集 上巻』（風間書房、一九六一年）
- 浅野信氏『切字の研究』（桜楓社、一九六二年）
- 高田衛氏『上田秋成年譜考説』（明善堂書店、一九六四年）
- 櫻井武次郎氏『元禄の大坂俳壇』（前田書店、一九六七年）
- 高田衛氏『上田秋成研究序説』（寧楽書房、一九六八年）
- 鶴月洋氏『雨月物語評釈』（角川書店、一九六九年）
- 浅野三平氏『秋成全歌集とその研究』（桜楓社、一九六九年、二〇〇七年におうふうから増補版刊）
- 『播磨鑑（全）・摂陽群談（上）』（歴史図書社、一九六九年）
- 『本居宣長全集』第五卷（ちくま書房、一九七〇年）
- 高坂好氏『赤松円心・満祐（人物叢書一五五）』（吉川弘文館、一九七〇年）
- 『古典俳文学大系 1 ～ 13』（集英社、一九七〇～一九七二年）
- 宮田正信氏『雑俳史の研究』（赤尾照文堂、一九七二年）
- 宮本三郎氏『蕉風俳諧論考』（笠間書院、一九七四年）

新藤和義氏『上田秋成の万葉学』（桜楓社、一九七四年）

岡田利兵衛氏編『伊丹文芸資料』（伊丹叢書1）（伊丹市行政資料室、一九七五年）

岡田利兵衛氏編『鬼貫全集 三訂版』（角川書店、一九七八年）所収。

大谷篤蔵氏編『上方俳書集上・下』（上方藝文叢刊二―一・二、上方藝文叢刊刊行会、八木書店、一九

七九年・一九八一年）

久松潜一監修『賀茂真淵全集』（続群書類従完成会、一九七九年）

久富哲雄氏『おくのほそ道全訳注（講談社学術文庫）』（講談社、一九八〇年）

鷺山樹心氏編『海道狂歌合 文化八年版本』（和泉書院、一九八一年）

丸山季夫氏『国学者雑攷』（吉川弘文館、一九八二年）

『中村幸彦著述集』第六卷（中央公論社、一九八二年）

『中村幸彦著述集』第三卷（中央公論社、一九八三年）

吉江久弥氏『歌人上田秋成』（桜楓社、一九八三年）

『随筆百花苑』第六卷（中央公論社、一九八三年）

『芭蕉講座第四卷 発句・連句鑑賞』（有精堂、一九八三年）

浅野三平氏『上田秋成の研究』（桜楓社、一九八五年）

- 山下一海氏『芭蕉の世界（角川選書）』（角川書店、一九八五年）
- 飯田正一氏編『小西来山全集 前・後編』（朝陽学院、一九八五年）
- 大谷篤藏氏『俳林閒歩』（岩波書店、一九八七年）
- 森山重雄氏『秋成 言葉の辺境と異界』（三一書房、一九八九年）
- 長島弘明氏編『新潮古典アルバム 上田秋成』（新潮社、一九九一年）
- 『蕪村全集』第一卷（発句篇）（講談社、一九九二年）
- 『新日本古典文学大系 72 江戸座点取俳諧集』（岩波書店、一九九三年）
- 大内初夫氏監修『時雨會集成』（義仲寺ほか編、一九九三年）
- 楠元六男氏『享保期江戸俳諧攷』（新典社、一九九三年）
- 『加古川市史』（加古川市史編纂専門委員会、一九九四年）
- 勝倉寿一氏『上田秋成の古典学と文芸に関する研究』（風間書房、一九九四年）
- 樋口功氏『新芭蕉講座 第5巻―連句篇〔下〕』（三省堂、一九九五年）
- 木越治氏『秋成論』（ぺりかん社、一九九五年）
- 『日本俳書大系 10 中興俳諧名家集』（日本図書センター、一九九五年）
- 『日本俳書大系 16 俳諧系譜逸話集』（日本図書センター、一九九五年）

- 『日本隨筆大成 第三期二二 翁草（4）（新裝版）』（吉川弘文館、一九九六年）
- 『撰津名所図会』第二卷（版本地誌大系10、臨川書店、一九九六年）
- 新日本古典文学大系『近世歌文集 下』（岩波書店、一九九七年）
- 風間誠史氏『近世和文の世界―蒿蹊・綾足・秋成』（森話社、一九九八年）
- 中野三敏氏『十八世紀の江戸文芸』（岩波書店、一九九九年）
- 井上泰至氏『雨月物語論―源泉と主題―』（笠間書院、一九九九年）
- 長島弘明氏『秋成研究』（東京大学出版会、二〇〇〇年）
- 田中道雄氏『蕉風復興運動と蕪村』「はじめに」（岩波書店、二〇〇〇年）
- 瀬木慎一氏『江戸・明治・大正・昭和の美術番付集成 書画の価格変遷二〇〇〇年』（里文出版、二〇〇〇年）
- 年）
- 尾形仿氏『おくのほそ道評釈』（角川書店、二〇〇一年）
- 深沢了子氏『近世中期の上方俳壇』（和泉書院、二〇〇一年）
- 櫻井武次郎氏『奥の細道の研究』（和泉書院、二〇〇二年）
- 近衛典子氏編『秋成研究資料集成』第十二卷（和歌・俳諧・その他論文集）（クレス出版、二〇〇三年）
- 山下久夫氏『秋成の「古代」』（森話社、二〇〇四年）

櫻井武次郎氏『俳諧史の分岐点』（和泉書院、二〇〇四年）

飯倉洋一氏『秋成考』（翰林書房、二〇〇五年）

日野龍夫氏『宣長・秋成・蕪村』（日野龍夫著作集2、ぺりかん社、二〇〇五年）

多治比郁夫氏編『日本書誌学大系 89（2） 京阪文藝資料 第二卷』（青裳堂書店、二〇〇五年）

飯倉洋一氏・木越治氏編『秋成文学の生成』（森話社、二〇〇八年）

加藤裕一氏『上田秋成の紀行文 研究と注解』（実践女子学園学術・教育研究叢書 15、二〇〇八年）

富田志津子氏『播磨の俳人たち』（和泉書院、二〇一〇年）

井上泰至氏・一戸渉氏編『春雨物語』（三弥井書店、二〇一二年）

一戸渉氏『上田秋成の時代』（ぺりかん社、二〇一二年）

高田衛氏『完本 上田秋成年譜考説』（ぺりかん社、二〇一三年）

#### ・雑誌掲載論文

中村幸彦氏「秋成伝の問題点」（『国文学 解釈と鑑賞』一九五八年六月）

浅野三平氏「上田秋成晩年の俳諧―その俳諧賛二巻をめぐって―」（『国語と国文学』第四十巻第七号、

一九六三年七月）

田中道雄氏「蝶夢の俳壇登場をめぐる諸問題（上・中・下ノ一・二）（『語文研究』第二十一・二十八・三十・三十三号、一九六六年二月、七〇年五月、七一年三月、七二年五月）

清田啓子氏『「吉備津の釜」の磯良―命名についての報告―』（『駒澤大学文学部研究紀要』第二十八号、一九七〇年三月）

加藤定彦氏「大伴大江丸の研究」（『国文学研究資料館紀要』第二号、一九七六年三月）

長島弘明氏「秋成資料雑俎（二）―服部天神文庫・友山文庫資料他―」（『実践国文学』第二十四号、一九八三年十一月）

高田衛氏「翻刻・宗因俳諧発句集」（『東京都立大学人文学報』第一七三号、一九八五年三月）

金田房子氏『也哉抄』論述の性格」（『国語国文』第六七三号、一九九〇年十月）

藤田真一氏「几圭の没年―『其雪影』の成立をめぐって―」（『大坂俳文学研究会会報』第二十六号、一九九二年十月）

石川真弘氏「秋成と俳諧」（『上田秋成全集』第十一卷、月報11、一九九四年二月）

多治比郁夫氏「新出の上田秋成稿本類―柏原家文書からの翻刻と紹介―」（『大阪府立図書館紀要』第三十一号、一九九五年三月）

楠元六男氏「佐久間柳居（1）―享保期江戸俳壇における芭蕉復古運動推進者の実態」（『都留文科大学



大学院紀要』第一号、一九九七年）

正本綏子氏「『秋山記』冒頭における『伊勢物語』第一六段踏襲の意図」（『国文学攷』第一五七号、広

島大学国語国文学会、一九九八年三月）

神楽岡幼子氏「『諸道聴耳世間猿』と歌舞伎」（『演劇研究会会報』第二十五号、一九九九年六月）

深沢了子氏「青蕪号と秋成新出句六句」（『大坂俳文学研究会会報』第三十四号、二〇〇〇年十月）

東聖子氏『上田秋成『去年の枝折』考―俳諧的架空紀行の系譜と三重構造の心―』（『国文目  
白』第四十号、二〇〇一年二月）

井田太郎氏「抱一の江戸の表象」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要四十六 第三分冊』、二〇〇  
一年二月）

石川真弘氏「上田秋成発句集」（『ビブリア』第一一五号、二〇〇一年五月）

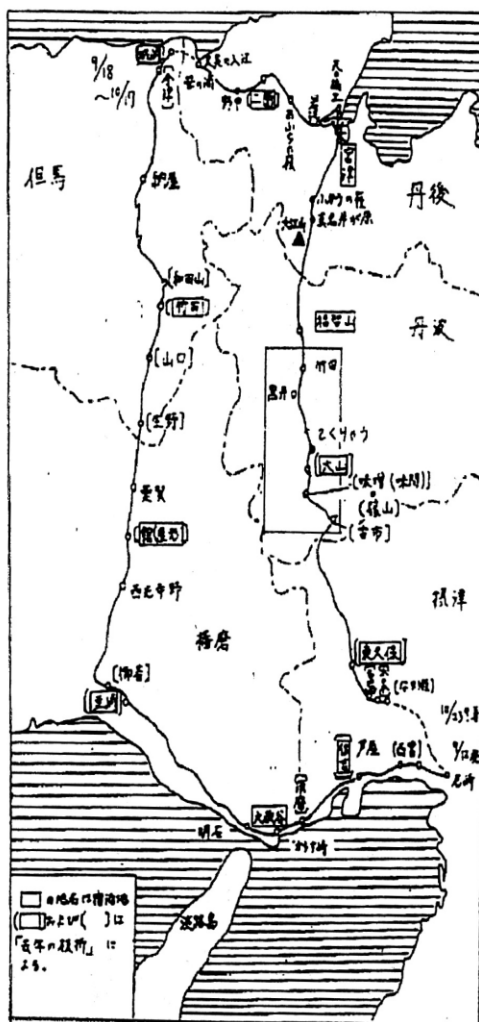
根来尚子氏「秋成の字万伎入門―『文反古』所収書簡をめぐって」（『上方文藝研究』一、二〇〇四年五  
月）

長島弘明氏「講演 断簡零墨の中の秋成―『鶉居帖』について―」（『ビブリア』第一三四号、二〇一〇  
年十月）所収。

【稿末資料】

【表1】

・去年の枝折と行程図（加藤裕一氏の論考及び今回の発表内容をもとに作成）



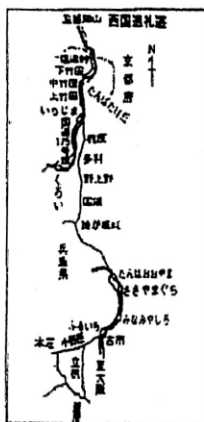
・竹田しな市街道図

「春木一夫

京都・兵庫歴史散歩  
謎の丹波路

（神戸新聞出版センター）

（一九七七）  
より



【表2】『吉野山の詞』（天理図書館蔵）

